



No.	名稱	性質	題目	著者	出版社	出版年
88	鷹尾城 (高尾城)	(28)	天正12年(10月7日)	上井實業日記より『柳川市史 史料編3 廣地氏・田原氏史料』P372	田尻氏、鳥掛氏に使者を遣わす。現在、「高尾之城」に入郎公するところが、妻子が能登守の入貢となつてゐる。『江之關』(江浦)は、その中に自分の内衆もいるため頭領によつて、「江之關」は容易く攻撃できることを伝える。	田尻氏、鳥掛氏は能登守の入貢となつてゐる。「高尾之城」に入郎公するところが、妻子が能登守の内衆もいるため頭領によつて、「江之關」(江浦)は、その中に自分の内衆もいるため頭領によつて、「江之關」は容易く攻撃できることを伝える。
参考	天正12年			鷹野家譜／『柳川市史 史料編3 廣地氏・田尻氏史料』P373		
K9	中島城	(1)	(天正15年) 8月14日	立花宗矩好行 尾行扶	米多比鶴人家文書／『大和町史 資料編』P961	立花宗矩 左近間財
K10	柳河城 (柳河城)	参考	(天正6年3月2日)	P414、「柳川市史 第7巻」	蒲原正之「久留米市史 第7巻」	蒲原正之「久留米市史 第7巻」
			(天正8年) 8月28日	龍造寺信昌 武持	P414、「柳川市史 史料編3 廣地氏・田 (龍造寺) 隆 火人火燒 信昌」	龍造寺信昌 火人火燒 信昌
参考	天正8年			P30 P30	佐佐木貢史史料集成 古文書編第21 篇	佐佐木貢史史料集成 古文書編第21 篇
		(2)	(天正9年) 6月9日	大友義統 善次 33歳	P43、「柳川市史 史料編3 廣地氏・田尻 氏史料」P43、大友家文書卷2045／「大友家文書史料 卷2045」第1部構成(6) P168 間注落承狀34、第1部構成(6) P295、大友家文書卷2045 氏史料」P33、「柳川市史 史料編3 廣地氏・田尻 氏史料」P34、「柳川市史 史料編3 廣地氏・田尻氏史料」P34	大友義統 善次 33歳 大友義統 善次 33歳
		(3)	(天正9年) 6月14日	大友義統 善次 33歳	P42、「柳川市史 史料編3 廣地氏・田尻氏史料」P42	大友義統 善次 33歳
参考	天正9年			間注落承狀 氏史料」P346	間注落承狀 氏史料」P346	間注落承狀 氏史料」P346
参考			天正10年4月	大友義統 善次 33歳	P30	大友義統 善次 33歳
		(4)	(天正12年) 4月16日	戸次道雪 (櫛) ・高橋經 通 源清繁	五條家文書261／『史料叢集 五條家文書』P188	高橋 経通 (櫛) 源清 繁
		(5)	(天正12年) 9月3日	戸次道雪 (櫛) ・高橋經 通 源清繁	立花左近宗矩 (櫛)	立花左近宗矩 (櫛)
		(6)	(天正15年) 4月26日	立花宗矩好行	五條家文書304／『史料叢集 五條家文書』P224	立花左近宗矩 (櫛)
参考			天正15年6月7日	立花宗矩好行 等	立花宗矩好行 等	立花宗矩好行 等
		(7)	(慶長5年) 10月21日	黒田如水書状 P143	鷹野家譜 古文書327／『佐賀県史料集成 古文書編第21巻』 P384 黒田如水書状 P143	黒田如水 鷹野家譜 古文書編第21巻 P384 黒田如水 鷹野家譜 古文書編第21巻 P384
		(8)	(慶長5年) 10月晦日	鷹島直友 茂達秀書状 P22	鷹島直友 茂達秀書状 P22	鷹島直友 茂達秀書状 P22



第10章坂井軍		年月日	第11	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	第12	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」
第11 筑後国軍		年月日	第12	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」	第13	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」
<第10章坂井軍>		(1) 永安8年2月日	門司型製銅	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P176	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」
(1) 永安8年2月日		門司型製銅	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P176	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」	
(2) 永安8年2月日		門司型製銅	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P177	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」	
(3) 永安8年8月日		門司型製銅	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P177	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」	
(4) 永和3年3月日		毛利元春軍忠	毛利家文書22/『増補訂正編年大友史料8』	P141	毛利石高前元	
(5) 永和4年11月日		備讃軍直軍 忠政案	小畠角文書14/『佐賀県史料集 古文書編第17巻』	P177	毛利石高前元	
(6) 永和4年11月日		大崎忠軍忠状	小畠角文書14/『佐賀県史料集 古文書編第17巻』	P177	毛利石高前元	
(7) 永和4年11月日		大島勝軍忠状	『増補訂正編年大友史料8』 289、P177	P563	毛利石高前元	
(8) (未詳) 閏8月13日		大友義統兵狀	『増補訂正編年大友史料8』 289、P177	P563	毛利石高前元	
<第11章筑後軍>		年月日	第12	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P174	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』
(1) 繁永4年2月3日		荒木家有軍忠	荒木近藤文書14/『久留米市史 第7巻』	P174	荒木家有、菊池武敏以下因後院により、「筑後國元年以來の軍忠を報告。これにについて、「承了」(花押)	
(2) 地武5年1月28日		一色道幹軍勢	肥前福田文書6989/『南北朝遺文 九州編第7巻』	P14	「(花押)」	
(3) 繁永3年4月2日		肥後光信軍忠	肥後光信文書1498/『南北朝遺文 第2巻』	P63	「(花押)」	
(4) (正平6年) 10月25日		五條賴元嘗状	豊後入江文書2228/『南北朝遺文 九州編第3巻』	P229	「(花押)」	
(5) (正平6年) 10月25日		五條賴元嘗状	豊後入江文書3229/『南北朝遺文 九州編第3巻』	P229	「(花押)」	
参考 天正14年7月8日		吉田家定兵11/『久留米市史 第7巻』	P392	「(花押)」		
<第11章筑後軍>		年月日	第12	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P176	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』
(1) 繁永4年4月21日		荒木家有軍忠	荒木近藤文書18/『久留米市史 第7巻』	P176	荒木家有、菊池武敏以下因後院により、「筑後國元年以來の軍忠を報告。これにについて、「承了」(花押)	
(1) 繁永4年2月日		門司型製銅	門司文書22/『増補改訂中世北九州落日の歴史』	P277	門司型製銅、筑後国において「石垣城」・「耳輪山」・「笠森」・「原木城」	
(1) (天正9年) 10月10日		大友所蔵	門司所文書(1) /『西国武士団関係史料集32』	P35	門司所文書(1) /『西国武士団関係史料集32』	

高良山		正徳 年	月日	高良山	高良山	高良山	高良山	高良山
F4	中尾源誠	(1)	應永5(10月)日	龍造寺家文書・忠狀	龍造寺家文書・忠狀	龍造寺家文書・忠狀	龍造寺家文書・忠狀	龍造寺家文書・忠狀
				吉川家文書第1卷／「佐賀県史料叢成 古文書編第3卷」P385	龍造寺家文書第1卷／「南北朝文書1271」／「南北朝文書157」P385	龍造寺家文書第1卷／「南北朝文書65」P82、肥後忠貞買 賣書1264／「九州編第1卷」P383	龍造寺家文書第1卷／「南北朝文書65」P82、肥後忠貞買 賣書1264／「南北朝文書157」P383	龍造寺家文書第1卷／「南北朝文書65」P82、肥後忠貞買 賣書1264／「南北朝文書157」P383
(2)	應永5(10月)16日	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀
(3)	應永4(8月)日	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀	志賀惣房原忠 狀
F5	ノ別城	参考	天正10(4月)	織部氏寧方堂 書案	織部氏寧方堂 書案	織部氏寧方堂 書案	織部氏寧方堂 書案	織部氏寧方堂 書案
F6	極現岳城	参考		音聞集／「大日本史料11編」P377	音聞集／「大日本史料11編」P377	音聞集／「大日本史料11編」P377	音聞集／「大日本史料11編」P377	音聞集／「大日本史料11編」P377
				北別院記／「大日本史料11編」P376	北別院記／「大日本史料11編」P376	北別院記／「大日本史料11編」P376	北別院記／「大日本史料11編」P376	北別院記／「大日本史料11編」P376
<特定期間>								
N	高良山	(1)	(正平17年) 6月11日	空山自空書状	元前光淨寺文書7084／「南北朝文書 九州編第7卷」P43	空山自空書状	空山自空書状	空山自空書状
		(2)	永和3(3月)日	吉川經見筆狀	吉川家文書5389／「南北朝文書 九州編第7卷」 P206	吉川經見筆狀	吉川經見筆狀	吉川經見筆狀
		(3)	(天正12年) 8月29日	戸次道雪・高 橋経通筆狀	広島大学所蔵備文書40／「柳川市史 史料編3 清池氏」P13	(高橋) 駿 運・道雪	(高橋) 駿 運・道雪	(高橋) 駿 運・道雪
		(4)	(天正12年) 9月3日	戸次道雪筆 写	鷹野家譜／「柳川市史 史料編3 清池氏・田尻氏 P370	(高橋) 道雪	(高橋) 道雪	(高橋) 道雪
		(5)	(正平17年) 6月11日	空山自空書状	元前光淨寺文書7084／「南北朝文書 九州編第7 卷」P43	空山自空書状	空山自空書状	空山自空書状

## VII 城館関連地名一覧

### <凡例>

- 本章では、報告対象地域における城館に関連する地名を一覧にしたものである。
- 城館に関連する地名とは、城（シロ・ジョウ）・館（タチ・タデ）・屋敷・門・矢倉・闇・垣内・土居（ドイ）・府・丸・蔵（クラ）・城戸（キド）・鍛治・射場・的場・堀切のほか、武器あるいは合戦に関連すると思われる地名、あるいはその他城館に関連すると思われる地名を指す。
- 地名の抽出は、「明治十五年字小名調」（『福岡県史資料第七輯』1937年福岡県編集・発行）に搭載された地名を基本とし、これらに搭載されていない現在残る小字等の地名を補完的に追加したものである。地名の抽出に当たっては、服部英雄氏（福岡県中近世城館跡詳細分布調査指導委員・九州大学大学名誉教授）が作成したデータを利用するとともに、山門郡、三池郡については、事務局で抽出を行った。
- 現在、城館と判明しているものと直接つながりがある地名については、別の欄を設けて、他の地名と区別した。なお、今回あげられた大半の地名には、中近世城館とは無関係のものが多数含まれていると考えられるが、それらの対別は困難であり、また今後の調査研究の備えとして、あえてその全てを掲載することとした。

旧村名 (大字)	関連地名	旧村名 (大字)	関連地名
<筑後国制原郡>			
肥后郷	肥后元・内島屋敷	大朴	一向屋敷・古屋敷・北屋敷・中屋敷・三層敷・内屋敷
下高崎		五郎丸	屋敷ノ一・屋敷ノ二・屋敷ノ三・屋敷ノ四・屋敷
高崎	今朝丸	五・屋敷六	
高棲	坂ノ前・古屋敷・町小路・下西小路・上西小路・中西小路・馬鹿小路・北小路・垣添・社・今居敷・番屋口・砂船	今山	江口屋敷北・江口屋敷西・江口南屋敷・江口東屋敷・松丸屋敷・西松丸屋敷・空屋敷・今山屋敷
甲條		十郎丸	野屋敷・西屋敷・堀ノ口
	西屋敷・東屋敷・屋敷付ノ一・屋敷付ノ二・	大石	堀内
	屋敷付ノ三	佐島町	西弓町・西弓町
本郷町	篠地・扇形町・篠ノ内・陳ノ前・馬場	稻敷	小路屋敷・大屋敷
下岩田	地内・堀ノ本	仁王丸	大屋敷・中屋敷・屋敷・天神原敷・寺屋敷
小郡町	上篠地・中篠地・西上篠地・東上篠地・向篠地・隣屋	鬼塚	鬼塚
	・隣屋	中島	土居ノ内・蜜柑畠敷・十居ノ角
松浦町	新浦・城山	平方	元成屋敷
上高瀬	東船	八坂	十居後
鶴	鶴屋敷・向屋敷・天神原敷・北屋敷・大城	上西堀堤	堤敷・屋敷ノ坪・中屋敷・城ノ内
今	西小路二・西小路一・東小路	下西堀堤	堀堤敷・西馬場路・大丸
井上	長者振	鳥巣	今屋敷
吹上		高良	南小路・北小路・西小路・東小路・中小路・恋ノ丸
千萬	弓掛ノ上・上屋敷・下屋敷・中屋敷・町屋敷	石崎	屋敷ノ一・屋敷ノ二・今屋敷・十居ノ内
	・城之内・城口ノ上	小森野	寺山屋敷・矢食町
乙原	大字路・南小路	山川	西馬場・鶴ヶ城・城ノ前・城・城谷・城牟田・城
山隈	隣壁下・垣塙・東裏塙・番屋敷	堅	城池・築城・西屋敷・下城島
山隈	城山	合川	西屋敷・北屋敷・西屋敷・南屋敷・土居ノ内・西小路・馬場町・小城字楚・寺屋敷
大保	馬場・堀端・大倉・北小路・中小路・東小路	藤光	藤舎・藤坪
	・南小路・西小路	柳原	大蔵・童宿敷
大板井	屋敷・宮ノ馬場・門出	高良町	大屋敷・中屋敷
小板井	屋敷・屋形町	國分	等地・政所・馬場田・屋敷
大崎	中屋敷	金鳥	古城戸・重屋敷・馬場・奥屋敷・大塙
壇原	大馬場	大城	大屋敷・南十居・北十居
三澤	李小路	赤司	南北小路・東小路・城小路・山小路・横小路
力武	大馬場	若松	中屋敷・城ノ内・大屋敷
・森	南屋敷・北屋敷・計ノ前・弓場本	八丁島	十居外一・十居外二・西屋敷・東屋敷・南十居外
<筑後国御井郡>			
三川	角屋舎・城屋舎・官本屋敷・無三屋敷・屋敷・南屋敷・東屋敷・寺屋敷・中屋敷・南中屋敷・東屋敷・北屋敷・中屋敷・中屋敷・西屋敷・奥屋敷・西屋敷・橋本屋敷・北屋敷・庚辛屋敷	官舎	屋敷
守部	十手上・立屋敷・家原敷・浦屋敷・内屋敷	津屋	弓掛・向小路・堀回シ
吉野	西屋敷	津屋今	西屋敷・新屋
宮多	西屋敷・東屋敷		
御井町	塙ノ上・馬場先・太鼓塙・土居ノ内・大屋敷	白口	源右衛門城戸・北屋敷・東屋敷・西屋敷・寺屋敷・中屋敷・南屋敷・黒門・龍ノ山・下屋敷・垣ノ内・隣ノ内
	上津荒木本屋敷・中村屋敷・由中屋敷・風屋敷・馬場	住吉	屋敷内・城山・船
久種	西小路・十民下	中津	屋敷
中	壇屋敷・中小路・堀ノ口・堀小路	佐吉	屋敷内・城山・船
隨屋	藏屋敷・随屋口	安武木	女掘・屋敷・城島
野中	上城運輸・城運輸・東屋敷・高島屋敷・木本屋敷・屋敷・東屋敷・南屋敷・屋敷・屋敷一・屋敷二・屋敷四	武島	北堀口・南堀口・堀添・力屋敷・審留
		下荒木	城娘・竹ノ丸・古門
上弓削	屋敷ノ一・屋敷ノ二	荒木	横小路・立小路

旧村名 (大字)	開連地名	旧村名 (大字)	開連地名
宮本	奥小路・西小路・女制・馬出シ	三八松	政中・野屋敷・太坂敷・北小路・奥小路・南小路・ 南小路・陳ノ内
夜明	南小路・陳ノ内		南小路・馬場ノ前・馬場ノ騎・土井ノ口・虎尾敷・ 赤木リ・外新屋・内新屋・中庭敷・東庭敷・土居 越・東小路・中小路・堤敷ノ内・川敷道・新堀
種吉	大坂敷・城田・小路・奥小路		
黒田	奥小路		
荒山	北ノ原敷・御剣・新堀・坂ノ内・西ノ原敷	茂溝	政中・御垣敷・水町屋敷・中小路・六ヶ所里敷・門 ノ内・觀音丸
孫・瀧	北小路・坂ノ上・頃・横弓橋	矢加郡	南垣敷・北垣敷・五ヶ丸・町庭敷
玉滿	四郎丸・中小路・館	高鶴	内原・堀ノ内・馬場崎・町庭敷
我瀬	東屋敷・東ノ前・堀ノ内・南ノ前・南屋敷・立堀	立石	城ノ内・中小路・東小路・堀ノ内・新堀・阿賀佐尾舎
前半田	東島坂・島坂・中庭敷・別當屋敷・東屋敷・横堀	上木佐木又ノ前・堀ノ内	上木佐木又ノ前・秋丸・對面屋敷
	野屋敷		上木佐木又ノ前・觀音丸・秋丸・對面屋敷
牛若	坂ノ口・城田・古門	蘿生	立坂・坂小路・中壇越・北小路・土居ノ内
西牟田	西小路・館・城崎・小次郎丸・東小路・三郎丸	金納	北原館・南庭園・赤坂敷・新堀
大角	坂道・東屋敷・大坂敷・青原敷・高屋敷・柳屋敷	八町半田御垣敷・水落屋敷・野々屋敷・野口屋敷・東名屋 敷・堀ノ内・弓堀ノ本・冲屋敷・正分ヤシキ	
福上	助屋敷	上八院	堀ノ内・西田屋敷・天神屋敷・今里敷・南立坂・北 立坂・北境屋敷・中村屋敷・寺尾敷・上屋敷・壹町 分庭敷・野屋敷・茅子坂・横堀
清松	南屋敷・十郎丸・北・坂敷・寺屋敷		
豆町原	坂道・原田屋敷・馬鹿野・西屋敷		
芦塚	出井・演屋敷・小路・東小路・北小路・西小路		
	中庭敷・堀		
下田	東小路・中小路・外屋敷	中木家	宮ノ前・古賀屋敷・西屋敷・赤城
瀧	南小路・中小路・北・小路・東小路・土居外・屋敷	中八院	ノリ屋敷・今里敷・古藏屋敷・堀ノ内・田中屋敷・ 北御屋敷・次郎丸・次郎次・御屋敷・御屋敷・右京屋敷
内野	新坂・東屋敷・西屋敷		
城島	町屋敷・木丸・坂敷下・城内		
大依	東屋敷・西屋敷・新屋敷・北屋敷・四郎丸	本木室	本木室・東小路・東屋敷・城ノ内・堀屋敷・ 中小路・西小路
六町原	南屋敷・前屋敷・屋敷内		
猪津	大坂ノ上・馬場中・大坂越・城崎・古屋敷・坂道	上白坂	西屋敷・北之屋敷・東ノ園敷・二才坂敷・大坂敷 ・屋敷道・新中坂・中小路
江上	船ノ前・箭屋敷・御部屋敷・皆古賀・堂屋敷	下白坂	坂敷田・堀ノ内・中小路
	千代島屋敷・佐京屋敷・東屋敷・横堀・堀ノ口	下八院	西屋敷・元屋敷・南庭敷
江上々	女郎坂敷・立野坂敷・さゝ屋敷・東二丸・西二丸	上井田御垣敷・源氏堀先・北馬場先・門前・馬場通	
江上本	・鮫丸・佐平次屋敷	木佐木木坂ノ口	
	馬場・被服屋敷・馬場・治田屋敷・寺堀・中屋敷・乙 丸・北屋敷・馬場・東坂敷・立坂・助丸・新藏屋敷・ 新坂・田屋敷・夕子・山城坂・堀ノ内	横溝	鳥居子十丁・坂田中・坂田西・城ノ内・南長坂・長 坂・高良戸屋
上青木	城ノ元・門田	蛭池	本木敷前・宇十屋敷・天神・木坂敷・北島屋敷・ 鏡・形崩前・隨ノ内・村小路・宮ノ前・正野屋敷・ 鏡分屋敷・櫻坂・隨分西・随分屋敷・森分屋敷・木屋 敷・御物屋敷・田ノ上屋敷・寺分屋敷
下青木	牛坂・南小路・東小路・箭屋敷		
西青木	坂江		
青木島	元里敷		
清跡	十國外北湖添ニシヨゴノエ	侍島	西屋敷・東屋敷・中涌屋敷・御屋敷・祐ノ木土居・ 升井屋敷・西小路・平土居
笛海島	十居敷		
下林	簡江屋敷・堀ノ内・北小路・南小路・西小路		
中古賀	北小路・下北路・中小路・上・中下路・東小路・南 小路・南小路・北小路・東坂切・西坂切・御堀	吉木	下馬場崎・中馬場崎・上馬場崎・堀下・上坂下・西 小路・東小路・江下小路・下坂下小路・東江下小路 ・西江下小路・原小路・上江下小路・馬場・上馬場 ・中馬場・下馬場・古城山・竹丸城
諸富	土坂ノ内・東小路・地蔵坂敷・南屋敷・西小路・北 小路・中小路		
酒見	下城内・上城内・馬場坂・堀ノ内	矢作	下九・上九・東下坂敷・百下屋敷・上西屋敷・中西 屋敷・中庭敷敷・上東屋敷
向島	東坂内・西坂内・屋敷ノ内・屋敷ノ内・中小路・馬場崎・ 高馬場崎・西屋敷・東屋敷	越川	美庭屋敷・中庭敷・片屋敷・南屋敷・北屋敷
桜木	城町		
疋保	竹原敷	合樂	舟庭敷
鬼脇	曲輪ノ内・堀ノ内	與田	西屋敷・南屋敷・中庭敷・大屋敷・南屋敷・樋口屋 敷・下屋敷・上・下段屋敷・東屋敷・北屋敷・鍛冶屋 敷・周堀堀
上翁	中小路・田中屋敷・田屋敷・屋敷ノ後		
鷺原	中小路・中坂城	木坂	西城戸・北屋敷・中屋敷
一木	金丸・城宅	飯田	下町屋敷・下坂敷・町屋敷・南屋敷・中町屋敷・馬 場・北屋敷・東屋敷・西屋敷・門田・金丸・下門田 ・北金丸・金丸
久野島	屋敷ノ内・今坂舎・古屋敷・西龍城・東龍城・牛丸		
大野島	山岸敷・公儀堀東ノ前・公儀堀西ノ前・路・路屋敷		
新田	龍城		
間	九郎丸		
田監	堀ノ口・四郎丸・一郎丸	野田	細路・馬場川原・下土居・土居元・十居塙
南瀧武	土坂神・糸所ノ前	豊島	自在丸
久々原	高土坂・坂越	常磐	赤丸・熊丸
古賀	屋敷北	地總	セシキボウ・シロヤシキ・太ヤシキ・七平屋敷・寺 頭敷・中庭敷・寺屋敷・内屋敷・田ハタ屋敷・東屋 敷・坪ノ城
西清武	堀ノ内・水上居下・道屋敷		
西瀧舗	渠瀧前・渠瀧馬場・馬場・中小路・正覺屋舗・露屋 舗・屋舗・中舗	中尾	自在丸・ヤシキ・大城町・屋形町・人丸
東瀧池	門前	竹野	竹野ヤシキ・施間ヤシキ・五郎丸・人丸
高橋	西小路・東小路・中小路・表小路	秋成	上裏・西郎丸・北坂敷・中屋敷・南屋敷・垣添
大坂	寺屋敷・中庭敷・西屋敷・東屋敷・堀ノ口・新堀・ 南小路・中小路・北小路・土居下・築ノ口・南屋 敷・西小路	植木	垣添田
奥半田	野屋敷・西村東屋敷・中屋敷・十居西・十居東・堂 屋敷・后屋敷・寺屋敷・前村東屋敷・御屋敷・堀ノ下・池尻屋 敷・中屋敷・御屋敷・中村屋敷・本村屋敷・轉田屋敷	益生田	門ノ口・馬ヶ

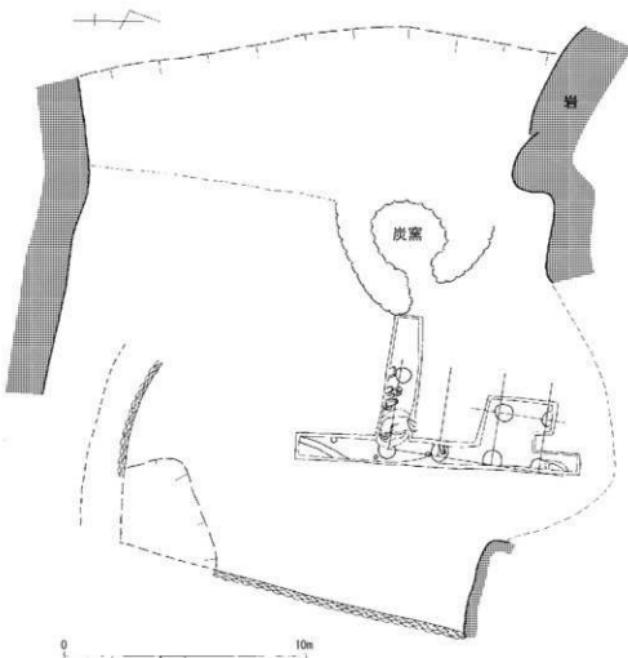
旧村名 (大字)	開達地名	旧村名 (大字)	開達地名
益生東 東屋敷	新・雄里敷、矢倉、馬場、上馬場、東館、西館、城内	前古賀	屋敷、里舎、東小路、中小路、西小路
石垣 東屋敷	中東屋敷、西中屋敷、西屋敷、大井東屋	立野	奥小路、東小路、中小路、西小路
東・上 屋敷	東中屋敷、六田屋敷	新莊	上屋敷、下屋敷
森部 長柄	中屋敷、十井之内、西屋敷	川大	大木馬場、南／屋敷、下／屋敷、北／屋敷、上大屋敷
弓場元 隈	弓場元、堀之内、垣添	平	下大屋敷
上原 久保館	堀越田、門之内、垣添、屋敷	北山	堀田、古屋敷、小路、堀切、箭射塙、城／谷、今小路
朝森 東屋敷	段屋敷、垣添		水矢塙、鷺塙、御食、城山、大曾山、大食
志保島 放	堀ノ童、向屋舎、垣添、日出屋舎	白木	今屋敷、籠ヶ倉、横居場、横ヶ倉、城／平、小ヶ倉
以算車 西屋舎	西屋舎、町屋舎、町屋舎、垣添、百九	鹿子生	種塙、屋敷
利利 堀之内	大丸、丸力	上高井	田代谷、高倉
八幡 土居館	北屋敷、南屋敷、筍敷、東屋敷、奥屋敷、西屋敷、垣添	巣松	二ノ丸、城山、立屋敷、堀田、安藝屋敷
菅原 堤口	堤口、垣添、大屋舎、弓場、東屋舎、党中央舎	山崎	城塙、塙山、今塙敷、城／下、馬場、食谷、馬場／前
<b>[筑後國生糸郡]</b>			前田、城塙、起詣丸
浮羽 釜之丁居	屋舎田、今屋舎、石丸、中屋舎、下三箇	谷川	小路、西蔵、朝貢、古金屋舎
	敷代屋舎、館屋舎、鶴ノ尾屋舎、小屋舎	田形	原屋敷、屋敷
波川 小路	馬場	馬場	北門前、南門前、今屋敷
大川 高丸	大門、城	津江	中小路
生糸 屋舎	本丸、城地、町屋敷、十居元	本	立山、小路、屋敷
清瀬 周敷	下屋敷、屋敷田	折織	屋敷
若宮 外屋敷	國光屋敷、下屋敷、馬場、大／馬場	井伏	前田、中園、屋敷
宮田 屋敷町	中屋敷、馬場／下、屋敷	鳩十	屋敷
(続) 田原 村屋敷	忠見	中山丸	城／東、東館、西館、城／西、城／谷
(合意) 屋敷下	山内	柳島	道造塙
(本見野) 馬場道下、寄前、引箇、外城、内城	北田形	西／崩、屋敷、陣昌、陣山、城／谷、城／峯	
(十輪) 古城	湯沸田	堀切	
(千々谷) 堀塙	田本	内／城、堀切	
(竹山) 屋敷	本分	古賀／合、西馬場、東馬場、繁地	
(仁田原) 藏屋敷	今	篠塙、三郎丸	
(前) 丹原羽 番所	桑原	北屋敷、南屋敷	
高木 土居切、西城	笠原	城／東、藏屋敷、今屋敷、屋敷、屋形泊、古賀倉	
高見 中小路、金丸、上馬場、馬場、今屋敷、山城、三郎丸	田代	斯塙、隣床	
小窓 堀田、城下、馬場、小松原	木屋	丹原、西城、中城、東城、南城、長城、弓掛／搭、堀田、家舎、前／小路、裏／小路、中／小路、垣添	
東根下 門田、堀田、船形町、佛丸、屋敷丸、加智屋敷、		・屋敷／下、寝小屋／岩、屋敷／下	
二郎丸		離／内、城山、東屋敷、北屋敷、上今屋敷、古屋敷	
西限下 堀田、三郎丸、町屋敷、六郎丸	北木屋	今屋敷	
八和田 十居下		城／崩、堀池	
新治 今屋敷、馬洗、石藏	大瀬	ヤシキマエ、堀衝上、屋敷前、堀田、屋敷下、屋敷／上、堀田坂、堀原、十居間、ヤシキウエ、屋敷／上、屋敷／上、屋敷前、ヤシキノト、馬場、堀田／口、堀原、屋敷上、堀井川	
袖川 今屋敷、汁屋敷	北矢野	今屋敷、山内小路、堂屋敷、穂店、屋敷上、屋敷向	
高見 東城ヶ裏、城ヶ裏、西城ヶ裏、古屋敷、鬼ヶ城、		・城平、屋敷／上、屋敷向、屋敷／下、今屋敷	
今屋敷、平家ヶ城、矢所、宍人／馬場		尾張野、古屋敷	
福丸			
船部 出口屋敷、屋敷、奥屋敷、東屋舎、鍛冶屋敷	矢部	今屋敷、山内小路、堂屋敷、穂店、屋敷上、屋敷向	
吉井 堀田町		・城平、屋敷／上、屋敷向、屋敷／下、今屋敷	
櫻井 古屋敷、北屋敷、屋敷	上横山	尾張野、古屋敷	
船丸 南屋敷、北屋敷、西屋敷	下横山		
田舎 馬場、日森園	北川内	大門口	
千年 今丸、屋敷、中童子丸、上童子丸、童子丸	吉常	役丸	
福水 吳敷	久泉	東中園、中園、北中園、南中園、西中園、門田、掘	
埴田 童子丸、上童子丸、下童子丸、石堀	木原	ミテ、中／馬場	
山北 高丸、千代丸		西面塙、中馬場、上馬場、弓場谷、城／尾、南屋敷、北屋敷、上馬場平、下馬場平、琵琶、内屋敷、	
三井 東木下、小屋敷、馬場、大屋敷、城丸、割削		舞水、堀田	
<b>[筑後國上郡]</b>			
福島町 北小路、二／丸南、本丸南、本丸西、本丸、二／丸	日吉	弓場水、十居／下	
	・將堅坂、中／十手、清水堀	長延	奥／小路、堀添、船形町、虎丸、弓場元、馬場先、尾張野、城／尾
福島 外小路、溝狭間		六田	下削坂、西南屋敷、東南屋敷、下岸舎、上岸舎
岩崎 茶屋屋敷、川南屋敷、北川屋敷		川上	下村屋敷、上村屋敷
高屋 堀田		尾敷、北中／馬場、南中／馬場、西屋敷、东屋敷、	
宮野 西堀田、東堀田	新代	屋敷	
酒井田 下小路、東小路、西小路、南小路		南屋敷	
堀瀬 小路	廣川	屋敷、上小路、中小路、下小路、堀／後	
大島 今屋敷、五郎屋敷、道屋敷	藤田	角、弓場	
吉田 屋敷／坪、丸之内、屋敷／坪、馬場添、屋敷、茶屋		寺屋敷、觀音屋敷	
宅間町 屋敷、深丸	一條	熊野	
豊原 高食、今屋敷、射場、屋敷		野屋敷、元蔵敷	
建原 高食、今屋敷	徳久	山／井	
長瀬 土居之内、半屋舎、元屋舎、屋舎裏	利大保	射場／本	
前津 堀口、西堀舎、前堀舎上		高畠、北屋敷、南屋敷	
室岡 中小路、折部屋舎、陣／前、堀見手、四丁堀	若菜	古屋敷、堀口、大堀	

旧村名 (大字)	関連地名	旧村名 (大字)	関連地名
和泉	立林	文蔵	馬場敷・天神屋敷・東屋敷・西屋敷
長崎	東井堀・西井堀・古木戸・屋敷	山門	西小路・東小路・城内
久富	大城・大門口	常盤町	東洋小路・弓小路・铁砲小路・西曾寺小路
庄幡	屋敷	馬場	信重塚・旗幽・星形町
同方所	中塙・東屋舎・中屋舎・西屋舎	周町	北小路
扇久	屋敷・居屋城・山ノ門・屋敷内	龜見	堤ノ内・東馬場・西馬場・三郎丸
江口	柿浦	甲田	堤ノ内・城ノ尾・下城ノ尾
木田	城ノ越	大草	寺屋敷・東屋敷・馬場ノ内・西屋敷
下北島	馬出シ・東屋敷・西屋敷	真弓	屋敷ノ谷・寺屋敷・日城
鳥田	大屋敷・下屋敷・北屋敷・外屋敷・觀音屋敷・麻ノ	鹽保	乙丸・三郎丸・大城町・北城
	大屋敷・弓張	飯江	垣路
古魚	堤ノ内・稻屋敷	竹飯	今堀・馬場ノ下・新屋敷・今屋敷・大ノ馬場・北小路
折地	今屋敷・屋敷内		十帖ノ内・城ノ尾・雁屋・上小路
井田	南屋敷・古屋敷・堀越・中堀越・大門・前田・下堀越・孫七堀・堀屋敷・下屋敷・中屋敷・屋敷・新堀	鷹ノ尾	太郎丸・寺小路・馬場ノ内・清十郎・勢田丸・馬場
	立堀・東屋敷	六合	小路・南小路・向堀越・北城
中牟田	土居ノ内	清水	射的ノ元・南小路・垣路
<第後國下屋郡>		百町	土明小路・内馬場・北小路・西中小路・南小路・田中路・中小路・中村小路・西小路
下家	麻屋敷	松田	今屋敷・北三ノ丸・南三ノ丸・西二ノ丸・本丸・東二ノ丸
宮安	大丸		
船間田	蘿ノ内	大膳町	城壁・武士町・円田・射場ノ元・陣畠
當用	南小路・西小路	下宮水	下宮水・野田坂・大城
上北島	馬ダシ・馬場・坂場・上園田	立山	笠置地・内・坦ノ内・堂屋敷・明神屋敷
野町	南屋敷・北屋敷	阿原内	屋敷ノ内・道屋敷・城ノ谷
志	垣越・下屋敷・上屋敷添	本町	三軒小路・駄小路・本郷町・三ノ丸・坊主小路・城頭町・御殿小路・鐵小路・弓小路・早馬小路
舟島	中小路・上小路・下小路・南小路・西小路・東小路・北小路		
鶴田	元屋敷・十居越・南小路・中小路・西小路・北小路・東小路	三池町	小路・古城・大間小路
	・東小路	岩木	柴切・塙・内・合
新瀬	大丸・南屋敷・東屋敷・西屋敷		元屋敷・陳内
久成	上藤丸・藤丸・下藤丸・堀之内・垣添	橘	岩丸・甲屋敷・乙ヤシキ・小立山・城ノ平
	城・上小路・小御門・十居外	鷗島	内屋敷
北長田	唐申十居		城道・鶴治屋敷
<第後國山門郡>		岬	四郎丸・館・扇敷御・仲屋敷
大江	内屋敷・東屋敷	白川	元屋敷
木吉	屋敷ノ内	荒木	下屋敷
吹田郎	屋敷教・三ノ籠・大城	櫻野	城子山・東城子山・莊屋敷・城ノ尾・汁路・城ノ内
龜仙寺	中十居	木目	城
猪益	陳屋敷・新屋敷・東小路・西小路・堀口	大半田	北屋敷・原屋敷・城ヶ崎
鶴原	觀音小路・古屋敷・中小路・西小路・北小路・堀ノ口	古野	城壁・北屋敷・南屋敷
尾野	杉毛場・奥小路・上小路・中小路	魚谷	空屋敷・屋敷ヶ浦・手浦・宮ノ馬場
太神	門前・馬場先・堀之内	三組	城壁
下百丁	屋敷ノ内	新所	陣屋
榮	十居ノ内・花・古屋敷・油田屋敷・芝原屋敷・屋敷ノ内・且屋敷・西小路	數來	東丸・四大丸・堀丸
	・且屋敷・西小路	上内	上林・金丸・持丸・城花山・屋敷田・柴尾ノ城戸・
明野	番所・新十居編・西小路		立山
上宮水	北應場・南馬場	江浦町	高城・二ノ丸
朝霞	城戸	上浦田	城壁・築内・大丸・馬場・城戸ヶ谷
五右衛門	十居・中小路・元屋敷	下飯江	城戸・門前・大門
櫛町	北屋敷・中十居	丹原	堆内・小路
中島	蘿織場	岩津	今屋敷・寺屋敷
河内	陸内	原	城ノ平・東屋敷
久末	屋敷ノ内・屋敷・元屋敷	四箇	城ノ下・古門・垣添
小川	大屋敷・大堀	北新開	鬼丸・坊屋敷・五郎丸・奥屋敷・達丸・御正屋敷
永間	堀		小路・乙井丸
坂田	屋敷	新開	内・外新十居・南屋敷・立小路・横小路・城内
登田	坂田・屋敷・蘿ノ内・春屋敷	江浦	高城・伏堀・六郎丸・十居手
矢留	大城開	今福	城ノ下・城ノ山
新	北松丸・松丸・居屋敷	邊庭	中屋敷・城ノ山
吉開	鬼丸・中小路・居屋敷	田原	小路・中屋敷・随屋敷
起田	坂越田	下里	東屋敷・西屋敷
木元	清屋敷	穢須	城ノ前・城
彦船津	北ノ屋敷	東光生	四郎丸・隣ノ下
高島	屋敷ノ内	立林	
藤吉	十居丸	藤田	中原屋敷・本村屋敷
佃	蘿越・屋敷ノ内・大城・城戸・十居外・中土居西・十居溝・堀ヨリ南・中十居東	川尻	西寺堀・東寺堀・三郎丸・十居敷・馬場・南小丸・上屋敷
上庄町	松十居・乙丸	倉永	下方屋敷・隨内・御十居・秋丸
吉富	下坂場・大樓廻・中坂場	田淮	堆射場
中山	十居下・堀之内・庄屋小路・寺ノ小路・屋敷内・内		
本郷	下十居・中十居		

## VIII うきは市長岩城跡発掘調査報告

平成 10 年度、福岡県教育庁文化財保護課からの各種開発事業照会に対して、福岡県農政部久留米農林事務所所管事業の一つとして「浮羽町（当時）長岩地区生活環境保全林整備事業」が回答された。浮羽町南部の山間に位置する長岩地区は長岩城の所在地としてつとに知られており、教育庁北筑後教育事務所生涯学習課文化財担当は事業の内容を確認するために久留米農林事務所担当と協議を行った。事業は、長岩城跡といわれる一帯に遊歩道を設置、一部に張芝を行うといった軽微な地形改変を伴うものであった。現地は急峻な岩場が優勢な地形であって、遊歩道も開削ではなく主として木製デッキを階段状に設置するというものである。

工事の内容から城跡が破壊される恐れはほとんどないと予想されたとはいえ、長期的に見てもこの長岩城跡で発掘調査を実施できる希有な機会であると判断し、久留米農林事務所の理解を得て、平成 10 年 8 月 30・31 日の両日にかけてトレンチ調査を実施した。今から思えば、非常に隔靴搔痒の感のある調査であるが、ほぼ 20 年前のこととて事情は不分明である。



第 272 図 長岩城跡遺構配置図 (1/200)

## 調査の内容

調査は遊歩道が計画され、かつ張芝が施工される狭い平坦地にトレーニングを入れることとした。現地は東から西に向かって急勾配で高くなる地形で、処々に狭い平坦地が看取できる。試掘対象地は岩場で挟まれた南北幅約20m、東西幅20m弱の平坦に近い土地であるが、その南に偏して幅1.5mほどの石階段、登り道が置かれ、高位となる西辺段落ちに石組の炭焼き窯が設置されていた。

試掘トレーニングは平坦地の中ほどに東西方向で、西端が炭焼き窯前端の石組に接するように設定し、ここから幅約1mのトレーニングを6mの長さで掘削した。土層の堆積は概ね、表土・灰黒色土（腐葉土）が0.5m、その下位に0.1mの厚さで灰黄褐色土が堆積し、さらに下位で明黄褐色の硬い盤が現



第273図 長岩城跡周辺地形図および縄張り図(1/2,000)

れて遺構の地山となっている。当時のメモに「造成土」と注記がしてあるが、断ち割りを行っておらず、今となっては確認のしようがない。ただ、現地は岩山の相を呈していて、安定したいわゆる「地山」と呼べるような土壤が存在することも疑わしい地形であることから、他所から持ち込んだ可能性は十分考えられる。

この最初に設定したトレーナーでは東寄りに岩盤があり、それに接するように直径 0.7m ほどの柱穴を確認。さらに西側でも直径 0.6m の柱穴を検出し、両者の芯々での距離は 3.1m を測る。なお、西側柱穴近くでは平坦面を上面にして、高さを揃える石列様の礫群を検出したが、これは柱穴の検出面よりやや上位にあった。脇から割れた石臼も出土している。

最初のトレーナーの北側にグリッドを設けたところ、略東西方向に芯々で 2.0m を隔てた柱穴を検出したため、さらに一部拡張した。結局、2.2m の柱間で南北方向に直線的に並ぶ 4 基のほぼ同規模の柱穴、およびそれと直角方向に並ぶ 2 基の柱穴を確認した。なお、柱穴は検出だけで留めている。また、柱穴から土師器皿片 1 点が出土したとメモがあるが、所在不明である。

#### 結語

今回の確認調査で 7 基の柱穴を検出した。南西の 1 基が柱間距離が揃わないものの、ほかの 6 基は規則的な配置から見て建物を構成するものと考えてよいであろう。また、南西の 1 基も東辺の柱列と直交する位置に配置されていて、関連するものである可能性が高い。

長岩城跡には縄張図で見るようにいくつかの狭い平坦地が認められる。その一つで建物跡と思われる遺構を確認したことは、この場所に「長岩城」が実在した可能性を示しているといってよかろう。さらなる調査が期待される。



東から見上げる



北東から



東から



北から

第 274 図 長岩城跡発掘調査区写真

## IX 『福岡県の中近世城館跡 I～III』の補遺

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査において、過去3冊の報告書を刊行し、福岡県内でも、筑前地域および豊前地域については、既に報告を完了している。しかしながら、報告書作成までに、現地調査を完全に行い得なかったものや、報告時に行った調査の場所とは異なる場所で、新たに城館遺構が発見された場合など、既刊の報告書に本来掲載すべき案件が出来してきたため、この報告書の作成時までに追加補足調査を行い得たものについて、ここで追加報告をするものである。個別案件の詳細については、次節を参照願いたいが、その補足調査の概要について以下に述べておく。

なお、これらの調査を行うにあたり、以下の方々や機関には協力を賜った。記して感謝したい。  
田中賢二、中村修身、中村正、若松善満、筑紫野市教育委員会（敬称略）。

- ① 報告書刊行時において未調査であり、顕著な遺構があることを認識していなかったが、遺構の存在の情報を入手し、再踏査した結果、遺構を確認したもの  
・大丸城（筑前 306）・猿尾の陣（豊前 D12）
- ② 報告書刊行時において調査は行っていたが、場所が異なっていた、あるいは未確認の遺構の存在があったため、再踏査した結果、遺構を追加確認したもの  
・天ヶ城（筑前 25）・扇山城（筑前 86）・城山砦（豊前 106）
- ③ 報告書刊行時の調査において遺構を確認していたが、報告書作成に間に合わなかったため、改めて調査を行ったもの  
・大将陣（豊前 D8）

- ④ 報告書作成時の調査では、現地調査を行うことができなかつたが、遺構がある可能性があると認識し、改めて踏査を行つたが、遺構を確認できなかつたもの  
・高城（筑前14・筑紫野市）・弥山城（筑前89・飯塚市）・城ヶ尾城（筑前96・飯塚市）・椎木谷城（豊前84・田川市/田川郡川崎町）・義島城（豊前143・行橋市）・沓尾城（豊前144・行橋市）・佐伯陣（豊前D9・行橋市）

なお、手切城（豊前 47）を確認する際の根拠資料となった『豊前國田川郡全図』（国立公文書館所蔵）には、手切城や既に知られた城跡の他に、田川郡赤村・添田町周辺にも何ヶ所か城跡の記号がおとされていた。そのため、それらについても現地踏査を実施したが、結局明確な城館遺構を確認することはできなかつた。また、馬ヶ岳城（豊前 140・行橋市 / 京都郡みやこ町）の内、みやこ町側の麓に所在するという石垣、土壘などの城館遺構と言われているものについても踏査を行つたが、それらは全て谷水路の護岸や、畠造成などの後世の造成によるものと認識され、城館遺構と断定し得るものは存在しなかつた。

以上のうち、①～③の対象について、次節にて個別報告を行う。また、補足調査は城館の現地調査のみならず、文献史料調査においても同様であり、いくつか未発見のままに不掲載となつた文献史料がいくつも確認できた。そのため、次々節において追加分を全て掲載する。

以上の追加調査により、文献史料にのみ存在が明らかで、現地の所在が全く不明のものを除いては、新規に城館としてリストアップされたものはなかつたが、6ヶ所の城館については追補訂正することができた。個別報告する案件については、新出のものはないため、位置や参考文献等の諸情報については、既刊の報告書に参照願うこととして、本書では割愛させていただく。

## 1 個別城館報告

筑前 25	あまがじょう 天ヶ城	郡名 御笠郡	別称 阿満か城・蘆城城	図幅名 二日市(東)
		種別 山城	所在 筑紫野市阿志岐	

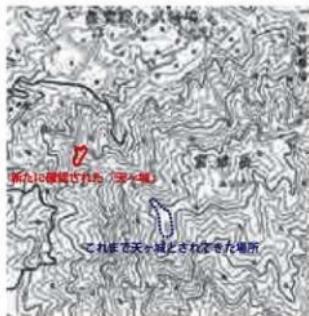
【沿革】筑紫野市東部、宝満川左岸の宮地岳の中腹に位置する。これまで山頂の南西側の標高338m地点に人為的造成があるとして「天ヶ城」としてきたが、堀切などの明確な城館遺構はなく、城館としてやや不自然な印象を抱いていた。2016年に筑紫野市教育委員会の小鹿野亮氏に宮地岳山中の別の場所に城館遺構が存在する情報をいただき、氏の同行の元、現地調査を行った。

なお、当城は『筑前国続風土記』には「蘆城村古城」として「あまか城といふ。城主詳ならず」とある。また『薦野家譜』の中に天正7年(1579)の秋月・筑紫勢の攻勢に対して、戸次道雪・高橋紹運が「…米の山龍カ城あまカ山加羅山香椎山名嶋等に砦を築き軍勢を籠め置」いたことが記されており、当城は「あまカ山」にあたるものとみられる。

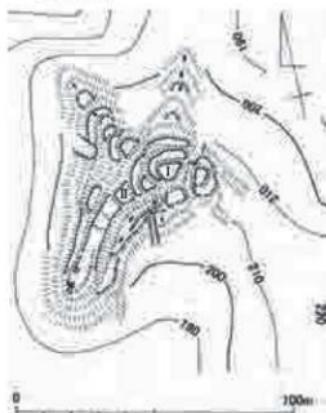
【概要】城地は宮地岳山頂の北西側の標高約210mの尾根上の頂部に存在し、尾根上頂部Ⅰを起点に、尾根上に縄張りが展開している。Ⅰは一辺約10mにも満たない小曲輪だが、その周囲にも同規模の小曲輪が階段状に展開する。特に南西側の尾根上に平坦地形が顕著にみられ、Ⅱには一部横堀状にもなっている帯曲輪が巡る。また、Ⅰの東側には深さ2mほどの堀切が見られ、山頂部側からの備えとなっている。全長70mほどの小規模な城郭であるが、従前から考えられていた天ヶ城とは異なり、曲輪の平坦面も明瞭であり、なおかつ堀切などの防御遺構も確実に伴うこと、また『古戦古城之図』に掲載された天ヶ城(第276図)の場所とも齟齬をきたさないため、今回報告する遺構群こそが「天ヶ城」そのものであると考えられる。



第276図 『御笠郡天山村柴田故城之図』(国立公文書館蔵)に描かれた「天ヶ城」



第275図 天ヶ城位置図(国土地理院作成  
1/25,000 地形図「二日市」を一部改変して  
事務局作成)



第277図 天ヶ城縄張り図(事務局作成)

【沿革】穂波川東岸に面した標高約170mの山稜部に位置する。従来、江戸時代に描かれた絵図（第280図）などに基づき、廣崎篤夫や中村正によって踏査・作図がなされていた。筆者も報告書Ⅰ作成の段階においても中村氏と共に現地を訪れ確認していたものの、絵図に図示はされていないが、皆のように頂部が平らになっていると記されており（巔モナラシ之砦址ノコトシ）、城域はさらに広がる可能性を指摘していた。実際にそれらの部分を再度踏査したところ、やはり城館遺構と見られる平坦面群が非常に広域に広がることが判明したため、作図を行い再報告することとした。

なお、当城は『筑前国続風土記』には「秋月の端城也。村民は修理殿城と云」とし、また同書「八木山村古戦場」の項にも、天正9年（1581）



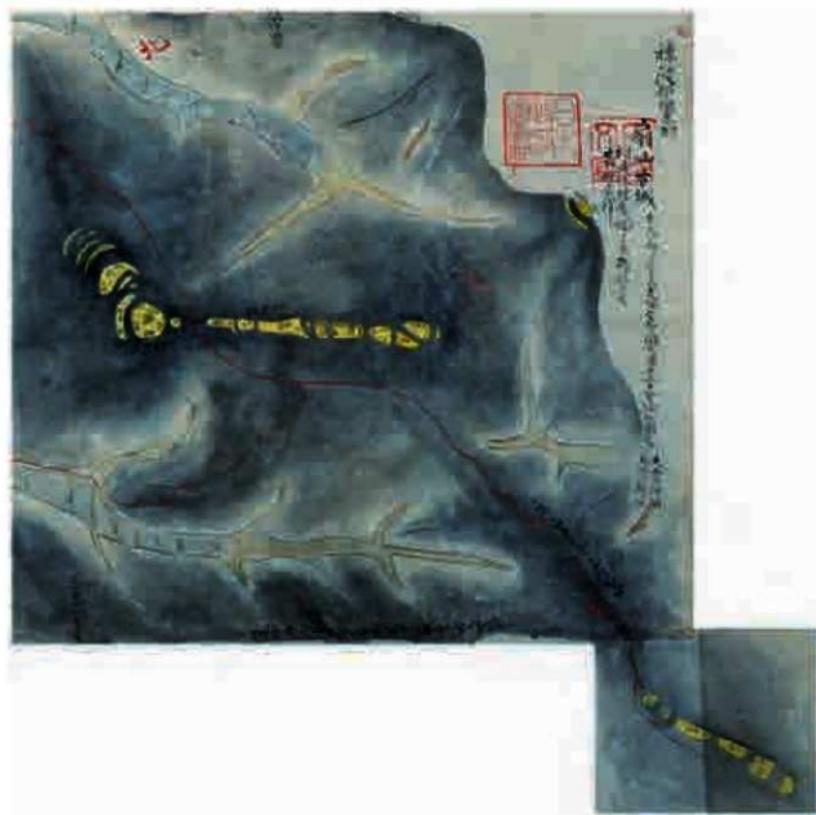
第278図 扇山城位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「大隈」を一部変更して事務局作成）



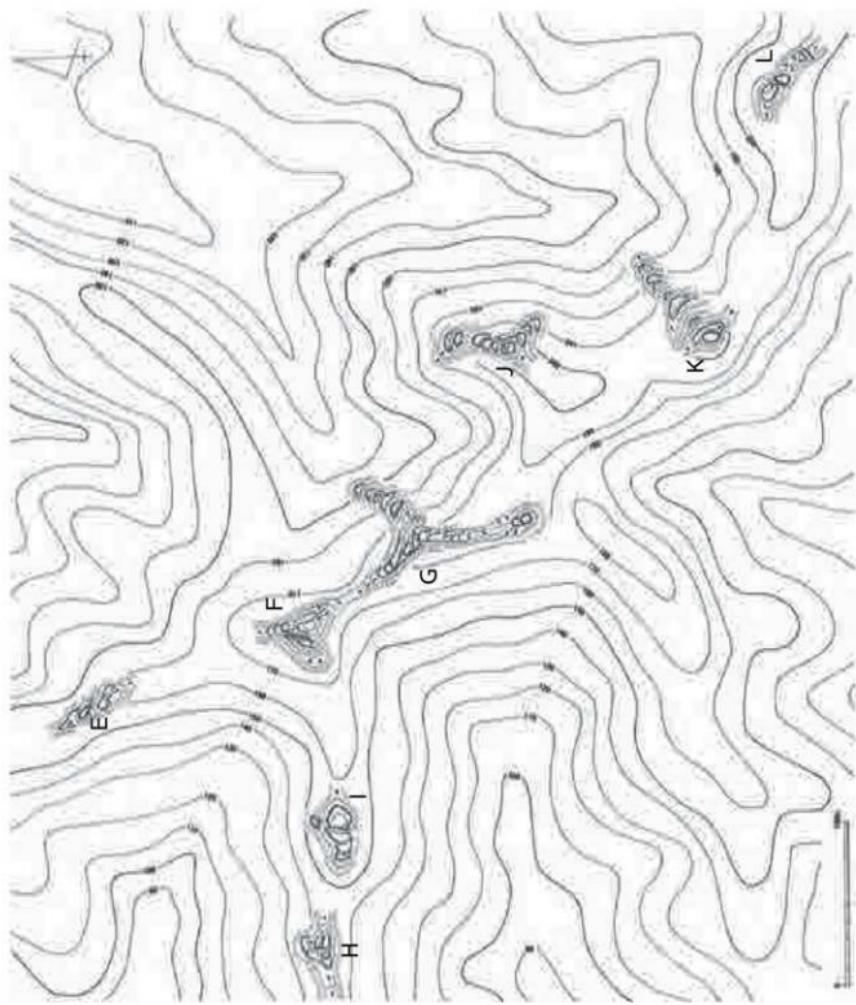
第279図 扇山城縄張り図（A～D地区・事務局作成）

11月、戸次・高橋両軍が秋月領内に侵攻したため、秋月方の「臼井、扇山、茶臼山、高の山、馬見などの城代共」が合戦に及んだことが認められ、扇山城が穗波郡における秋月方の城として取り立てられていたことがわかる。

【概要】従来は穗波側に突き出た標高約170mの頂部Aから東側約300mの範囲に城館遺構が広がるものと認識されていた（図中A～D）。しかしながら、さらに南側の尾根上、さらにはそこから派生する支尾根上にも曲輪群E～Lが散在することが判明し、およそ12箇所の曲輪群が確認された。以下、順に曲輪群の概要について述べる。A・B地区は従来、扇山城の中心とされる箇所であり、西側の頂部Aを中心に小曲輪群を連ねているが、途中尾根上は自然地形になりながらも、Bまで小曲輪群が連ねられている。Bの北東側には、堀切1本を構築する。Bの東側には尾根の鞍部を挟んで約



第280図 「穗波郡阿恵村扇山古城図」(部分・『古戦古城之図』のうち。国立公文書館蔵)



第281図 扇山城縄張り図 (E ~ L地区・事務局作成)

100m先の地点に曲輪群Cを構築、5面ほど確認できるが、いずれも長さ5m程度の小曲輪である。Cの北側約50m地点の標高165m地点にも曲輪群Dを置くが、あまり丁寧な整形具合とは言えない。Cについては江戸時代の絵図にも「古城ヨリ低シ」と記し、曲輪の描写がなされている。

一方、Bから南側については從来城域ではないとされてきた箇所であるが、Bから南へ尾根上を約100mも進めばEの曲輪群が確認できる。Eは長さ5m前後の小曲輪が4面ほど確認されるばかりで、そこから南へ100mほど尾根を登ると標高約170mの頂部にたどり着き、そこにはFの曲輪群がある。Fは主に北側と西側の斜面に2~3面の小曲輪面を構築する程度である。このEからFにかけての場所については、江戸時代の絵図には曲輪の表記はなされないものの、「此尾頭ナラシ有之 古城ヨリ高シ」とあり、曲輪群の可能性を匂わせている。さらにFから西へ派生した尾根上にもH・Iの曲輪群が構築されている。Hはやや規模が大きな曲輪面が確認できるものの、5面ほどを単位にそれぞれ50mほどのまとまりをもったこじんまりとしたものばかりである。尾根はこの先にも延びているものの、自然地形しか確認できず、城館遺構は構築されていない。なお、H・Iの場所についても、江戸時代の絵図に「荒平ノ巔モナラシ在之皆址ノコトシ」とあり、曲輪群の存在を想定しているかのようである。

Fからさらに南側の尾根上にもGの曲輪群があり、ここは北東側の尾根にも曲輪群が分岐しており、城域南側の曲輪群の中では最も規模が大きく、造成もかなり丁寧になされている印象を受ける。さらに江戸時代の絵図にもはっきりと6面の曲輪の描写がなされている。Fから南東側へもJ・K・Lの曲輪群が構築されており、J・Kの曲輪群は穂波川に面した西側に曲輪を展開させるのではなく、その反対側の北東側に曲輪を展開させている。Lの南東側には浅いながらも堀切1本を構築し、その先はなだらかな地形ではなく、急激に傾斜がきつくなり、城館遺構を確認することはできず、城域はここまでと考えられる。

以上のように、扇山城は総延長約1km以上にもわたる尾根上の稜線に曲輪群を散在的に構築し、細長く陣を張るような形態を意図したかのような縄張りを呈している。扇山城のある場所は、穂波郡から冷水峠を越えて御笠郡、あるいは東へ迂回して白坂越えを通過夜須郡の秋月へたどり着ける穂波川流域の要所を見下ろすような場所にある。そのような重要地点を扼するような立地にあるため、重要視されたとも考えられる一方で、曲輪群の構築を見ると、穂波川に面する西側に積極的に曲輪群を延ばしていく様子でもなく、むしろ穂波川とは逆の東側斜面に曲輪群が構築されている箇所も見受けられた。この意味する所についてはさらに検討を要しようが、いずれにせよ、これらの尾根上の稜線を延々と長城ラインかのように曲輪群を展開させていたり、曲輪の造成もあまり丁寧ではなく、急ごしらえ的な印象を受ける。堀切などの遮断施設が少ないのも特徴的である。このような縄張り構造は、県内の事例では障子ヶ岳城（福岡県田川郡香春町・京都郡みやこ町）の周辺、田川郡と京都郡との境に位置する稜線上に延々と築かれた城館群と類似している。この障子ヶ岳城周辺城館については、香春岳城を包囲するために構築した陣城群の可能性も考えられ、扇山城も一時期に大軍が駐留するような軍事的緊張下に置かれた可能性が十分考えられよう。その時期がいつなのか、永禄期の毛利・大友の争乱や、天正年間の秋月・大友の争乱などが考えられようが、結論を導き出すためには、今後さらに検討を要しよう。

筑前 306 大丸城

おまるじょう

郡名 那珂郡

種別 山城

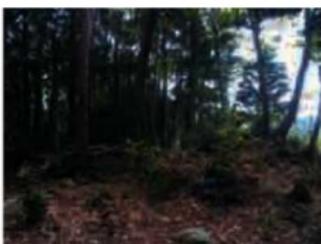
別称 なし

所在 筑紫郡那珂川町南面里

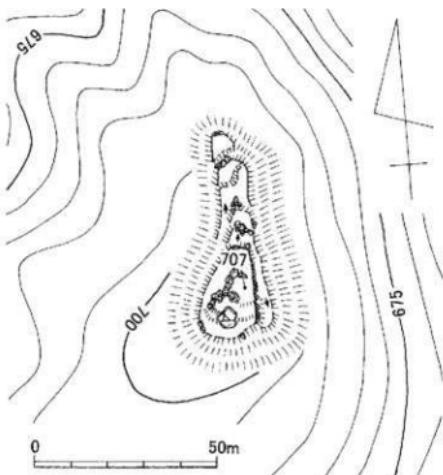
図幅名 不入道(西)

【沿革】筑紫郡那珂川町南面里の鷲ヶ岳城のさらに南へ尾根を上った標高707mの頂部に位置する。從前より大丸城は、那珂川町の分布地図（那珂川町教育委員会1995『那珂川町文化財分布地図』）により知られ、地元でも「大丸城」という伝承が存在したため報告書Ⅱでも分布図に掲載していたが、調査時間の制約から現地調査することができなかった。しかし報告書Ⅱ刊行後に田中賢二氏らに城郭遺構が存在するとの情報をもらい、現地調査を行ったところ、城館遺構が存在したため、ここに報告するものである。

【概要】標高707mの頂部は岩の露頭が顕著にみられ、一見自然地形であるかのような印象を受けるが、人工的に平坦面の造成がなされる。頂部には南北約30m×東西約15mの曲輪面があり、その東側から南側にかけて自然石の石垣が構築されている。また北側に向けて階段状に小曲輪が展開し、所々に石が積まれているのが確認できる。堀などの防御遺構は確認できない。全長50mほどの小規模城館であることや、麓からあまりにかけ離れたところにある立地、さらには鷲ヶ岳城のさらに奥にあることなどから、物見や狼煙などの役割を持った鷲ヶ岳城の出城としての性格が考えられよう。



第282図 大丸城からの眺め（上・油山が見える）・主郭（中）・石垣（下）



第283図 大丸城縄張り図（事務局作成）

【沿革】田川郡の岩石城の南西麓、通称「城山」と呼ばれる尾根の頂部に位置する。『岩石城』(岩石城史編集委員会・1987年)に報告されたのを初出とし、地名以外には城としての言い伝えは確認できない。上記文献では添田城の出城ではないかとする。報告書Ⅲでは上記文献に掲載されていた図面を参考に現地踏査・作図を行った上で報告していたが、中村修身氏から提供された図面にはそれ以外にも曲輪が図示されていたため、再度踏査して遺構を確認の上、図面を作成した。

【概要】添田中学校の南東側に伸びる尾根の頂部、標高約200mの頂部に位置する。従来は曲輪ⅠとⅡの部分のみが知られていたが、いただいた情報によりさらに東側の尾根上のⅢにも曲輪と堀切があることが判明した。また、再踏査の機会にⅠ及びⅡの周辺についても若干の補足の図化を行っている。曲輪群は大きく東西に分けられ、西側は曲輪ⅠとⅡを中心となる。Ⅰには低土塁が巡り、周囲には腰曲輪、さらには北東、北西、南東側に堀切が各1本設けられる。特に南東側の堀切は深さ約10m、幅約20mもの巨大なものである。またⅡの曲輪の西側の曲輪には、一部土壘状の高まりや集石なども確認ができるが、その西側にも堀切1本が確認できる。なお、Ⅱの南西側にも広大な平坦面群が広がっているが、延々と麓付近まで続いており、おそらく植林等に伴う後世の造成段とみられる。城域の東側には独立して曲輪Ⅲが置かれている。一辺約10mの小曲輪ではあるが、東側に土塁を巡らし、幅10mを越える大堀切が構築される。以上のように東西約200m、南北約150mの範囲にわたり、城域が展開している。



第284図 城山砦縄張り図(事務局作成)

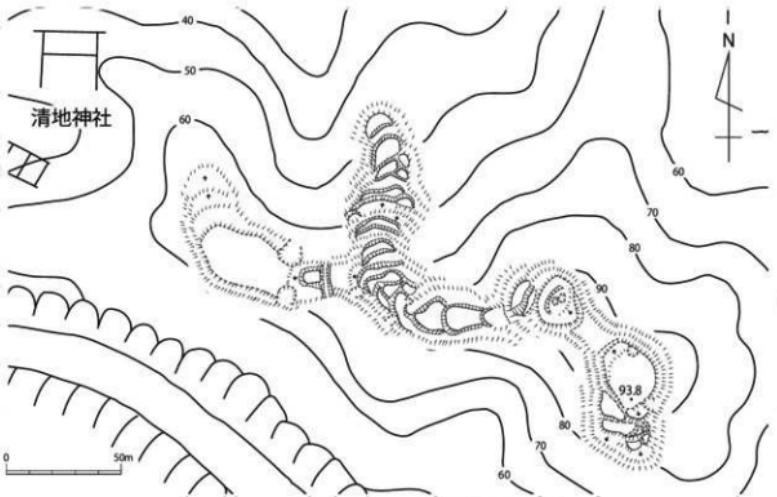
豊前D8 大将陣

たいしょじん  
大将陣郡名 仲津郡  
種別 山城別称 矢留城  
所在 行橋市矢留

図幅名 行橋（東）

**【沿革】**今川東岸、矢留集落にある清地神社の東側、矢留山（標高93m）の山頂に位置する。報告書Ⅲの作成時に現地に城館遺構らしき平坦面群があることは認識していたものの、図化調査をする余裕が確保できず、今回改めて報告することとなった。城地の字は「大将山」であり、『豊前国古城記』には「同(城跡一ヶ所)矢留村ノ内、大将陣」とある。また、『京都郡誌』には『長野家譜』を引き、「馬ヶ岳城之事並家臣の姓名」として「一出城国見矢倉(矢留村にあり大将陣と云山也)」とある。『地名から探る豊前国遺跡』（1976年・定村貴二著）では、「大将山、堀ノ内、小堀、中木戸道」などの関連地名から、「矢留城」を想定し、以後の文献は全てこれに倣っているが、「大将陣」を本来の名称とすべきであろう。

**【概要】**山頂部の主郭は楕円形状を呈し、南北約30m、東西約10mを測る。主郭南側に小規模な曲輪群が5段ほど配される。また主郭北西側の二股に分かれた細尾根上には、それぞれ階段状に小規模な曲輪群が展開し、曲輪群の西側に1本の掘切を設けている。大将陣より南西方向に位置する馬ヶ岳城を視認でき、馬ヶ岳城の出城としての理解も可能かもしれない。また矢留山北側約900m地点の標高12mほどの低段丘上には、中世期の屋敷地群が確認された矢留堂ノ前遺跡（豊前R10）が位置しており、これらと併せた上で当該地の状況を考えていく必要があろう。



第286図 大将陣縄張り図（若林善満作成・提供）



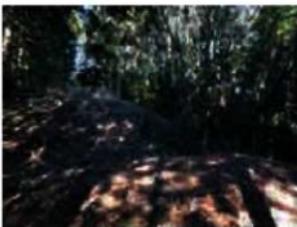
第285図 大将陣（矢留山）遠景

豊前D9	猿尾の陣	さるおのじん	郡名 築城郡	別称 なし	図幅名 伊良原(東)
			種別 山城	所在 築上郡築上町寒田・本庄	

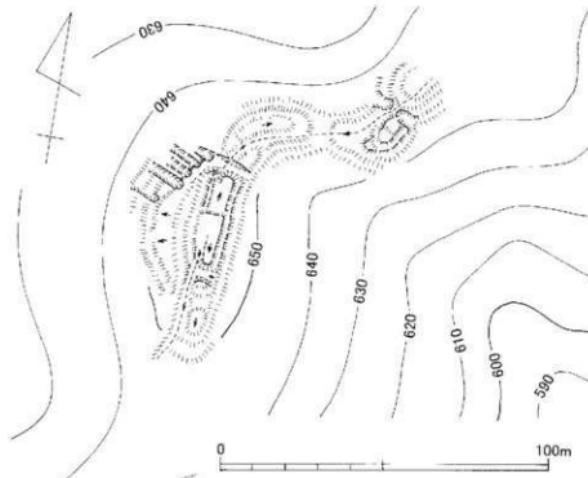
【沿革】豊前城井谷の最奥部、寒田集落の西側に聳える標高660mの頂部の北側、標高約650mの尾根上に位置する。報告書Ⅲ作成時には、築上町教育委員会からの情報として、『陰徳太平記』によると吉川広家が城井谷攻めに際して陣取ったという「猿尾の陣」があり、それが大字寒田の字「猿尾」であり、現地にも堀切が確認できるということであった。時間的制約から現地調査を行うことができなかつたが、改めて現地を確認すると城館遺構が確認できたため、ここに報告する次第である。

【概要】三角点のある標高660mの岩山から北へ尾根を進むと、尾根稜線上に堀切3本が確認できる。築上町教育委員会が認識していた堀切は最も北側の堀切で、その南側には堀切2本に挟まれる形で主郭が形成されているのが確認できた。主郭は南北約20m、東西約10mで、尾根稜線上の自然平坦地形を若干平坦にする程度の造成しか行っていないようであり、周囲には切岸と呼べるような急斜面は元から自然の急斜面と思われる東側だけである。また、北側の堀切に平行するように主

郭の西側には竪堀が3～4本構築される。また、尾根を北東側へ進むと、堀切と若干造成した地形を確認することができる。『陰徳太平記』のいう吉川広家の陣に当たるかどうかはなお検討の余地があるが、この場所が城館として使用されたことはまず間違いない。



第287図 猿尾の陣主郭（上）・堀切（下）



第288図 猿尾の陣縄張り図（事務局作成）

## 【筑前地城編】

筑前地城編							
地名	参考	年月	題名	著者	年月	題名	著者
1 佐賀山東城	(1) (年未詳) 9月10日	大友宗綱	竹田津部少輔	竹田津部少輔	大友宗綱	竹田津部少輔	大友宗綱
2 佐賀山西城	(1) (年未詳) 9月10日	大友宗綱	竹田津部少輔	竹田津部少輔	大友宗綱	竹田津部少輔	大友宗綱
3 皆瀬城	(1) 天文12年(1543)9月29日	内藤義統	松原文書14／「十大分類史料10」第2部P127	松原文書965／「飯塚市史 上巻」	(大友) 宗綱	松原文書14／「十大分類史料10」第2部P127	松原文書965／「飯塚市史 上巻」
	参考	慶長3年(1608)10月16日	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記
		慶長3年(1608)10月16日	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記
	参考	慶長3年(1608)10月16日	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記
4 諸ノ城	(1) 文和2年(1553)2月15日	平野貞良忠	肥後・佐賀文集321／「肥前朝通文九」	平野貞良忠	平野貞良忠	平野貞良忠	平野貞良忠
	(2) 文和2年(1553)2月15日	平野貞良忠	肥後・佐賀文集321／「肥前朝通文九」	平野貞良忠	平野貞良忠	平野貞良忠	平野貞良忠
5 有智山城	参考	(1) (年未詳)	大友宗綱	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
		(2) (年未詳)	大友宗綱	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
6 宝満城	(1) (天正10年(1582)7月5日	大友宗綱	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
	(2) (天正10年(1582)7月5日	大友宗綱	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
	(3) (天正12年(1584)1月15日	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
	参考	慶長3年(1608)10月16日	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記	『久留米市史 第7章』P173	家動記
46 彩木城	(1) (弘治3年(1560)9月25日	日杵義遠	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
96 二日城 (柏田山城)	(1) 天正13年(1585)9月23日	日杵義遠	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔	竹田津部少輔
			田原氏忠臣遺墨状	田原氏忠臣遺墨状	田原氏忠臣遺墨状	田原氏忠臣遺墨状	田原氏忠臣遺墨状
			片山文書26／「十大分類史料10」第二部P33	片山文書26／「十大分類史料10」第二部P33	片山文書26／「十大分類史料10」第二部P33	片山文書26／「十大分類史料10」第二部P33	片山文書26／「十大分類史料10」第二部P33

卷	标题	著者	年月日	内容
47	吉丸山城	参考		大久保家文書1818／「久保家史」第 二部前編(7) P255 源江家譜／「源江川史 上巻」 P934 吉川家文書67／『飯塚市史 史料編』上巻 P945
51	佐伝城	参考	(1) (永禄10年) 9月4日 (2) (永禄11年) 6月7日	大友宗麟書状案 戸次櫛浪致状 吉川義定正編大友
69	長尾城	参考	(1) 永和3年1月日 (2) 永和3年1月日	吉川義定忠状 吉川家文書154／『増補訂正編大友 史料編』 P160 吉川家文書154／『増補訂正編大友 史料編』 P160
90	芦原山城	参考		占家系系図22-10／『宗像市史 史料 編第二卷』 P214 正徳元年家文書276／『宗像市史 史料編第二卷』 P214
102	笠木山城 (笠城城)	参考	(1) (天正15年以降) (2) (永禄12年)	立花家譜／『飯塚市史 上巻』 P927 由布家文書46／『飯塚市史 上巻』 P936 梅野家文書892／『飯塚市史 上巻』 P920 立花家譜555／『飯塚市史 上巻』 P936 柳原周間家文書556／『飯塚市史 上巻』 P936 佐賀家文書460／『飯塚市史 上巻』 P911 入江家文書315／『飯塚市史 上巻』 P925
125	多岐 (馬見城)	参考	(1) (永禄12年) (2) (天正7年か)	秋月山城・小早川城 景清署表状 大友義綱表事書 秋月山城行狀 天正9年4月28日
126	肥尾城	参考		柳原周間家文書 P934
127	益富城	参考		「大隈ノ城」に移る。
182	越ヶ庄城 <small>少</small>	参考	(1) 「永禄11年」 6月28日	田原義定忠状 吉川家文書33／『久保家史』第2 部 P945 吉川家文書33／『久保家史』第2 部 P945
204	香月城	参考	(1) 正永12年2月日	於保源治忠状 P945

天文10年、「源蔵古井傳」正秋月文仙山・西牟田貢貢守・海足武「人代家  
臣」と出心致を奪わんとして棄兵す。天正13年、秋月種良輔・三郎種長、脇智を續ぎ「吉所山城」に居住。  
豊臣勢に敗北し、城を空け「吉所山」に引く。

天文10年、「源蔵古井傳」(休松合閑)における香  
大友宗麟と「源蔵古井傳」に對し、「今度之合職」(休松合閑)に對して御使を遣し、「吉所山城」に33年で仰せられたことは今  
も変わらぬことを在れる。

永和10年9月27日渡海し、「萬前國鴨山之御陣」に對して備  
功を挙げ、「萬前國鴨山之御陣」(休松合閑)において職  
本和10年9月27日渡海し、「萬前國鴨山之御陣」(休松合閑)において職  
功を挙げる。これについて、「承了(花押)」という今頃の近判  
者。

天文10年9月15日、宗像氏庭「許安岳」を構う。

天文1年、大友義龍以前に對へ、「許安岳」を開う。  
立花氏、宗像氏重と萬前郡野原で戰利する。氏重敗れて「野集  
城」に走る。

由布宮原、千手原御守院に對し、天正15日、「立花先主」の職が承認した旨  
の上達を受ける。その千手原御守の「立花先主」に對する御守りに萬前守などを置くを慶  
祝する。

天正13年、「笠城城跡」における軍事を質す。本文書は檢討を要す。  
22日、「笠城城跡」における軍事を質す。本文書  
は檢討を要す。

天正13年、「笠城城跡」(休松合閑)に對して立花氏の軍事を質す。本文書  
は檢討を要す。

天正13年、「馬見在番之儀」申入れる。  
なほ、「差出人」・廻所は毛色祇  
麻生地に「馬見在番之儀」とみえる。

ハヌカラツカツ。馬見・本当寺之體・廻所が見  
え、馬見の合職において、度々職を下す。なほ、「差出人」・廻所は毛色祇  
朝住山の毛色城を拠点とされる。

天正13年、秋月種良輔に對し、「大隈ノ城」に移る。

田原義定、大隈良輔が立て、今度、西大野原山に張山城が立てて置  
もつている件に取り掛かる。また、合職の「形・西大野原山」を防  
護させたことを記す。なお、年次は異る。

去年10月、「山城」に難歩り脚供し「香月城第3560」「南北朝文九  
併編第4巻」 P11  
55。筆忠につい。

No.	名前	性別	年月日	通歴	参考文献	著者	監修
216	多良倉佑綱 (含「麻生山」)	(1) □ (永) 和2年6月 日	長井公世重忠状	毛利家文書第314/「備北朝文 九州 編第2巻」P182	[長井五郎] 弘		麻生山城における合戦における職能を報告。「東了(花押)」と いう今川の像が記載。
228	古賀城	参考					文龜元年9月11日、占部尚安「鞍手郡古賀城」に移る。
243	白山城(宗像城) (水林年間まで)	(1) 氷地 1年7月 日 (2)	深澤時久重忠状 深澤時清重忠状	古文書文庫第353/「佐賀県史科選成 古文書文庫第354/「佐賀県史科実成 古文書文庫第356/「佐賀県史科選成 古文書文庫第358/「佐賀県史科実成	(深澤時久) (深澤時清)	康永1年9月25日、「宗像城」に召出せ忠臣をしたことを報告。これ について、「承了(花押)」という今川仲御の延喜有。 康永1年9月25日、「宗像城」に「過急」忠臣をしたことを報告。これ について、「承了(花押)」という今川仲御の延喜有。 応永8年8月、少弐忠貞・宗像氏経後より同様西面に築を張り、 それを述べる。	天文年、宗氏帳、 宗像文書286-1/「宗像市 史科編第2卷」P19
256	名残城	参考					天文年、宗氏帳、「高官御陣」に「名残城」に據る。
268	高官城	(1)	応安8年2月 日	田原下野守氏 河津新四郎兼業	田原氏姓重忠状 河津氏姓合戦手 第2巻 P201 大内文史48 P117		応安8年3月26日、「高官御陣」に「高官御陣」に據る。
271	龜山城	(1)	享和5年9月19日	南浦兼業合戦手 其注文写	河津氏姓重忠状 河津氏姓合戦手 第2巻 P204		享和5年(天祐年)9月19日、大友方の宗像氏氏、「高官御陣」に置 けられると、南浦兼業、脚から朱刺まで防地す。その間に大内氏家 に「龍馬守」の印が付された。「御役賃改丈太打門」(今戸扇手負)とある。而 に「龍馬守」の印が付された。「内内輪輪」とあり。「高官御陣」につくは、 一方の立派な御子士定治道の「龜山古城」の「龜山古城」の頃に享和5年9月19日、大友 方の立派な御子士定治道の「龜山古城」の頃に享和5年9月19日、大友方の立派な御子士定治道の「龜山古城」を指す。
	(2)	享和5年9月25日	大内義勝忠厚	河津新四郎兼業 河津新四郎兼業	(大内) 義勝 (大内) 義勝	河津新四郎 (隠) 麦	大内義勝、河津新四郎兼業に対する、享和5年9月19日に大友方の先発として、宗 像氏延が「高官御陣」を攻めた際、これを防ぎ延氏の頭を撲つたこと で合戦の罪が科せられた。
	参考			河津氏姓合戦手 第2巻 P205			河津義光の「西御山ノ越城」 河津義光の「西御山ノ越城」に居た。長鎧人内義勝、大水年8月家督を譲り「西御山ノ越城」 に居た。長鎧人内義勝を授かり隠義と号す。後、穿接 5年9月19日、大友方の立花親貞・宗像義勝・大和左近藤貞房等、「隠 義」に神し奉る。
	参考			河津氏姓合戦手 第2巻 P206			享和5年9月19日、大友方の立花親貞・宗像義勝が「西御山ノ越城」 に居た。長鎧人内義勝を授かり隠義と号す。後、穿接 5年9月19日、大友方の立花親貞・宗像義勝・大和左近藤貞房等、「隠 義」に神し奉る。
	参考			河津氏姓合戦手 第2巻 P207			河津義光一派が「西御山ノ越城」に居た。長鎧人内義勝を譲り「西御山ノ越城」 に居た。長鎧人内義勝を授かり隠義と号す。後、穿接 5年9月19日、大友方の立花親貞・宗像義勝・大和左近藤貞房等、「隠 義」に神し奉る。
272	上西郷城小	(1)	「永禄11年」6月28日	田原義宏忠状	萱場文書43/「大分県史科10」第2 部1291	(田原) 義宏	萱場美濃守殿 もつている件に關して、去つて、西御山宮山に所領が立て置 かせたことと謂える。また、合戦の中では「一城」を防衛 したことを意味する。なお、「生は西御山宮城」
273	盛飯城	参考			河津氏姓合戦手 第2巻 P167		明治5年11月、大友・少弐勢、「西御山ノ越城」を攻める。立花・源 を先鋒として、角兵衛・高島・板塙・飯盛ノ兩城」を攻める。河津弘義は「飯盛」 を守る。

名稱	参考	年月日	題名	説明
283 高島店紙	参考		阿倍田文書第2卷 巻P157	明治5年11月「大友・少佐等〔所々〕内閣」を攻める。立花・主事を先導とし、萬鳥店・飯盛・川原城・深川石京・阿野仲忠・遠藤源吉等數百騎がこれを立花・主事め立て撃ちる。「立花城番」を攻めこれを討つ。
292 立花山城	(1) (年未詳) 3月20日 参考	慶長3年10月16日	合馬姓由轉記 大友義兼状 合馬姓由轉記 大友義兼状 参考	天正14年、「立花城番」について瀧路。 天正元年9月、占部豊安・岐部左衛門尉に「立花城番」を攻めて敗れる。 天文元年9月、大内・大友軍敗れて「立花城」を去る。 天正元年9月、大内・大友軍敗れて「立花城」を去る。 天正元年9月、立花城番の「立花城」は天守閣と城下門が倒れ、降城の儀を立す。
	(2) (天文2年春) 2月4日 参考	杉興重状 合馬姓由轉記 合馬姓由轉記 参考	天正元年2月15日 合馬姓由轉記 合馬姓由轉記 参考	天正元年2月15日「立花城」は天守閣と城下門が倒れる。 天正元年2月16日「立花城」は天守閣と城下門が倒れる。 天正元年2月16日「立花城」は天守閣と城下門が倒れる。
	(3) (天文2年春) 3月9日 参考	大内義綱状 合馬姓由轉記 参考	大内義綱状 合馬姓由轉記 参考	大内義綱が到來、降城の儀を立す。
	(4) (天文12年2月12日) 参考	大友家社奉行連署事 字佐永弘文書2250／「大分県史料刊 第一編P203	宇佐永弘文書2250／「大分県史料刊 第一編P203	「立花城番」について、よく悪感を語らすこと。 「立花城」について、よく悪感を語らすこと。
	(5) (年未詳) 11月14日 参考	慶光書狀 房繼定書 房繼定書 参考	大友家文書第1195／「大分県史料刊 第一編P195 田尻中務太輔 田尻中務太輔 田尻中務太輔 田尻中務太輔 参考	「立花城番」の空防を難し、想像についてはは疎略なき旨を伝える。 水承4年8月、毛利隆元の進行によって、十ヶ園城が「壠」に下向。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。
	(6) (永禄12年) 5月10日 参考	大友宗麟書狀 大友宗麟書狀 大友宗麟書狀 参考	田尻中務太輔P114 田尻中務太輔P120 田尻中務太輔P121 田尻中務太輔P121 参考	大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。
	(7) (永禄12年5月10日) 参考	大友宗麟合戰手負往 文一見状 大友宗麟書狀 参考	田尻中務太輔P160 田尻中務太輔P160 大友宗麟書狀 大友宗麟書狀 参考	大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。 大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。
	(8) (永禄12年5月23日) 参考	大友宗麟書狀 参考	大友宗麟書狀 大友宗麟書狀 参考	大友・吉田・田尻中務太輔の5月6日「立花表」に打ける合戦動力を質す。
	(9) (年未詳) 参考	戸次義通(か)書 子	戸次義通(か)書 古文書編第6巻 P290	「立花城番」の空防で「(今)次伯善守筑前立花城主」とみえる。
	(10) 天正6年6月1日 参考	宗像第・官御宝殿置 札	宗像大社正藏772／「中世益田・益田 氏源家文書」P12	本林11年4月12日、「立花城」の難に苦戦が本陣を張る。城主は立花 宗像第・官御宝殿置 札 参考

卷	篇	段	句	事	題	題	題	題
292	立花山城	(11)	(天正12年)1月15日	朽繩宗盛著状	田尻家文書217／「柳川市史 史料編」(朽繩)宗盛	(田尻) 錫種	朽繩宗盛、「立花・宝満」への使者について誰然。	
		(12)	(天正14年8月12日)	神田元忠書状	3箇所「柳川市史 史料編」P166 深安地区三百忠書16／「庄原県史 古代中世編IV」P904	(神田) 元忠	該官僚丸根	「立花」に目を向けて櫛城すべき旨を伝える。
		(13)	(天正14年8月16日)	上井兼善日記／「柳川市史 史料編3 備他氏、田原氏史料」P280	毛利左兵衛頭源元を「立花之城」に出馬させる旨を伝えよとみえる。		「立花」は、と云ふ。	
		(14)	(天正15年)9月8日	豊臣秀吉朱印状写	多久家文書8／「佐賀県史科集成 古文書編第10巻」P311	(豊臣秀吉)	備造寺と民部大太夫のへ、	肥後国一揆に際し、毛利左兵衛頭源元を「立花之城」に贈り、立花山で斎す。その際、秋山健美、立花道雪の遺体を棺に納め、立花山で斎す。 天正14年、鳥越勝久、大友を伐たんとし、また「立花城」を改めんとする。
	参考	慶長3年(10月16日)	『久留米市史 第7巻』P280	大友勘合得集(編家臣記録)抄録9／大友勘合得集(編家臣記録)抄録9／『久留米市史 第7巻』P281	(少次) 改資	宗中務少輔殿	少先改資、「岩門(鬼見敷城)」を攻め、落居が近いことを通路。	
	参考	慶長3年(10月16日)	(1) (享和1年)4月28日	少先改資書状写	『長崎県史 史料編第11』P771		5月13日以来、「城管」遠田治部丞兼相と其に「岩門」に在城するを	
301	肥前山城(岩門城)	(2)	明応6年9月23日	大内氏奉行入選書奉書	長岡家文書478／「中世益田・益田氏関係史料集」P181	民部丞(朝部武長・朝部助量)・兵庫助量(杉弘隆)	「中世益田・益田氏関係史料集2」に同文書の事がみえる。 「安楽平城敷行」である遠田石見守兼常・龜田中務亮五郎が、早良郡辺に落居たる原因を大内政乱に因る旨である。	
315	安楽平城	(1)	文明10年(10月26日)	正任正440／「中世益田・益田氏関係史料集」P166	「佐々木家記録字	佐佐助六郎	足利尊氏の軍勢、「安前ノ原田カ城高祖」に入る。	
329	高臣城	参考	文禄元年(10月日)	佐々木家記録字	「佐々木家記録字			
348	柏子庄城	(1)	(年未詳)3月日	戸次道雪書状写	「佐々木家記録字」P277 「佐々木家記録字」P176	佐佐助六郎	「舟子岳船頭」について兵船が足掛かって起きた合戦の活躍を賞す。	
358	栗山城	(1)	(年未詳)9月14日	大友親治感状写	改正原田記附錄上66／「増補訂正編 年大友史料」14 P289	(大友) 親治	足利親治、栗松親兵奮闘に対し、9月8日の「小金丸攻口」における報功を賞す。	
		(2)		大友義長感状写	改正原田記附錄上67／「増補訂正編 年大友史料」14 P29	(大友) 義長	足利親治、栗松親兵奮闘に対し、9月8日の「小金丸攻口」における報功を賞す。	

## &lt;所在不明&gt;

No.	名称	接番	年月日	委託	提出	届先
7	嘉麻城	(1)	建武4年10月25日	長野助・草創執事	長野文書166／『飯塚市史 上巻』 P845	(長野) 仲原助 進上 勅奉行所
		参考			宗像軍記・中342／『飯塚市史 上巻』 P879	長野助、(少子)仲原助 に属して「飯塚内」(飯塚)に駿け入 り戦力をあげる。これについて、「承車、衣笠少式」(少式軒問)と いう証則あり。
<丘世塙館>						
No.	名称	接番	年月日	委託	提出	届先
K13	名島城	(1)	(年未詳)	牛庵(益田元洋) 代奉公童音	益田家文書161／『大日本古文書家分 け22-21』P179	豊臣秀吉、小早川隆景に益田景洋を小早川秀次に付すよと申す。 これを受け、「鍋留守臣」として「名島」に置からべき旨を述べる。
<新出城跡>						
No.	名称	接番	年月日	委託	提出	届先
	立岩城	(1)	正平8年8月15日	八幡三木若狭神体 合板裏面塗	立岩城主別大 宮司宇佐留井公 進 209／『飯塚市史 上巻』 P855	幕府御麻郡「河島」にある川島八幡宮の由緒、差出人に「立岩城 主」到非大宮司宇佐留井公とみえる。
		(2)	正平13年12月8日	漆生八幡宮神体銘字	立岩城主別大 宮司宇佐留井公 進 208／『飯塚市史 上巻』 P856	奉納された八幡大菩薩院坐宮御神像に関する神体銘の写。差出人に 「立岩城主」とみえ、川島八幡宮の「立岩城主」と同義。
	山田新城	(1)	(年未詳)	吉川元義・小早川隆 景達著者次	(小早川) 隆 景、(吉川) 元 景 春 佐藤又右衛門附 P913	「山田新城」に兵糧を差送れる件について、「船地送」は庄内の給人 に申し付けたこと、これを緩急なく行うよう連絡。

卷	年月日	題名	著者	出版社	版	年月日	題名	著者	出版社	版	年月日	題名	著者	出版社	
22	大三筋城	(1) (年未詳) 2月14日	田原綱忍書状	長野文書①／「大分県史刊行会編 第二部 P768	(田原) 須忍	長野内記兵衛尉	田原綱忍、長野内記兵衛尉	長野内記兵衛尉	田原綱忍	長野内記兵衛尉	田原綱忍	「三筋文書」において戰した城	功	内記兵衛尉	
23	宮尾城	(1) (永禄2年) 9月22日	某チヤ書状	田原家文書99／「福岡市史 史料編3 横	タメ (田原綱種)	タメ (田原綱種)	「宮山」における軍事を賣す。これに對し、「宮山」の下の軍忠を書き上げる。その中に、「一 切身親切に對し、都内を焼きつたことを、都外を火に付ける旨を大氏に「仰上」げてほい旨を伝える。	タメ (田原綱種)	タメ (田原綱種)	「宮山」における軍事を賣す。これについて、「未了(花押)」という今川 後(証押)あり。	タメ (田原綱種)	「宮山」における軍事を賣す。これについて、「未了(花押)」といふ。	タメ (田原綱種)	功	内記兵衛尉
32	宮尾城	(2) (永禄2年) 9月22日	某シ・留邊署書状	田原家文書101／「柳川市史 史料編3 横	留邊 (横川市史 史料編3 横)	留邊 (横川市史 史料編3 横)	「宮山」における軍事を賣す。これについて、「未了(花押)」といふ。	留邊 (横川市史 史料編3 横)	留邊 (横川市史 史料編3 横)	「宮山」における軍事を賣す。これについて、「未了(花押)」といふ。	留邊 (横川市史 史料編3 横)	「宮山」における軍事を賣す。これについて、「未了(花押)」といふ。	功	内記兵衛尉	
33	(年未詳) 5月24日	某状	松原文書①／「大分県史刊行会編 第二部 P748	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	周利賀道文 九 州編第2回 P52	
37	堀尾城	(1) 応安5年9月日	周布士心軍忠状	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	山川文書／「大分市史 5 中世・近	
(2)	元龜1年1月25日	大友宗麟書状	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	吉立家延文／「大分市史 5 中世・近	
(3)	(元龜1年) 6月8日	古川元春書状	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	
39	長野城	(1) (永禄3年) 10月5日	大友宗麟書状	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283	大友家文書第1439／「大分県史料32」 第二部 (2) P283		
50	岩谷岳城	(1) (永禄3年) 8月26日	大友宗麟書状	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	
(2)	(永禄3年) 9月19日	大友宗麟書状	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	
(3)	(永禄5年) 10月28日	大友宗麟書状	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	大友宗麟書状 (後納)	
(4)	(天正14年) 12月3日	益田元祥書状	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549	柳家文書第36／「中後益田・益田氏關係 史料集」 P549		
(5)	(天正14年) 12月12日	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	
(6)	(天正14年) 12月12日	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	豊臣秀吉朱印状	
(7)	天正19年11月1日	上御御起請文書	平生立平生内蔵館長文書872／ 「中世益田・金氏關係史料集」 P365	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	上(上物) 民部侍講吉左衛門附 左近直	
(8)	(天正15年以降)	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	由布文書第46／「飯塚市史 上巻」 P546	
参考		岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943		
参考	(1) 天正15年3月3日	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	秋月種長貢書字	
参考		北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	北肥鐵砲／「飯塚市史 上巻」 P940	
参考		岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	岩屋軍記／「飯塚市史 上巻」 P943	

No.	名稱	現状	年月日	趣意	資料整理研究会主催歴史観		提出	提出	
					(原)	(原)			
129	松山城	(1) (永禄5年) 9月10日 戸次織造書状 (2) (永禄5年) 11月12日 宗像氏貞書状 (3) (永禄7年) 3月2日 大友宗麟所領領置状	田尻家文書103/『柳川市史 文科編3 備他氏・田尻部の構成として「豊前地図」所収の中古文書を収集している。	戸次織造、田尻義頼にかし、当降のことは、田尻部の構成として「豊前地図」所収の中古文書を収集している。	(田尻) 梶浦 (原) 梶浦	(田尻) 梶浦 (原) 梶浦	戸次織造、田尻義頼にかし、当降のことは、田尻部の構成として「豊前地図」所収の中古文書を収集している。	戸次織造、田尻義頼にかし、当降のことは、田尻部の構成として「豊前地図」所収の中古文書を収集している。	
			山田家文書442/『飯原市史 上巻』 [904]	山田氏貞書31/『西国武士団体史料集 第1巻』P28	(宗像) 氏貞 (大友) 宗麟	有田加賀守(経 道) 鹿、山田氏 通(通重) 鹿	有田加賀守(経 道) 鹿、山田氏 通(通重) 鹿		
			時代頃西郷160-3/『宗像市史 史料編 第2巻』P125	時代頃西郷160-4/『宗像市史 史料編 第3巻』P126	(大友) 宗麟	大友宗麟、佐那兵庫助の「豊前国松山城攻口」における職功を賞し、豊臣頃 15町を預け置く。	大友宗麟、佐那兵庫助の「豊前国松山城攻口」における職功を賞し、豊臣頃 15町を預け置く。		
140	馬ヶ岳城	参考	参考	参考	(大友) 宗麟	有田加賀守(経 道) 鹿、山田氏 通(通重) 鹿	有田加賀守(経 道) 鹿、山田氏 通(通重) 鹿	大友宗麟、佐那兵庫助の「豊前国松山城攻口」における職功を賞し、豊臣頃 15町を預け置く。	大友宗麟、佐那兵庫助の「豊前国松山城攻口」における職功を賞し、豊臣頃 15町を預け置く。
			参考	参考	(大友) 宗麟	大内氏家臣陶弘輝、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道顛 蹶(敗)を次の「尾添」を聞き。その後、大内道顛蹶(敗)と報れ、豊前「馬岳」に入る。 なお、年次や内容が多く信憑性を欠く。	大内氏家臣陶弘輝、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道顛 蹶(敗)を次の「尾添」を聞き。その後、大内道顛蹶(敗)と報れ、豊前「馬岳」に入る。 なお、年次や内容が多く信憑性を欠く。		
			参考	参考	(大友) 宗麟	大内氏家臣陶弘輝、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道顛 蹶(敗)を次の「尾添」を聞き。その後、大内道顛蹶(敗)と報れ、豊前「馬岳」に入る。 なお、年次や内容が多く信憑性を欠く。	大内氏家臣陶弘輝、大内氏当主政弘に反旗を翻した大内氏一族の大内道顛 蹶(敗)を次の「尾添」を聞き。その後、大内道顛蹶(敗)と報れ、豊前「馬岳」に入る。 なお、年次や内容が多く信憑性を欠く。		
141	高畠城	(1) 安政8年2月 日原義安忠状 (2) 安政8年8月13日 日原義安忠状	入江文書23/『大分県史料10』第二部 P352、入江文書179/『播磨前正編平次 史料』P12	入江文書23/『大分県史料10』第一部 P355	(田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。
			後藤敏宏文書6/『大分県史料10』第二 部P303	後藤敏宏文書6/『大分県史料10』第一 部P303	(田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。		
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安、日原神五郎義 安(?)、同月13日に「播磨前正編平次 史料」にて、「播磨前正編平次」として、表題を正す。		
159	高畠城	(1) 安政8年2月 日原義安忠状 (2) 安政8年8月13日 日原義安忠状	入江文書23/『大分県史料10』第二部 P352、入江文書179/『播磨前正編平次 史料』P12	入江文書23/『大分県史料10』第一部 P355	(田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。		
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。		
167	大坂城 (旗井城)	(1) 安政7年 (2) 安政7年6月 竹田耕太郎合戦手 眞田耕太郎文書 竹田耕太郎文書 竹田耕太郎文書	豊前田崎井陣合戦手 眞田耕太郎文書 竹田耕太郎文書	豊前田崎井陣合戦手 眞田耕太郎文書 竹田耕太郎文書	(田原) 稲空 (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空		
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空	竹田耕太郎(?) (田原) 稲空 (田原) 稲空		
170	高畠城	(1) 安政8年2月 日原義安忠状 (2) 安政8年8月13日 日原義安忠状 (3) 安政8年2月 日原義安忠状	入江文書23/『大分県史料10』第二部 P352	入江文書23/『大分県史料10』第一部 P355	(田原) 稲空 (田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。		
			参考	参考	(田原) 稲空 (田原) 稲空 (田原) 稲空	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。	日原義安忠状、戊辰7年正月23日、城井義治前司入道(元都督正綱) 謀反により、今川に連れておけられ、城井義治が殺された。その後、同 年9月13日には「播磨前正編平次」として、表題を正す。		

内閣						
名前	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日
172 宇留津城	(1) 天正14年11月11日	益田元祥致状 益田高友家文書833/「中世益田・益田 氏閥史料集」P348	益田元祥致状 益田家文書398/「大日本古文家分け 22-1」P98	益田元祥致状 益田・益田氏閥史料集」P49	益田元祥致状 益田家文書(本)64/「中世 益田・益田氏閥史料集」P49	益田元祥致状 益田家文書833/「中世 益田・益田氏閥史料集」P49
(2) (天正14年) 11月12日	毛利輝元書状 益田元祥致状	毛利輝元書状 益田元祥致状	毛利輝元書状 益田元祥致状	毛利輝元書状 益田元祥致状	毛利輝元書状 益田元祥致状	毛利輝元書状 益田元祥致状
(3) 天正14年12月25日	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状
(4) 天正14年12月25日	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状	益田元祥致状 益田元祥致状
(5) 天正19年11月1日	上御飯田・上御飯田 「中世益田・益田氏閥史料集」P95 左解説	上御飯田・上御飯田 「中世益田・益田氏閥史料集」P95 左解説	上御飯田・上御飯田 「中世益田・益田氏閥史料集」P95 左解説	上御飯田・上御飯田 「中世益田・益田氏閥史料集」P95 左解説	上御飯田・上御飯田 「中世益田・益田氏閥史料集」P95 左解説	上御飯田・上御飯田 「中世益田・益田氏閥史料集」P95 左解説
196 櫛野屋城	(1) (弘治3年) 7月13日 [23] 日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
205 八田城	(2) 弘治3年7月23日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
207 山田城						
233 鶴原城	(1) (午未詳) 9月26日	大谷家加判朱通賀奉 書状 平林文彦書状 29』P27	大谷家加判朱通賀奉 書状 平林文彦書状 29』P27	大谷家加判朱通賀奉 書状 平林文彦書状 29』P27	大谷家加判朱通賀奉 書状 平林文彦書状 29』P27	大谷家加判朱通賀奉 書状 平林文彦書状 29』P27
<近世城郭>						
31 丹門城	(永禄4年) 8月18日	毛利元徳・向陽元通 書状	益田家文書006/「大日本古文家分け 22-1」P73	益田家文書006/「大日本古文家分け 22-1」P73	(毛利) 元徳 益田右衛門佐 (毛利) 元徳 益田右衛門佐 (毛利) 元徳	益田右衛門佐 益田右衛門佐 益田右衛門佐 益田右衛門佐
	永禄4年11月16日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
	(午未詳) 11月16日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
	(午未詳) 11月16日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
	(永禄5年) 10月13日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
	(永禄5年) 10月13日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
	(午未詳) 1月20日	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状	田原義宏致状 足立忠興書状
32 小倉城	繩応3年3月23日	宗義質村軍忠状 字	宗義質村軍忠状 字	宗義質村軍忠状 字	宗義質村軍忠状 字	宗義質村軍忠状 字

## X 総 括

### はじめに—福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業について

平成24年度から開始した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、28年度にてすべて完了する。当事業を総括するにあたり、事業を行うに際し留意した点などを最初にまとめておくこととしたい。

本事業は、福岡県内に所在する中近世城館および、それらに関連する遺跡（伝承地なども含む）を把握・周知化することを第一の目的として行ってきた。そのため、各城館の把握においては、まずは既知情報をすべからく把握することを重点的に行なった。誰しもが知るような城館であれば問題はないのだろうが、これまで城郭の一覧表などに名称ぐらいしか知られていなかったものについては、出典にあたり、それがなぜ城館として認識されるに至ったのかについて徹底的に把握することに努めた。その結果、原典の読み間違いや写し間違いにより存在するはずのない城館がリストの中に含まれていたり、同一の城館が重複してリストアップされていたりする事例が散見された。当事業ではそのような誤りが確認された場合、削除対象とした。そのため本県の場合、城館の実数は増えたが、このような精査を行った結果、若干増にとどまっている。

また、各城館の報告では、記載内容の出典や根拠となるべく明示するように努めた。これは本報告書の内容を第三者が吟味する際にも、混乱をきたすことがより少なくなると考えたからである。前述のように本報告において削除した城館についても、初めからなかったものとして全てを削除するのではなく、削除した理由や根拠を述べた上で、城館一覧表の末尾には削除した城館の一覧を掲げている。

次に、本事業では過去に作成された図面（以下、「既往図」）を基本としながらも、新たに縄張り図を作成するなどして、構造が把握できる城館については得る限り図面を提示して構造を説明することとした。本事業は筑前・豊前・筑後の3地域に分けて行ったが、中でも筑前地域は研究の蓄積も多く、事務局が作成する以前から多くの既往図が公表されていた。そのため、重要な城館であっても既往図があるもので構造を把握するに足る図面である場合には、その図を使用させていただいた。しかしながら既往図がない城館、また、詳細な構造を説明するには不十分な既往図しかない城館が、県内には数多く存在していたため、それらについては、把握できるものは全て事務局にて図面を作成して掲載した。このことにより、本報告書には県内の構造が把握できる城館についてはほぼ全て図面を掲載して、構造の説明を行っている。このようになるべく多くの城館の構造を図示することで説明することに努めたため、文章については事実関係の記載を優先し、城館にまつわる詳細な歴史や、縄張り構造などから導き出される推論まじりの考察などは記載することを極力差し控えた。ただ、それだけでは県内城館の歴史的価値までを理解することは困難であるため、本章「総括」にてその理解の一助とした次第である。

## 1 福岡県の中近世城館の歴史的概観

### はじめに

福岡県には、中世から近世初期にかけて築かれた多くの城館遺跡が遺されている。福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査で報告された城館遺跡は、筑前地域では、中世 362 遺跡、近世 16 遺跡、豊前地域では、中世 253 遺跡、近世 8 遺跡、筑後地域では、中世 230 遺跡、近世 12 遺跡に及ぶ。これらをあわせると、中世城館が 845 遺跡、近世城館が 36 遺跡で、この他に伝承地や関連遺跡、所在が不明のものも含めれば、県内の中近世城館遺跡の総数は、ゆうに 1000 を超える。

近世城館には中世から存続する城館を含むので、中世に築かれた城館が多数に及ぶことは容易に察せられる。福岡県に限らず、中世は権力が各地に分立し、それら諸勢力が争いを続けた時代であり、多数の城館遺跡の存在は、そのことを如実に表現するものである。

ここでは、福岡県を中心としながら、城館遺跡が築かれた中世から近世初期の歴史を概観し、本事業の調査成果を理解する一助としたい。



第 289 図 福岡県内主要中近世城館位置図

## (1) 鎌倉幕府の成立から蒙古襲来まで

治承寿永の内乱期の九州は、平氏の権力基盤であった。九州全域を統治した大宰府は、平安時代後期には、大規模な武士団を形成した筑前の原田・山鹿・粥田、筑後の三毛、豊前の板井などの豪族が、有力な府官層となって運営されていた。平清盛や弟の頼盛は、大宰大弐となって府官層を家化し、九州に強固な地盤を築いた。平氏に味方して活躍した九州の有力な武士として、原田種直、板井種遠、山鹿秀遠らがおり、その拠点として、種直の岩門城、種遠の神楽山城、秀遠の山鹿城などが伝えられるが、治承寿永の内乱期の城は遺構として残っておらず、その実態はつかみがたい。

元暦2年（1185）3月、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡した後、同年12月、源頼朝は、全国の荘園や公領に地頭を置くことを朝廷から認められた。頼朝は九州の安定を重視し、平氏についた九州の有力武士たちの所領を没収するいっぽう、それ以外の一般武士たちの本領を安堵して、積極的に御家人に取り立てた。九州では、この小規模な地頭たちの上に、広大な平氏方の武士たちの没収地を与えられた東国御家人が地頭として赴任するという、二重構造の地頭制が成立した。

当初、九州全域に及ぶ強い支配権を持った鎮西奉行として赴任した天野遠景が、九州の御家人たちや荘園領主の支持を得られず、建久5年（1194）頃に閑東に呼び戻された後、その権限を分けた国別の守護として、筑前・豊前・肥前（三前）と二島（壱岐・対馬）を支配する武藤資頼、筑後・豊後・肥後（三後）を支配する大友能直、奥三か国（薩摩・大隅・日向）を支配する島津忠久が任命された。「九州三人衆」と呼ばれたこれらの勢力を中心として、中世九州の政治史は展開する。

武藤資頼は、原田種直の旧領を給与され、大宰府の府官層を掌握する。嘉禄2年（1226）10月には朝廷から大宰少弐に任命され、以後、武藤氏が少弐を世襲して少弐氏を名乗った。鎌倉幕府の守護と大宰府の次官の地位をあわせ持つ少弐氏は、大宰府を拠点に九州北部に大きな勢力を築いた。

豊前国の板井種遠の旧領は、下野国の有力御家人宇都宮信房にあたえられ、豊前国や隣接する筑前国東部には、宇都宮一族が勢力をもった。野仲・山田・成恒・深水・大和・西郷・如法寺・山鹿・麻生の諸氏である。麻生氏は、北条得宗家領の山鹿荘の地頭代官職となり、遠賀川河口域に勢力を拡大した。平家没官領であった門司閑には、下総氏が門司六郷の地頭職を得て支配した。

閑東から遷って来た御家人ばかりではなく、古代以来の有力豪族である宗像大宮司の宗像氏、住吉神社神主の佐伯氏、筑後国府の有力官人の草野氏なども勢力を保った。原田種直は没落したものの、筑前の秋月・深江、筑後の三原・田尻など、原田氏と同じ府官大蔵氏末裔の御家人も多い。また豊前の長野氏は、宇佐宮領長野荘の地頭職に補任された開発領主の中原氏の子孫であった。城館遺跡からこの時期をみた場合、やはり顯著な遺跡は知られない。少弐氏の居城として、太宰府市の大浦ノ城が知られ、1969年に宅地開発によって遺跡は消滅したが、13～16世紀の遺物が出土している。遺構が消滅していることもあり、本来的な城郭の形状はわからない。

文永11年（1274）10月、高麗兵をはじめとするモンゴル（蒙古・元）軍約2万8千人が博多湾を襲撃した。文永の役である。九州の御家人たちは善戦したものの、最新兵器の「てつはう」や集団戦などの戦術に圧倒され、太宰府まで撤退し、上陸した蒙古軍と水城を防衛線として戦うことを見越すに至った。しかし、蒙古軍は強風の吹いた一夜が明けると不思議にも撤退していた。

鎌倉幕府は蒙古軍の再度の襲来に備え、博多湾岸の今津から香椎までの総延長20kmに及ぶ元寇防壁を築いた。防壁は現在も、今宿、生の松原、姪浜、西新、地行、博多、箱崎に残る。これは蒙古軍の上陸を防ぐための施設である。弘安4年（1281）6月に14万の大軍で襲来した蒙古軍の上

陸を、御家人たちは防壁を利用して阻止することに成功した。弘安の役である。その後、台風の襲来によって蒙古軍の船の多くは難破し、蒙古軍は日本軍の追撃により壊滅状態となって撤退した。

## （2）鎌倉幕府の滅亡から南北朝時代

蒙古襲来は新たな領地を獲得できた戦いではなかったため、鎌倉幕府は、恩賞を武士たちに与えることが困難であり、武士たちの一族内部での争いも多くなった。弘安8年（1285）11月に北条得宗家の御内人（内管領）の長崎頼綱と有力御家人安達泰盛が争った霜月騒動に連動し、少弐景資は泰盛に味方し、御笠郡の岩門城（龍神山城）に拠って、太宰府の浦ノ城に拠る兄の経資を攻めた。激戦の末、景資は討たれ、岩門城は落ちた。

蒙古襲来によって対外的危機感が強まった結果、鎌倉幕府は北条氏一門の権力が強化され、北条氏が幕府要職と守護職を独占して行った。得宗専制体制の成立である。北条（金沢）実政が鎮西探題として博多に下向すると、鎮西探題は裁判所の機能を充実させ、少弐氏の大宰府にかわって、九州の政治の中心となって行く。北条氏一門は、九州の6か国の守護職を占め、少弐氏は筑前国、大友氏は豊後国、島津氏は薩摩国と、それぞれが1か国を支配するのみになってしまった。

しだいに、北条氏への不満が高まり、元弘3年・正慶2年（1333）閏2月、後醍醐天皇が隠岐を脱出して伯耆国船上山に立て籠もると、この動きに呼応して、西国各地で反乱が起こる。5月22日に得宗北条高時が自刃し、鎌倉幕府が滅亡すると、少弐貞絆・大友貞宗らが鎮西探題の北条英時を鷺尾山（愛宕山）の城に攻め、滅ぼした。翌建武元年正月、鎮西探題金沢政顕の子の規矩高政・糸田貞義が、北条氏と関係の深い門司氏・山鹿氏・長野氏・星野氏・問註所氏などを味方に反乱を起こした。少弐氏の一族である惣領頼村も高政に味方する状況であった。高政は遠賀郡の帆柱山城を構え、山鹿政貞・弓削・宗氏で固め、長野政通・貞通兄弟が門司城を修築して門司氏が守り、貞義は三池郡の堀口城に陣を張り、黒木・星野・問註所氏らを招集した。後醍醐天皇の建武政権は、少弐貞絆・宇都宮冬綱らを下向させ、翌年の初めまでかかって鎮圧した。

建武2年7月、北条高時の遺児の時行が信濃で兵を挙げた。中先代の乱である。時行軍は、いちどは足利軍を一掃して鎌倉を制圧するものの、足利尊氏によって奪回された。この乱をきっかけにして尊氏は、建武政権から離反したが、翌年正月、京都で新田義貞・北畠顕家の連合軍に敗れ、九州に逃れた。少弐氏や大友氏を味方に付けた尊氏は、3月2日、多々良浜の戦いで、後醍醐天皇方の菊池武敏を破った。尊氏は太宰府の原山に入つて九州の武士たちを招集し、一色範氏を九州探題に任じ、4月3日、九州の勢力を率いて京都に攻め上った。

尊氏に敗れて吉野に逃れた後醍醐天皇は、尊氏が擁する北朝に対して南朝を立て、日本各地に皇子を将軍として派遣して、京都奪回を目指した。このうち、九州には、暦応元年・延元3年（1338）9月、征西大將軍として懐良親王を派遣する。懐良親王は、康永元年・興國3年（1342）5月、薩摩国に上陸し、南九州から勢力を拡大する。京都で足利尊氏・直義兄弟が対立して、観応の擾乱が始まると、尊氏の庶子で直義の養子となった直冬が、貞和5年・正平4年（1349）9月には九州に落ち、肥後の河尻幸俊に迎えられた。翌觀応元年・正平5年以降、九州探題の一色範氏と対立した少弐頼尚が直冬に味方し、九州は宮（懐良親王）方、將軍（足利尊氏）方、兵衛佐殿（足利直冬）方の3勢力が対立する複雑な情勢となつた。

觀応元年から2年にかけて、京都で南朝と結んだ直義が室町幕府の権力を握ると、直冬が九州探

題となり、また南朝に尊氏・義詮父子が下って直義を討伐にかかると、一色範氏が九州探題に返り咲くという具合に目まぐるしく情勢が変化する。この室町幕府の内紛によって、南朝は勢力を蓄えることができた。懐良親王は親応2年・正平6年（1351）9月、肥後國菊池から太宰府・博多方面を攻略するための遠征に出発。延文4年・正平14年（1359）8月、懐良親王と菊池武光の軍勢は、筑後國大保原の戦い（筑後川の戦い）で、少弌頼尚を破って大勝利し、康安元年・正平16年8月、宮方の征西府が太宰府を制圧したのである。

応安4年・建徳2年（1371）2月、室町幕府は九州奪回の切り札として、九州探題の今川了俊（貞世）を派遣する。了俊は豊後の大友氏や肥前の松浦氏と結び、自身は門司から上陸して3方向から太宰府を攻撃し、翌年8月に太宰府を陥落させた。了俊は少弌冬資を暗殺し、九州探題と少弌氏の対立を解消する。宮方は高良山を根拠地として抗戦したが、菊池武光が病に倒れ、子の武敏は筑後國御井郡北野で戦死、孫の武朝も福童原の戦いで敗れたため、肥後國隈府に撤退した。懐良親王は征西將軍職を甥で後村上天皇の皇子の良成親王に譲り、肥後國八代城に引退した。良成親王は筑後國上妻郡の山中で、五條頼元や子の良氏・良遠、孫の頼治らに守られて、明徳3年・元中9年（1392）の南北朝合一後も南朝再興をはかったが、かなわないまま、上妻郡大袖で薨去した。

60年あまりにわたって抗争が続いた南北朝の内乱は、史料にも諸勢力が拠った城塞に関する記録は現れるが、この時期の城館遺跡として明確なものは、ほとんど見受けられないようである。

### （3）南北朝の合一から大内氏の九州北部進出、少弌氏の滅亡まで

今川了俊は南朝勢力をほぼ一掃することに成功し、豊後国を除き、ほぼ九州全域を直接的に支配するようになった。了俊の強大化を警戒した將軍足利義満は、応永2年（1395）閏7月、了俊の九州探題を解任し、足利氏一門の渋川満頼を新しい探題として送り込んだ。渋川氏は九州探題職を世襲するものの、探題が九州の政治の中心的役割を担ったのは、子の渋川義俊が探題職を務めた1420年代が最後であった。有力武士の少弌・大友・菊池氏が九州探題と対立するようになり、幕府は中国地方の有力守護の大内盛見に、豊前国の中守護職を与え、九州探題の後見を依頼した。朝鮮王朝や明との貿易を推進するために赤間閻・門司閻ばかりではなく、博多をも支配下に置きたい大内氏にとって、豊前国守護となり、九州探題を後見することは大きな意義があった。

大内氏の九州北部への進出は、大友氏や少弌氏との対立を生じた。永享3年（1431）7月、大内盛見は、少弌満貞・大友持直・菊池兼朝と怡土郡萩原で戦い、戦死してしまう。幕府は衝撃を受けつつも、たくみな工作で菊池と少弌・大友を戦わせ、大友氏の内部分裂をはかった。これによって大内氏は九州北部の制圧を順調に進めた。大内氏は、豊前の門司・長野・貫氏、筑前の麻生氏を被官とした。大内教弘の代には、家臣の陶弘房を筑前守護代として箱崎に置き、仁保弘直を太宰府に、杉興信を京都郡の松山城に、陶美作を山門郡の垂見城に置いた。さらに原田弘種と秋月種繁を被官とした。大内政弘は文明10年（1478）に深野重親を太宰府の岩屋城に在城させている。これらの史料に名称がみえる城館遺跡も、室町時代前半の遺構ではなく、戦国時代末期のものが多い。

応仁元年（1467）5月、応仁の乱が起こると、8月に大内政弘は、2000艘の船をしたて京都に攻め上り、山名宗全が率いる西軍の主力として奮戦した。文明元年（1469）4月、東軍を率いる細川勝元は、大友氏に豊前国を攻めさせ、少弌頼忠（政尚・政資）を筑前守護に補任した。頼忠は亡命先の対馬から箱崎津に上陸し、筑前・豊前両国を支配する。翌年には、政弘の伯父の教幸が長

門国赤間関で反乱を起こし、これに麻生家延が応じている。領国の情勢が不安定化する中、政弘は文明9年10月に日野富子の斡旋で、周防・長門・筑前・豊前の守護職と石見・安芸の所領を安堵するという好条件で講和を結び、翌11月に帰国した。文明10年9月、大内政弘は少弐政尚を討ち、豊前・筑前を制圧した。大友氏が豊後・筑後をおさえ、少弐氏は肥前国三根郡を中心とする一地方勢力となり、肥前の一地方勢力となった九州探題渋川氏と小競り合いを繰り返した。

大内義隆は、天文5年（1536）5月、朝廷から大宰大弌に任じてもらい、9月に少弐資元を攻めて、肥前国小城郡多久城で自殺させた。大宰大弌として、少弐氏から古代大宰府の権威を奪った義隆は、さかんに「大府宣」を発行して武士や寺社の所領を安堵している。肥後の菊池氏と手を組んで、筑後方面の大友氏の動きも押さえた。豊前守護代に譜代の杉氏、郡代に橋津・佐田（宇佐）、野仲・城井・広津（築城）など、段銭奉行（室町幕府の職名で、段銭の徵収を掌る。段銭は、朝廷や幕府が臨時に諸国の田地から面積に応じて徵収した金錢である）に野仲（下毛）、山田・城井・如法寺（築城）、副田（田川）、伊川・貫（企救）など豊前国内の土着の国人を任命した。

少弐資元の有力家臣であった龍造寺家兼は、大内氏に通じたとして少弐の家臣から非難され、同13年、資元の子の冬尚の重臣の馬場頼周は策謀して、家兼の軍を各所に動出させて敗退させ、子や孫を殺害し、家兼を柳川に追放した。家兼は翌14年再挙して頼周を誅殺し、龍造寺の支配を復活した。冬尚は再起をはかったが、永禄2年（1559）、家兼の曾孫である龍造寺隆信に攻められ、勢福寺城に逃れて自害した。なお天正4年（1576）に大友氏が冬尚の弟の政興を押し立てて、佐賀を攻略しようとしたが、成功しなかった。少弐氏の活動が確認できるのは、この政興が最後である。

#### （4）大友義鎮の九州北部制覇

大内義隆の九州北部支配は安泰であるかにみえた。ところが、天文20年（1551）9月、義隆は重臣の陶隆房（晴賢）の反乱によって、長門国大寧寺で自殺し、大宰権少弐・筑前守護代の杉興運も粕屋の浜で討たれた。陶隆房は大友義鎮（宗麟）の弟の晴英（大内義長）を大内氏の後継に迎えた。しかし、大内氏の支配も長くは続かなかった。弘治元年（1555）10月、陶隆房が、毛利元就との巣島の戦いに敗れて討たれ、同3年4月に大内義長が長門の且山城で滅亡すると、大友義鎮は豊前・筑前・肥前に兵を送った。同年2月、京都郡の馬ヶ岳城で大内氏被官の野仲重兼が秋月文種（種方）に誘われて挙兵し、3月に馬ヶ岳城が秋月氏の手に落ちた。

永禄2年（1559）、三国を平定した義鎮は、豊後・筑後・肥後の守護職に加えて、新たに豊前・筑前・肥前の守護と九州探題に任じられ、九州北部の支配を手に入れた。大友氏は、筑後国を支配するにあたり、一門の豊饒氏と土着の有力国人の三原氏（原田氏の一族）を組み合わせて守護代とし、その下に筑後土着の国人の高一揆衆と国衆と呼ばれる豊後の地侍をたくみに配置した。大友氏は筑前国怡土郡を中心に所領があり、怡土莊博多浜には莊政所を置き、一門譜代の古庄氏や白杵氏を派遣する。白杵氏は怡土莊にあった柑子岳城督として、大友氏の筑前支配の一翼を担った。

これより先、秋月文種は毛利氏と通じ、弘治2年（1556）7月、筑前国夜須郡・嘉麻郡の古処山城で挙兵し、高良山の大友勢を攻めて敗走させたが、翌年7月、文種は戸次鑑連らによって討たれた。また、毛利元就に呼応した筑紫惟門は永禄2年2月に筑前で挙兵して博多を焼き、元就が秋に門司城を攻め、同4年夏ごろまでには元就の手に落ちた。10月から11月、大友義鎮は門司城奪還を目指したが、激戦の末、大友勢は敗退した。義鎮は、同年7月に田原義種が守る香春岳城を攻略したが、

数か月後には毛利氏に奪回されてしまったらしい。また、翌5年正月に松山城を戸次鑑連に攻めさせているが、落とすことができずに撤退している。なお、門司城攻防戦の敗北のためか、同年7月、義鎮は出家して宗麟と号した。大友氏は同年9月に松山城、10月に門司城の奪還を目指して攻めたが、毛利氏は大友氏の攻撃をしのいでいる。この後、翌6年3月、毛利元就は、將軍足利義輝の命により、大友宗麟と和議の話し合いを進めるうことになった。

また、義鎮は、高橋鑑種を御笠郡の岩屋城・宝満城に置き、豊前妙見岳城の田原親賢、筑前柑子岳城の白杵鑑速とともに、九州北部の軍事指揮と地方行政を任せたが、永禄10年（1567）に、鑑種の反乱が表面化し、秋月種実・筑紫広門・原田親種らをはじめ、宗像・麻生氏も加わり、太宰府天満宮の神官・僧兵たちも味方して、宝満城・岩屋城に入った。宗麟は、戸次鑑連（立花道雪）・吉弘鑑理（高橋紹運）らに豊後・肥後・筑後の軍勢を付けて、鑑種を攻撃させた。

大友勢は、岩屋城は落としたが、宝満城は落城させられず、永禄12年4月には毛利勢が筑前に侵入し、吉川元春・小早川隆景の軍勢が立花山城を攻撃した。宗麟も筑後まで出陣し、5月から6月の間、大友・毛利両軍は、立花山・宝満・岩屋城をめぐり、総力戦を展開した。やがて、大友氏の援助を受けた大内輝弘が山口に攻め入り、尼子勝久が但馬から出雲に入ったため、毛利氏は大友氏と和睦して撤退した。鑑種は孤立無援となって降伏し、毛利氏の支配下にあった小倉城に入った。宗麟は、宝満・岩屋城に高橋紹運、立花山城に立花道雪を置いて、筑前支配の再建をはかった。

### （5）大友氏・毛利氏・龍造寺氏・島津氏の抗争

天正6年（1578）11月、大友義統が日向國の耳川（宮崎県日向市）で島津氏に大敗を喫すると、大友氏に従っていた国人たちが相次いで離反するようになった。12月、秋月種実は筑紫鎮恒らとともに、大友方の高橋紹運が拠る宝満・岩屋両城に攻め寄せた。筑前では紹運と立花山城の立花道雪が頑強に大友方の拠点を守備し、種実らに対抗し続けた。豊前では長岩城の野仲鎮兼、本庄城の宇都宮（城井）鎮房、馬ヶ岳城の長野助守、香春岳城の高橋元種ら主だった国人がこぞって種実に呼応して大友氏に反旗を翻した。豊後国東郡でも大友庶家田原氏の宗亀とその娘婿である田原親貴が反抗し、天正6年末から同8年10月にかけて、大友氏はその領圧に追われた。

さらに、日向耳川の戦いの直後、筑後には、島津氏と連携した肥前の龍造寺隆信の勢力が押し寄せて來た。蒲池鎮並・田尻鑑種など筑後の国人たちも大友氏から離反する。天正7年、筑前では高祖城の原田了栄が大友方の拠点の柑子岳城を攻略して怡土・志摩郡を制し、豊前では高橋元種・長野助守らが蜂起し、豊前国の過半が大友氏の支配から離脱した。同年6月には、島原の有馬鎮純（晴信）が龍造寺鎮賢（政家）に起請文を差し出し、龍造寺氏が肥前を統一した。

いっぽう島津氏は、天正10年、肥後制圧を目指して北進を開始する。11月、肥前の有馬鎮純と筑後の田尻鑑種が隆信から離反して、島津氏の軍事支援を要請する。同12年2月、島津義久が肥後へと出陣し、3月、島津家久を有馬へと渡海させた。3月24日、隆信は2万5000の兵を率いて龍造寺方の有馬純豊の拠る島原城の救援に向かい、島津軍7000、有馬軍1000と圧倒的に優勢に戦ったが、家久の激励に奮い立った島津軍の猛反撃にあい、隆信は戦死した。沖田畷の戦いである。

島原で龍造寺氏が敗退すると、大友義統は筑後・肥前の奪回を目指し、実弟の田原親家、筑後の間註所鑑豊・五條鎮定らに、7月、黒木家永が籠城する猫尾城を攻撃させた。立花道雪・高橋紹運が加勢して、9月に同城を攻略し、大友勢は、山下城の蒲池鎮運を降して、龍造寺家晴が守る柳川

城を攻めようとした。10月までに島津氏は肥後国を制圧し、龍造寺政家も島津氏に降った。龍造寺氏、田尻鑑種、黒木氏、秋月氏、筑紫氏に加え、大友氏に焼き討ちされた宇佐宮の社家衆が大友氏打倒を島津氏に願い出る。島津氏は大友氏と和平中だったので、いったん筑後から双方撤退することを大友氏に申し入れ、翌13年閏8月に肥後の阿蘇氏を屈伏させた。この頃、立花道雪が筑後左陣中に病死し、大友氏にとって大きな痛手となった。

天正13年10月、閑白秀吉から九州停戦令が大友氏や島津氏に届けられた。翌14年正月、島津氏は自発的に停戦する意志がないことを表明する。秀吉は島津氏を討つべく、九州攻めの準備を加速する。4月、大友宗麟は秀吉に臣従して島津征伐を懇願し、秀吉の仲介で毛利氏とも和睦した。

秀吉の九州攻めに向けた動きや大友氏・毛利氏の関係修復の結果、肥前勝尾城の筑紫広門は、大友氏に味方することを表明。天正14年7月、島津氏は勝尾城を攻めて広門を降伏させる。島津氏は筑前に侵攻したが、岩屋・宝満両城の守将高橋紹運とその子で立花山城を守る立花統虎（宗茂）は、秀吉および毛利氏の援軍到来が近いとの情報を信じて降伏を拒否した。7月27日、岩屋城を守る紹運は760名の軍勢で5万の島津軍の総攻撃を迎へ撃ち、全滅した。島津軍は多数の戦死者・戦傷者を出しながら岩屋城を攻略し、宝満城を降伏させるが、立花山城は抗戦を続け、戦線は膠着する。すでに毛利氏の援軍が立花山城に入り、攻略が容易ではなく、戦力も低下して來ていたため、島津氏は撤退を決定する。立花統虎は撤退する島津軍を追撃して損害を与え、若杉城（高鳥居城）を襲撃し、島津氏に味方した筑後の星野鎮胤・鎮元兄弟を討ち取った。筑後で幽閉されていた筑紫広門も蒲池氏の監視下から逃れて勝尾城を奪回し、龍造寺政家も島津氏から距離を置いた。

#### （6）豊臣秀吉の天下統一、九州国分け、関ヶ原の戦いまで

筑前から撤退した島津氏は、天正14年（1586）10月に豊後に侵入し、大友義統を破って豊後に制圧したが、略奪行為を繰り返し、弱体化していった。この月のはじめには毛利・吉川・小早川勢も、秀吉の先兵として豊前に上陸し、高橋元種の居城小倉城を手はじめに、島津方勢力の拠る諸城攻略を開始した。11月、中国勢は秀吉の軍監の黒田官兵衛（孝高）とともに、高橋氏の属城である築城郡宇留津城を攻め崩した。元種は香春岳城に立て籠るが、毛利軍の攻撃を受け、12月に降伏する。翌15年正月、秀吉が京都を発つ。3月、島津軍は豊後から総退却をはじめる。4月はじめ、秀吉軍が秋月氏の属城である田川郡岩石城を攻め落とし、秋月の攻略に向かったため、秋月種実・種長父子は古処山城を出て、剃髪して秀吉に降伏した。以後、秀吉の弟秀長に率いられた大友・毛利・小早川・宇喜多など15万余の軍が日向へ、秀吉自身も10万余の軍を率いて肥後に進み、薩摩を目指した。4月17日に島津義久・義珍が宮部継潤・黒田官兵衛の陣する日向根白坂を攻めるが、敗退し、5月8日、薩摩川内泰平寺の秀吉陣所に剃髪した義久が出頭し、降伏した。

同年6月、秀吉は筑前箱崎で九州の国分けを行った。筑前国および筑後国生葉郡・竹野郡、肥前国基肄・養父半郡を小早川隆景に（居城は立花山城・名島城。以下同じ）、同秀包に筑後国御井・御原・山本郡（久留米城）、筑紫広門に上妻郡（山下城・福島城）、立花統虎に三瀬・山門・下妻郡（柳川城）、高橋統増に三池郡（内山城）、黒田官兵衛に豊前国六郡（馬ヶ岳城・中津城）、毛利勝信（森吉成）に同国企救郡・田川郡（小倉城）、佐々成政に肥後國、大友義統に豊後國、龍造寺政家に肥前四郡が安堵された。秋月・高橋氏は日向に転封、有馬・松浦氏は旧領を安堵された。

同年、肥後では佐々成政の検地への不満から国人一揆が起こり、一揆は鎮圧されたものの、成政

は責任を問われ切腹させられる。豊前でも宇都宮鎮房は秀吉からの伊予転封の命令を不服とし、黒田官兵衛による検地への国人衆の不満もあり、官兵衛が肥後国一揆鎮圧に赴いた隙をつき、10月、鎮房と宇都宮一族の野仲鎮兼など有力国人は一揆を起こした。一揆は吉川広家の援軍も得て、12月までに鎮圧され、鎮房は人質を出して降伏したが、翌年、中津に誘い出され、官兵衛の指示を受けた子の長政に殺された。本拠地の城井谷も長政に攻撃され、宇都宮一族は滅亡した。秀吉の統一政策によって、大名からも自立的な勢力だった国人領主や土豪、海賊たちは相次いで圧殺されて行く。

慶長3年（1598）8月の秀吉の死により、豊臣政権は崩壊に向かい、同5年9月の関ヶ原の戦いに至る。黒田長政は徳川家康の東軍につき、関ヶ原で活躍するとともに、官兵衛も豊後石垣原の戦いで、西軍についた大友義統の軍を破り、小倉の毛利勝信を降伏させ、久留米城や柳川城を攻略した。戦後、長政は家康から筑前国を与えられた（居城は名島城・福岡城。以下同じ）。細川忠興が豊前国を与えられ（中津城・小倉城）、筑後国は、毛利秀包・立花宗茂・高橋統増（直次）・筑紫広門が西軍についたために改易され、田中吉政が筑後国を与えられた（柳川城）。

### むすび～近世四藩の成立～

福岡藩では、慶長5年12月に黒田長政が名島城に入った後、福岡城を築き、また豊前との国境付近を中心に、地域支配の拠点として、六端城（若松・黒崎・鷹取・益富・松尾・麻氏良城）を築いた。六端城は元和元年（1615）の一国一城令で廃城となっている。元和9年、長政が死去すると、二代藩主忠之は遺言により、三男長興に秋月5万石、四男高政に東蓮寺4万石を分与し、秋月・東蓮寺（延宝3年・1675年に直方藩に改称）の両支藩が成立した。長政の筑前入国直後、秋月には叔父の直之が1万2000石を与えられて配置され、秋月氏以来の秋月城（陣屋）を居館としたが、慶長14年に直之が死去した後は番士が置かれ、元和9年の秋月藩の成立によって城下町となった。高政は寛永3年（1626）に藩主居館（直方陣屋）を完成させた。

小倉藩では、慶長5年12月に細川忠興が中津城に入った。領内の要衝の端城には一族・重臣を配したが、元和元年の一国一城令で門司城以下の端城は破壊された。忠興は後に小倉城に移ったが、中津城も嫡男忠利の居城として維持し、家督を譲った後は忠興が中津城を隠居城とした。寛永9年（1632）、肥後熊本の加藤忠広が改易され、細川忠利は熊本に転封となつた。企救・田川・京都・伸津・築城・上毛郡15万石は小笠原忠真に与えられ、その他の豊前地域も小笠原一族が配置された。

筑後国は慶長19年に田中吉政が病死した後、後を継いだ子の忠政とその兄の康政が対立し、大坂夏の陣に忠政は遅参してしまう。康政の讒訴により内通を疑われ、忠政は江戸に留められることとなり、元和6年8月に後継ぎがないまま忠政が病死すると、田中氏は改易された。同年末に筑後国は、御井・御原・三潴・山本・竹野・生葉郡が有馬豊氏に（居城は久留米城。以下同じ）、山門・下妻・上妻郡と生葉郡の一部が立花宗茂に（柳川城）、三池郡が立花種次（高橋直次の子）に与えられ（三池陣屋）、久留米藩、柳川藩、三池藩が成立した。

【参考文献】  
副島邦弘・近沢康治編『九州観賞自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XXIX 付録 福岡県中近世山城跡』福岡県教育委員会、1979年  
阿部猛・西村主子編『戦国人名事典』新人物往来社、1987年  
吉永正春『九州戦国合戦記』海鳥社、1994年  
川添昭二他著『豊前40福岡県の歴史』山川出版社、1997年  
峰岸純夫・片桐昭彦編『戦国武将・合戦事典』吉川弘文館、2005年  
森茂曉『戦争の日本史8 南北朝の動乱』吉川弘文館、2007年  
山本浩樹『戦争の日本史12 西国戦国合戦』吉川弘文館、2007年  
アクロス福岡文化財編纂委員会編『アクロス福岡文化7 福岡県の名城』海鳥社、2013年

## 2 福岡県の中世城館跡の構造的特徴

### はじめに

福岡県では、平成24年度より県内に分布する中近世城館跡の分布調査を開始した。調査は5ヶ年におよび、平成28年度に終了した。すでに福岡県における中近世城館跡については、『日本城郭大系』第18巻<sup>(1)</sup>で、718ヶ城が記載されており、おおよその分布数は把握されていたものの、各城館跡の構造を示す平面図（縄張り図）はほとんど作成されていなかった。その後、個人的に県内の城について調査された廣崎篤夫氏の『福岡県の城』<sup>(2)</sup>、『福岡古城探訪』<sup>(3)</sup>や、中村修身氏の『北九州・京築・田川の城』<sup>(4)</sup>などが続々と刊行された。そしてそれらの集大成として、福岡県内の教育委員会で文化財行政に携わる職員を中心に組織された、福岡県の城郭刊行会によって『福岡県の城郭』<sup>(5)</sup>が刊行され、多くの県内の中世城郭の平面構造も把握されるようになる。

福岡県では、今回の分布調査について、全4冊におよぶ調査報告書を刊行している。この報告書によってほぼ県内全域の中近世城館跡の位置、構造、歴史を明らかにすることができた。そこでそうした個別の城館跡を比較検討することによって、福岡県内に分布する中世城館跡の特徴について俯瞰してみたい。

### 畝状堅堀群の用いられ方

まず分布調査の最大の成果のひとつとして、畝状堅堀群の認められる中世城館跡の分布状況が明らかになったことを挙げることができる。その集中する地域として筑前中東部・豊前・筑後北部があり、数量ともに他の分布域を圧倒している。ここは秋月氏の拠点および秋月氏と敵対する勢力との係争地ということができる。岡寺良氏によると、秋月氏が戦略上重要な城館に偏在的に畝状堅堀群を敷設し、さらにはそれに誘発された宗像氏や草野氏、立花氏も城館に畝状堅堀群を用いたとする<sup>(6)</sup>。

ところで、畝状堅堀群はその構造が単純に堅堀を連続して設けるだけではなく、法則性をもつていくつかのパターンに分類されることが近年提唱されている。北部九州では岡寺良氏によってⅠ類【防衛バーツとして部分的に使用する】、Ⅱ類【城全体を周囲】、Ⅲ類【堅堀群からさらに形態を発展変化させたもの】の3類に分類され、そのⅢ類の発展をa【堅堀・横堀の巨大化】、b【堅堀の短小化】、c【横堀とうまく組み合わせた堅堀群】とした。

そうしたうえで筑前中東部・豊前西部・筑後北部のなかでも最終的に秋月氏が領域を拡大させていった豊前西部にⅡ類+Ⅲ類の城館の多い点を指摘している<sup>(7)</sup>。

さて、こうした畝状堅堀群は戦国時代の山城における人工的な防御施設の到達点を示すものであることにはまちがいないが、その堅堀群に防御された曲輪群に着目すると、横矢や折、さらには虎口構造に発達した点を見出すことができない。つまり斜面地【切岸】には発達した堅堀群が導入される一方で、平坦面は発達しないというアンバランスさを指摘することができる。從来畝状堅堀群の存在する山城イコール発達した城郭構造という図式であったが、はたしてそうなのであろうか。

北部九州で畝状堅堀群がもっとも集中する地域の中心となる秋月氏の本拠である古処山城は古処山の西方尾根部（北郭）の北側斜面と、南方尾根部（南郭）の西側から南東側に畝状堅堀群を巡らせる典型的な城郭として著名である。しかし、山頂部や尾根頂部の曲輪加工はほとんどなされていない。同様に馬ヶ岳城の山麓部に構えられた畝状堅堀群は土塁と横堀の長大なラインに構えられて

いる。土壘には折も認められるのだが、やはり曲輪は認められない。おそらく折の存在より戦国時代後半に築かれたものであることに違ひはないのだが、曲輪や虎口に戦国時代後半の発達した構造は認められない。

こうした観点で畠状堅堀群を見ていくと、その大半は曲輪部分が未発達であり、削平ではなく、虎口も認められない。おそらく斜面地の防御として発達したのが畠状堅堀群であり、切岸→堅堀→畠状堅堀群という発達過程が想定できる。さらに畠状堅堀群は斜面地防御施設として堅堀が二段にわたって構えられる等覚寺城、長野城の構造となる。横堀と連動する畠状堅堀群も横堀は斜面地を防御する施設だったのである。

畠状堅堀群と曲輪面のアンバランスは決して矛盾するものではない。曲輪面と斜面地の防御施設は同一に発達するものではなく、斜面地防御に集中する築城と、曲輪面防御に集中する築城があつたのではないかと考えられる。こうした発達形態によってアンバランスさの矛盾は解消されるものと考えられる。秋月氏はまさに斜面防御に専念したのであり、それに誘発された敵対勢力もそれに倣ったのではないだろうか。古処山が異常に高い山に選地する山城である点も、斜面防御の城であつたことを物語っている。

#### 石垣・石積みの用いられ方

福岡県の中世城館跡で今一つ注目される遺構として石垣を挙げることができる。石垣は織豊系城郭により出現した。しかし、15世紀後半から16世紀前半に日本列島の数か所において石垣を作りうる城郭が出現している。信濃松本地域（林小城、山家城（第291図）、埴原城、桐原城）、美濃（大桑城、伊木山城）、北近江（小谷城、鎌刃城）、南近江（観音寺城、小堤城山城、佐生城、三雲城）、西播磨・東備前（感状山城、三石城、富山城）、北部九州と、戦国武将である三好長慶の居城（芥川山城、飯盛城（第290図））などで明らかに安土城に先行する石垣が確認されている。

そのひとつである北部九州では、筑前で有智山城、烏岳城（城ノ辻）、懸尾城、笠木山城、帆柱山城、花尾城、古賀城、篠岳城、鷺ヶ岳城、一ノ岳城、七曲城、安楽平城、高祖城、二丈岳城に、豊前では櫛狩屋城、追揚城、雁股城で石垣が確認されている。

筑前の典型例として花尾城の石垣を見ていきたい。花尾城の中心部はI、II、IV、Vからなるが、ほぼこれらの曲輪が石垣によって構築されている。Vの南側斜面に構築された石垣は高さが3mに



第290図 飯盛城石垣



第291図 山家城石垣

およぶもので、土留めの石積みなどではない。自然石を積む野面積みであるが、隅部を構築している。さらに注目されるのはⅡ郭の北側斜面に設けられた石垣である。二条の登り石垣を構え、最下部には方形の井戸状の石組が組まれている。水の手（井戸）防御の登り石垣と考えられるが、類似する施設が認められない現在、その用途については断定はできない。しかし、中心部には石垣が構えられていることにより、この登り石垣も戦国時代のものと考えて差し支えないだろう。このように花尾城では積極的に石垣を導入した戦国期城郭として評価してよいだろう。こうした石壁は二丈岳城にも認められる。

なお、花尾城では石垣が構えられているにもかかわらず、敵状豊堀群も積極的に取り入れている。古廻山城の場合、曲輪面の造成がほとんどなされていないにもかかわらず敵状豊堀群を設けるというアンバランスさとは対極に位置付けることができる。織田・豊臣の城では石垣を導入するが、この石垣が防御ラインを形成するため、堀切や敵状豊堀群を採用しない。これに対して花尾城では石垣は防御ラインというよりもむしろ曲輪を確保するための施設として導入され、切岸の防御としては敵状豊堀群を設けたものと考えられ、やはりアンバランスなものではない。しかし石垣と敵状豊堀群という違和感より、石垣の構築を麻生氏段階にまで遡るものではなく、豊臣大名である小早川氏、黒田氏段階まで下がる可能性も指摘されるが、曲輪面確保と切岸面防御という構造からは戦国時代の麻生氏による構築と考えてよいだろう。

同様の石垣として評価できるのが、宗像大宮司家の最後の拠点となった薦岳城である。石垣の規模は主郭の南側斜面だけに確認されており、花尾城に比べて小規模ではあるが、高さ2mにおよぶ野面積みの本格的な石垣を築いている。ここでも敵状豊堀群を設けており、石垣と敵状豊堀群に時間差はなく、同時期に築かれた施設であることはまちがいない。なお、薦岳城では宝珠文軒平瓦や巴文軒丸瓦が採集されており、瓦葺建物も導入されていたことがうかがえる。

鷲ヶ岳城は那珂郡支配の拠点として大友氏の家臣大鶴宗雲が築いたとされる。ここでは敵状豊堀群は設けられないが、主郭の周囲および主郭東側山腹に構えられたⅢ郭に自然石を用いた野面積みの石垣が用いられている。

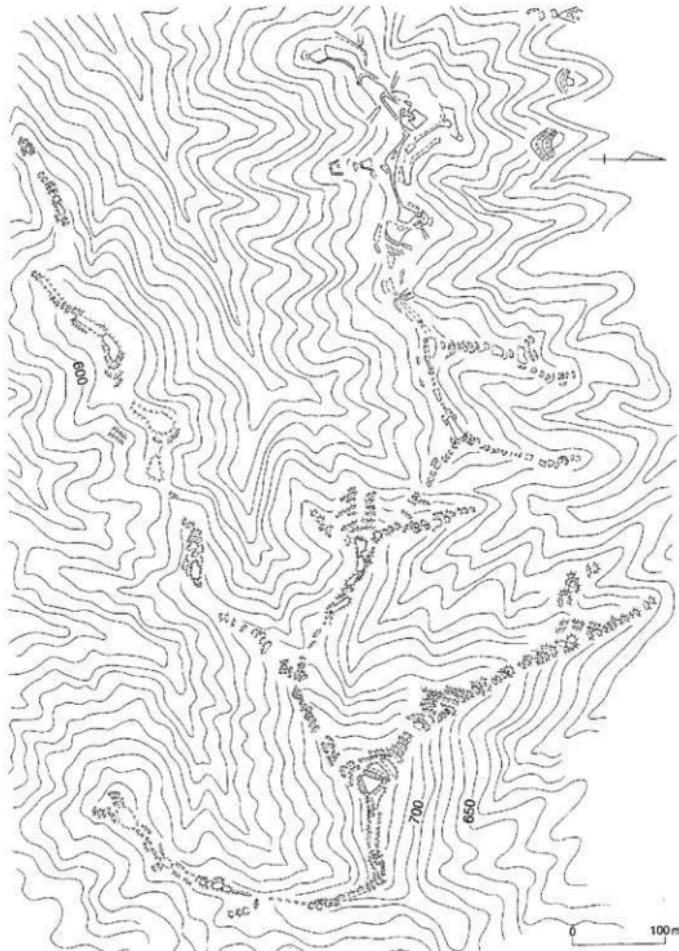
また、同じく大友氏の家臣である小田部民部大輔鎮通入道紹忠が早良郡支配の拠点とした安楽平城でも自然石を積む野面積みの石垣が主郭の周囲に築かれている。巨大な堀切は設けられるものの敵状豊堀群は伴わない。これは鷲ヶ岳城も同じである。

さて、こうした筑前の石垣の導入について重要な鍵を握るのが高祖城である。高祖城は周防の大内氏により原田氏が城督となっている。ここでは発掘調査によって中心部の曲輪の段が石垣によって築かれていることが明らかになった。この高祖城の石垣は扁平な石を垂直に積み上げる工法で、これまで見てきた野面積みの石垣とは異なっている。また、発掘調査では礎石建物も検出されており、瓦も多く出土している。つまり石垣、礎石建物、瓦という織田・豊臣の城の特質がすでに筑前でも備わっていることが明らかになったのである。これは大内氏による技術とみてよいだろう。

豊前では上毛郡に所在する雁股城の石垣に注目しておきたい。主郭の曲輪上面から斜面にかけて積まれた登り石垣が認められる。扁平の石材をほぼ垂直に積み上げる工法は下毛郡（大分県）に所在する長岩城の登り石垣に酷似する。『豊前志』に「長岩城主野仲兵庫の出城なり」と記されており、両城には強い関係性が考えられ、斜面移動を封鎖する登り石垣もそうした関係で導入されたことが考えられる。

### 長大な陣城の構築

筆者が今回の分布調査でもっとも注目したのが攻城戦の付城の構造である。その典型が立花山城の南側に対峙する三日月山地区、さらにその南側に位置する城ノ越山地区の城郭遺構である。三日月山地区では東西約1km、南北約800mにわたり、総延長約2kmにおよんで曲輪が人々と築かれている。基本的には尾根筋を階段状に造成するのみで堀切は認められない。一部に畠状豊堀群を設けるが、極めて小規模なものである。城ノ越山地区でも800m四方にわたり、総延長約2kmにお



第292図 武名ヶ平城跡略測図

(鳥取県教育委員会 1988『鳥取県中近世城跡分布調査報告書(第2集)出雲・隠岐の城館跡』から転載)

よんで曲輪が築かれている。これらは永禄年間の毛利氏と大友氏による立花山城をめぐる攻防戦にかかる付城と考えられる。立花山城は大友氏の一族立花氏の居城となり、大友氏の筑前支配の拠点となり、筑前への進出を図る毛利氏との間での争奪が繰り広げられることとなる。三日月山地区は立花山城を包囲する毛利氏の付城として築かれ、さらにその外側に築かれた城ノ越山地区は立花山城の救援に駆け付けた大友氏の付城と考えられる<sup>(8)</sup>。立花山城に関してはこれまでに詳細な調査も実施されているが、三日月山地区、城ノ越山地区での城郭遺構は近年発見されたばかりであり、今後詳細な分析を加える必要があるが、とにかく長大な付城であることはまちがいない。

豊後では吉川城を紹介しておきたい。豊前と筑前の国境に位置しており、永禄11年（1568）に大三岳城、小三岳城に籠る大友氏方の長野氏を攻める毛利氏の吉川元春、小早川隆景によって築かれた付城と考えられる。東西約1kmにわたる広範囲な山稜部に曲輪が累々と築かれている。大半の曲輪はほとんど加工されず、堀切もほとんど設けられていない。とにかく山稜のピーク毎に主郭を構え、それぞれの主郭から南方に派生する尾根上には点々と曲輪が構えられている。ここでも明瞭な堀切は認められず、ただ兵の駐屯地として築かれたのであろう。

椎山城も全長2kmにおよぶ長大な城郭である。その構造もただ小曲輪を連続させるもので、立花山城三日月山地区、城ノ越山地区、吉川城と類似する。地誌類には戦国時代以前の歴史しか記載されていないが、これほどの長大な城が戦国以前のものとは考えられない。おそらく毛利氏による長野城攻めに用いられた付城の可能性が考えられる。

さらに木下城とその北側に伸びる尾根上にも1.5kmにわたって小曲輪が連続する城郭遺構が確認されたが、これも毛利氏による長野城攻防戦に築かれた可能性が高い。

毛利氏によるこうした陣城構築は中国地方でも認められる。武名ヶ平城跡（島根県飯石郡飯南町）（第292図）は永禄5年（1562）の毛利元就による出雲攻略の際に築かれた陣城と考えられる。その構造は福岡県における毛利氏の陣城と同じく尾根筋に延々と小削平地を設けるものである。



第293図 太閤ヶ平本陣周辺の縄張図（西尾孝昌氏作図）

実はこうした小削平を延々と築く構造は織田・豊臣の付城でも見受けられる。織田・豊臣の付城は横堀を巡らせ、土壁に折の付く矩形の構造となり、付城にも齊一性の強い築城技法を特徴としている。ところがこうした構造はその中心部に構えられており、その外側に小削平を階段状に構える場合がある。ひとつは天正9年（1581）の鳥取城攻めの羽柴秀吉軍の付城群である。太閤ヶ平と呼ばれる本陣は横堀が巡り、土橋には横矢のかかる土壁に囲まれた見事な付城である。この太閤ヶ平から鳥取城までの間に秀吉配下の諸将の付城が点々と構えられているのであるが、その付城と付城間に延々と小削平地が設けられている（第293図）。

また、天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めの際、別動隊による葦山城攻めで構えられた付城群にもこうした小削平地が設けられている。特に上山田陣城と、本立寺付城では尾根筋に延々と小曲輪を設けている（第294図）<sup>(9)</sup>。いずれも付城と付城間の尾根筋に構えられることにより、土壁の防御ラインと同じように籠城軍の攻城ラインの突破を防いだものと考えられる。土壁とせず、小曲輪としたのは兵を配置するためであったものと考えられる。

今回の分布調査で把握された長大な付城遺構の確認は大友氏や毛利氏の築城を考えるうえで貴重な発見となったものと考えられる。今後のさらなる分析に期待したい。

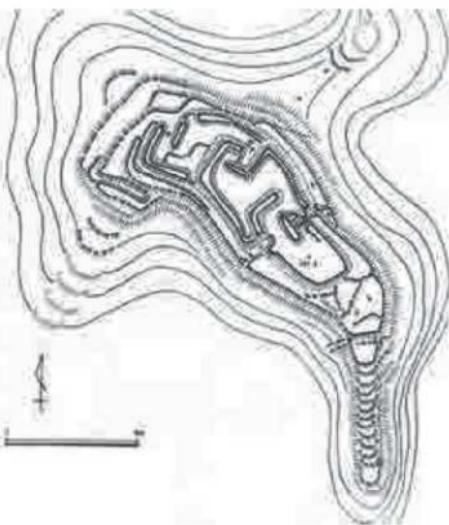
#### おわりに

平成24年度より5ヶ年におよぶ調査によって福岡県内に所在する中世城跡の分布と構造が明らかとなった。その特徴を拙稿で指摘することができた。こうした特徴は今後の研究に委ねたい。そのためにも今回の総合的な調査成果は基本資料となる。本報告によって今後の日本城郭史の研究の進むことに大いに期待したい。

さらにはこの報告から史跡指定が進むとともに、城跡が地域のまちづくりの核として活用されることを望みたい。

#### 【注】

1. 磯村幸男ほか 1979『日本城郭体系』第18巻 福岡・熊本・鹿児島 新人物往来社
2. 廣崎篤夫 1995『福岡県の城』海鳥社
3. 廣崎篤夫 1997『福岡古城探訪』海鳥社
4. 中村修身 2016『北九州・京築・田川の城』合同会社花乱社
5. 福岡県の城郭刊行会 2009『福岡県の城郭』福岡県刊行会・桜木地図を題材に一』『城館史科学』第4号 城館史科学会
6. 阿寺良 2006『戦国期秋月氏の城郭構成』福岡県朝倉市・桜木地図を題材に一』『城館史科学』第4号 城館史科学会
7. 阿寺良 2016『九州北部における敵空堀群の種類』『第33回全国城郭研究者セミナーシンポジウム「連続空堀群再考」』第33回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会
8. 藤野正人・山崎龍雄 2014『三日月山城砦群と城ノ越山城砦群の考察 - 対面する二つの巨大な城砦群』『九州考古学』第89号 九州考古学会
9. 中井均 2014『葦山城攻めの付城について』『葦山城跡「百年の計」きわめる・つたえる・いかす・郷土の誇り』伊豆の国市教育委員会



第294図 上山田陣城跡概要図（中井均作図）

### 3 海岸堡— Beachhead

福岡県は筑前・筑後・豊前それぞれに海を持つ。海との関わりが特色のひとつといえる。たとえば周防・長門あるいは肥前・肥後より、海から船にて攻められることは、しばしばあった。攻撃側は海岸堡 Beachhead (山) を確保しようとするし、防衛側はあらかじめ海岸堡とされる可能性のある山に築城し、それを防いだ。

高さのある山を確保できれば、弓矢や投石、また鉄砲戦にも圧倒的に優位に武器が使えた。弓の射程距離が 60m だとして、山ならば落差 10m 以上はある。この距離、そして上下を挟んで低い側は、高い側には有効な射撃ができず、高い側は、引力を味方にして低い側に強力な弓矢を射すことができた。投石ならば短い距離から直接投げるか、シュリング (投石紐) を使う。落差があればあるほど、小さな石にも殺傷力が与えられる。低い側は何もできない。大きな落差でカブトも役立たず、こわれる。山にいれば、つぎの補給・支援部隊がくるまでの占領が容易となった。

先の大戦で、中国戦線にて少人数からなる微発隊に参加し、中国側兵士に包囲された経験を持つ元日本兵に話を聞いた。「山に上がりさえすれば助かる。上を向けた鉄砲は当たらない。伝書鳩を飛ばして本隊の救援を待つ」とのことだった。高低差で軍事的優劣が決まった。高さこそが防禦の基本である。三角州等、高さがない地での築城では、石垣や建物で、必要な高さを確保した。

攻防戦は海岸堡 Beachhead の確保にある。海岸堡の典型は文禄・慶長の役での倭城である。最初に豊臣軍が攻略したのが釜山湾岸にあった釜山子城で、攻略に成功して日本側の拠点になった。敗色が濃厚になった慶長の役に、海岸に面して築城された倭城も典型的な海岸堡であるが、通常の攻撃的な側面よりは防衛的な側面を持っていた。倭城の城域には港が含まれる。仮に包囲されても、他の海岸堡より友軍の補給があれば、たやすく落城はしない。海岸沿いの西生浦倭城、機張倭城、蔚山倭城、熊川倭城はその典型で、海の干満の影響を受ける洛東江沿いの竹島倭城、亀浦倭城、弧浦里倭城、梁山倭城なども海岸そのものに位置するとはいえないが、海岸堡の一種といえる。

寛永 14 年 (1637) の天草島原の乱で、島原城がキリシタン一揆に包囲されたが、「陸路は敵に成候故、船にて参候」(『原史料に見る天草島原の乱』、0044 佐野弥七左衛門覚書) とあって、城内の一ヶ所に港が確保してあれば、連絡・補給・支援が可能であった。

海こそ自由な通路であった。攻撃側も海からくるが、防禦側も海を最大限活用した。

福岡県内の海岸沿いの城はいずれも海岸堡としての本質を持つ。以下文献にあらわれるものを中心にして、紹介したい。

なお海岸堡とならび、橋頭堡 Bridgehead という言葉もよく使われる。本来は領国境に橋以外に通路がない場合、橋を渡った向こう側に築く陣地のことであるが、海岸堡と同じ意味での攻撃拠点の意味で使われることも多い。

#### 今津の港と後背地・本岡城郭、水崎城、柑子岳城

足利尊氏の袖判がある文書があり、筑前国本岡城郭を松浦佐志披に与えると記してある(観応元年・1350・9月11日有浦文書)。

判 (足利尊氏)  
下 松浦佐志披  
可令早領知筑前国本岡城郭同国志登社領家同地頭職 (以下略)

本岡城郭とあるが、筑前の本岡ならば志摩郡元岡以外には思い浮かばない。ともに領知せよとされた志登社については、元岡に隣接する太郎丸に志登宮という小字名がある（明治十五年字小名調）。太郎丸（村）の西に隣接して志登（村）があるけれど、志登社は太郎丸に属していたのかもしれない。足利尊氏によって元岡と志登社が与えられた。なぜこの本岡（元岡）が、村としてではなく、城郭として松浦佐志氏に与えられたのだろうか。

松浦佐志氏は松浦を冠し、「披」という一字名を名乗っているように、海賊松浦党の一員である。その根拠地は肥前国松浦郡の佐志（唐津市佐志）と考えられる。水軍だから志摩郡へは船で来たことであろう。元岡は今でこそ内陸地のように見えるが、その前面の耕地には古新開、新開、開といった字名が多く、干潟を小さく仕切りながら開田したものである。開田以前、南北朝時代であれば満潮時には、ほぼ自由に航海できたり、干潮時でも干潟内の河川と支流は航行できた。元岡・太郎丸間に流れる瑞梅寺川支流を盲川という。松浦党であれば、海図的な知識はあった。足利尊氏は今津瑞梅寺川干潟（前海という）の制海権を確保するために、盲川より海につながる本岡城郭、ならびにおなじく前海に面する太郎丸と推定される志登社領家同地頭職を松浦党に与えたのであろう。

元岡周辺・九州大学新キャンパス内にはいくつかの城跡がある。そのうち桑原地域の大神城（外山城）、松隈の志摩城、松隈城（馬場城）は元岡管内ではない。元岡に属する明確な城山として水崎城跡（旧元岡村字水崎、標高80m）のみがある。この山には土塁や壕のような遺構はないが、南から遠望すれば頂部および西に一段下がった一角が水平に造成されていることが確認できる（本書・筑前2、216頁）。明治37年海図には分銅山と山の名前が記入されている。海から見れば、分銅の形状のように、上が水平で縁が切り立っていたようだ。『筑前国続風土記拾遺』に「山上に平地有。縁有て周れり」とある記述もこのことを裏付けており、木のなかつた幕末のころには切り立った縁が観察できたようだ。九州大学新キャンパス内に保存されている。

この城は今津湾周辺・志摩郡東部におけるきわめて重要な戦略的な地位を占めており、いくどとなく争奪戦がくり返された。水崎合戦および水崎城衆（水崎人数）が登場する文献史料は8点もの多数が残されていて、そのあらましがわかる。由比重富文書の年欠11月29日大友親綱感状（史料、およびそれを所収する刊本については筑前2、293頁）は、水崎城衆中に宛てられたものである。

今度於水崎城、面々粉骨之由、其間候、喜入候、然者敵陣退散之由、常陸守所より注進候、大慶此事候、弥当城事、用心以下可被本走候、其段高崎尾張守所へ申合候之間、閑筆候、恐々謹言

十一月廿九日 親綱（花押）

大友親綱が大友家の当主であった期間は永享3～11（1431～1439）の9年間で、嘉吉4年（1444）卯月5日の史料に高崎尾張守源棟治が見える（柞原八幡宮文書・編年大友史料、年欠だが貞和2年（1346）頃とされる角違一揆の合戦奉行人に「高崎尾張守」がみえている（武家家法II 4-46頁）。世代からいって先祖であろうから、襲名があった）。永正四年（1507）正月25日には水崎合戦があった。「水崎古城麓合戦」ないし「水崎防戦」と呼ばれている。攻めかけられて麓にて防衛したらしい。大友側のは松新兵衛が軍功を挙げたが、しかし大友側の西徳王丸父親、さらに松隈七郎父らが戦死したことがわかっている（児玉鑑採集文書・7-106、是松氏所蔵、東大史料編纂所DB、麻奈古村大光寺文書）。水崎城衆の犠牲が多く、勝利し得たかどうかは不明である。

（享禄4年・1531）11月12日大内氏奉行人連署奉書によれば、水崎人数が原田領分・王丸兵庫允（大

内側）を攻撃した。城をめぐる攻防戦ではないが、「水崎人数」（水崎城に配置された軍勢）が原田陣に攻撃をしかけていた（児玉鶴探集文書・王丸文書、2-56、東大史料編纂所DB、『筑前国怡土庄史料』）。

このように敵対する大友側にも大内側にも、双方の史料に水崎城が登場する。水崎城は15世紀前半以来、100年に亘って軍事拠点として機能し続け、城の攻防戦を少なくとも二度経験した要害であった。よってこの城こそ、足利尊氏が与えた「本岡城郭」であり、最大の水軍・松浦党を頼んで守らせた城郭だと推定できる。であれば「本岡城郭」＝水崎城は1350年、南北朝初期以来200年間、継続して機能した重要な城郭であった。

この軍事枢要地を押さえれば、港湾都市である今津を掌握できる。仮に今津に敵が上陸しても、海陸双方から反撃ができる。今津には白杵端城（標高15.7m）と鷺城があるから、双方にて海岸堡を構築できたが、いかんせん水崎城に較べれば標高ははるかに低く面積も狭かったから、収容兵力もなく、軍事的な安定性には欠けるところがあった。また毘沙門山も、浜崎山も適地であったが、むしろ干潟内陸が重要視されたようだ。今津干潟・前海の最奥にあって、比高80mの水崎山（分銅山）が最適の海岸堡とされたことは、このように古文書史料に明確であった。

水崎城は長期の軍事拠点であるわりには、城郭としての造作には顕著なものがないが、これは弓矢や投石を主兵器としていた時代には、山の高さがあれば十分に防衛機能を果たす事ができたからである。むろん雨風をしのぐ建物は必要であったから、山上平坦地には建物が数棟たって、さらに平地が不足すれば、懸け造りで斜面に柱を立てて建物とした。水は不可欠だったから井戸を掘ったと推測するが、おそらく地下水脈に当たらなかっただろうから、山麓のしみ水を利用したものか。主郭を死守する思想は稀薄で、山麓の主戦場で勝敗を決している。享禄頃までは水崎城のような造作のほとんどない城でも、十分に防衛機能を発揮できた。

ところで享禄以降、水崎城は史料に登場しなくなるが、替わって登場するのが、柑子岳城である。水崎城の機能が完全に消えたとは考えがたく、文献には登場しないといつても、城兵が置かれた可能性はあるが、拠点としての地位は柑子岳城（254.5m）に移った。文書に好土岳とも書かれたのは、好字の使用である。

村田文書・年次4月28日森繁宣書状（写）によれば、

敵城柑子岳只今西刻落城候条、則時各至其境、可有出陣候

とあって、「只今西刻」（夕方6時頃）に落城、と臨場感がある。敵城柑子岳とあるのは大内側の発言で、繁宣については裏に「森美作」とある旨、注記がある。宛先は「基肆郡・養父郡」となっており、その両郡は九州探題領である。繁の字は九州探題渋川氏の通字で、森美作守繁宣は探題渋川尹繁より繁の一子を得ている（本史料は、『新修鳥栖市誌』中世編所収）。森繁宣は境まで出陣せよ、故參（古參）當參（新參）によらず、早く馳せ参れ、と指示を出した。朝から攻めて、夕刻に落城したらしい。この機に一気に攻めるべく、領内の武士に指示を出した。このように柑子岳城の動向は肥前にまで影響を与えるものであった。

天文2年（1533）7月1日の是松氏宛白杵親連知行預ケ状（児玉鶴探集文書、前掲）によれば、今度の「好土岳」の難儀などにおける忠節の賞により、所領が預けられている。これは大友方史料である。難儀とあるから落城したのであろう。

(同4年) 7月10日大内氏奉行人連署状(同児玉鑑採集文書、東大史料編纂所DB)には梅月八郎左衛門尉宛て、大内家家中よりの以下の書状が出された。

当御城普請、從去天文三年正月三日、至同四年二月四日毎月三ヶ度宛内廿一ヶ度不勤之由、仁保宮内少輔以目録注進、不參以外之儀ニ候、於已後者無懈怠可有其沙汰候、猶於油断者一段可被仰出候、恐々謹言

七月十日 (\*杉) 興重 判  
(\*弘中) 興勝 判

梅月八郎左衛門尉殿

大内方志摩郡代であった仁保宮内少輔の注進によれば、柑子岳城普請(\*土木工事)を天文3年より同4年にいたるまで、毎月3回勤めるはずだったが、うち21回が不勤であったとして、もつてのほか、と咎められている。3回×13ヶ月=39回(回)のうち21回だから53%を勤めていない。だが城の普請は1年と1ヶ月、継続して行われていた。現在の城の形=遺構は、こうした普請事業を受けた結果のものである。

『筑前国統風土記』に本丸跡は「城の上」と呼び、長さ60間・横8、9間ほどとある。標高254.4m、遠くから見れば、平坦に造成されていることが一目瞭然なのだが、山頂に上がってみると、意外に狭く細長い。60間×8間はよほどに狭いと実感できる。水平面といつても、完全なる平坦地ともいえず、緩やかな斜度があるが、当時はこれで十分であった。その下の曲輪を二の丸跡とし、「下城の上」と呼ぶ。長さ40間・横20間ほど、こちらは広いし、相当に平坦な感じがする。また北西にも、もうひとつ山頂がある。三角点のある本丸より30m程低いが、比高220mはある。小田観音堂や北の海上から見れば、柑子岳の一部をなすことは明瞭で、ここを城地に取込まなかった、とは考えにくい。たしかに視認できる遺構はないが、水崎城同様に建物等があったと考える。柑子岳は、明治37年海図では草場山となっている。地籍は草場のみならず、東側半分は今津地内で、北も小田に及ぶ。一帯でもっとも大規模な海岸堡であった。なお『筑前国統風土記』に南方三町ほどの所に陣尾と呼ぶ山があって、原田氏が当城を攻撃した時の陣所とする。陣尾(じんのお)は標高100mの山で、上がれば驚く程、間近に柑子岳を望むことができるが、残念ながら一帯の土取りが進んでおり、どのような遺構があったのかがわからない。向城の典型である。

#### 沓尾・蓑島

文亀元年(1501)閏6月24日、仲津郡沓緒崎(沓尾崎)における合戦で、大友軍は大内方仁保護郷らの軍勢を破った(7月13日大友親治感状、『大友家文書録』、同年8月3日仁保興棟合戦注文、『三浦文書』、『行橋市史』資料編227、230)。

この沓尾には陣山という地名がある。陣が置かれたことに由来しよう。これも典型的海岸堡である。

天文21年(1552)11月の豊前国津濃熊庄名寄帳(平賀家文書・『大日本古文書』、『行橋市史』301)に津隈庄の年貢を蓑島の藤左衛門尉の舟が周防小郡に搬送したとある。永禄4年(1561)9月6日、同月28日には蓑島で合戦が行われ(同年10月10日「児玉就方軍忠状」『萩藩閥閻録』3、『行橋市史』361)、11月に大友軍が敗走すると村上水軍が蓑島を攻撃、大友方の船10艘を破った(同月9日「毛利隆元感状」『萩藩閥閻録』1、『行橋市史』364、365)。天正7年には毛利方杉重良が蓑島へ渡り大友方に寝返り(正月18日「毛利輝元書状」萩藩閥閻録2)、この島をめぐり両軍が激しい攻防を続けた(3月7日「大友円斎書状」入江文書/史料叢集、以上

『行橋市史』478~480)。

蓑島も典型的な海岸堡である。その後に地形改変があつたらしく、遺構はみられないと報告されているが、豊前と防長の関係を考える上では重要な軍事拠点だった。むろん建物は建てられていたであろう。

河川内で潮汐の影響を受ける範囲内であれば、海岸堡になると考へる。六角川の潮汐限界点にあるおつばやま神籠石や、筑後川の同限界点にほど近い高良山神籠石は海岸堡であろう。よつて征西府拠点、あるいは大友氏拠点となった高良山城も広義の海岸堡である。

### 名島山と多々良浜

名島城の城山は多々良川河口にある。蒙古襲来・文永の役にて蒙古軍は筥崎宮を焼いているから(『勘仲記』)、後方多々良川干潟にも侵入しただろう。この山も占拠されたと考える。

足利尊氏軍と菊池武敏方が戦った多々良浜合戦の際にも、名島山は海岸堡として機能したはずで、当初は菊池側が布陣しただろうが、のち足利尊氏軍が占拠し、勝利したと考える。

永禄12年(1569)5月18日、大友と毛利との立花山攻城でも、「多々良川御越御陣」(『豊前覚書』)、「多々良浜」(『宗像記追考』)と見える(『大日本史料』当日条、588頁)。多々良浜にて合戦があったのなら、名島山の争奪があったであろう。

### 警固山=鳥飼城・福岡城

福岡城は西が樋井川河口で(慶長段階までは、のちの大濠公園北に河口があった)、東が那珂川河口で、当時は御笠川も合流していた。近世以前にも、古代以来の歴史があって、古代には警固所(大宰府西守護所)が置かれて、刀伊の入寇時には攻撃目標とされた(小右記)。また蒙古襲来時には高麗軍(東路軍)の攻撃目標とされて、鳥飼湯周辺にて激しい戦闘が行われた。この警固山は那珂郡と早良郡の郡境にあって、東は警固村、西は鳥飼村に属していた。今川了俊や渋川満直の居城として名前が見える鳥飼城(『九州治乱記』ほか)も、この警固山山頂の城を指す。ほかには鳥飼村には探題居城になるような城跡はない。

近世福岡城を築城する際に大がかりな造成がなされて、本丸御殿の広大な平坦地ができた。それ以前には中世城らしい段々の地形があつただろう。警固神社は移転させられたが、若一王子社のみは城内に残り、ほかに警固の藤と呼ばれる老いた藤が残された(『筑前国続風土記』)。

### 志賀島

志賀島は蒙古襲来時に蒙古(高麗軍=東路軍)が占領した。『蒙古襲来絵詞』には、志賀海神社に隣接する山にて警戒する蒙古兵と、海岸に設置された柵列や、海からの通路上の櫓門風な門が描かれている。これも典型的な海岸堡である。

海岸堡は自然の山でも十分に防衛機能を果たしたが、次第に防御機能が恒常化して要塞化していった。

今回報告された多数の城館跡の図は貴重な成果であつて、この図により今後、学問的にも文化財保護行政面にも、多くの材料が与えられた。うち、海岸際の山城や、潮汐の影響を受ける河川に面した山城は、当然ながら海岸堡で、度々の合戦で争奪が行われた。遺構が残りにくいものもあるけれど、軍事拠点としての枢要性があつて、歴史的に重要な役割を果たしてきている。

#### 4 福岡県における遺跡としての中近世城館

日本列島の歴史において、列島規模の争乱は二度にわたって起こったといえよう。その一つは、原始の弥生時代終末期に当たる2世紀後半の倭国の大乱（「魏志倭人伝」）もしくは倭国大乱（『後漢書』）である。この争乱は、列島各地で誕生しつつあった諸小国群相互間における、いわば朝権紛争であったともいえる。「魏志倭人伝」によると、結果的には、諸小国群に共立された女王・卑弥呼の誕生で倭国の大乱が終息した。因みに、倭の女王・卑弥呼は、邪馬台国を都とした。この倭国の大乱の終結は、その後、古代国家の形成に向かって歩み出す大きな契機となった。

倭国の大乱の実像は、「魏志倭人伝」や『後漢書』という文献史料によってまず解明されねばならないが、あまりにも情報量が少ない。そこで、同時代の考古資料に大きく頼らざるを得なくなってくるのである。倭国の大乱に係わる考古資料には、遺跡としては平地の大規模な環濠集落と、高地の小規模な集落のセット関係が重要である。そして、遺物には各種の武器・武具がある。いま見たような文献史料と考古資料の一体的なアプローチこそが、倭国の大乱の実像に迫れるといえる。

もう一つの争乱は、中世の戦国時代のそれである。古代の律令国家の崩壊後、12世紀末に、武士による政権である鎌倉幕府が成立したが、やがて15世紀中頃に起こった応仁の乱に始まり、列島各地で有力な権力者、いい換えれば戦国大名の間で、再統一に向けて争乱が相ついだ。戦国時代の争乱は、16世紀後半における豊臣秀吉による天下統一まで、100年以上続いた。

中世の戦国時代における争乱の実態は、もちろん文書・日記・絵図などの文献史料によるところが大きい。しかし、中世の文献史料は、近世の膨大なそれに比べると極めて少い。そこで、考古資料の役割が期待されるのである。考古資料といえば、城館つまり、戦国大名の居館・城下町そして山城などの遺跡が挙げられる。それらの遺跡群からはまた、日常生活用具としての土器・陶磁器や武器・武具など各種多様な遺物が出土する。そのような遺跡・遺物つまり考古資料と、前述の文献史料の統一的な分析によって、争乱の実態に接近できることは、原始の倭国の大乱の場合と共通している。

戦後の日本考古学における重要成果の一つとして、中世考古学が挙げられる。その代表的な事例に、福井市の一乗谷朝倉氏遺跡の調査成果が知られる。この遺跡は、中世末の文明3年（1471）から天正元年（1573）まで存続した、越前国の戦国大名・朝倉氏の城館に係わる遺跡である。一乗谷の朝倉氏に関して、各種の文献史料に基づいて、一定の歴史像は描かれて来たが、昭和43年（1968）から始まった、最後の城主・朝倉義景の居館跡の発掘調査によって、その実像が明らかにされた。山間部を流れる一乗谷川沿岸の平地には、城下町が形成され、その一角の山麓に居館が位置する。城下町跡に対する発掘調査の結果、武家屋敷・町屋・寺院などからなる城下町の構造解明が進んだ。そして、城下町背後の山間部に築かれた山城・砦・櫓などの遺構群、さらには遺跡の随所からの出土品の調査成果をトータルに合わせ考えると、戦国時代の緊迫感と、その中の日常的な生活感が彷彿として伝わってくるといえよう。

さて、ここで福岡県内の城館遺跡の調査成果と重要性・課題などに関して、ケース・スタディとして香椎B遺跡を取り上げることにしたい。

香椎B遺跡は、福岡市東区香椎に属し、標高90mの老ノ山と、その南麓の谷部に広がる。遺跡地の宅地造成に先立ち、平成7年（1995）から3カ年に渡って発掘調査が実施された。その結果、

調査を担当された下村智・瀧本正志氏らの見解によると、まず、谷部において、Ⅰ期（10世紀～11世紀末）からⅦ期（16世紀）にまたがって、中世遺構が変遷することが判明した。そのうち、Ⅴ期（14世紀前半～15世紀前半）では、大規模な敷地造成を行った後、大溝や堀のほか、柵列で1町や半町ごとに区画した敷地に多数の掘立柱建物群つまり屋敷群が出現する。また、応永6年（1399）・応永28年（1421）銘や、僧侶名・宗派を明示する文字を刻んだ板碑の出土から、この時期に禪寺が存在したと推測されている。そして、この屋敷群の北側背後の老ノ山山頂には、御飯ノ山城が築かれている。単郭の主郭内に7棟の掘立柱建物と柵列、複雑な構造を示す出入り口の門と櫓、そして、周囲の堀切、豎堀など山城の構造が完掘された。御飯ノ山城には一条の堀切と豎堀がめぐるが、豎堀を西南方に120数m下ると居館跡推定地に至る。ここには「里城」の字が残るが、未調査である。

御飯ノ山城について、貝原益軒の『筑前国続風土記』（1709）には、大内氏臣の一萬田彈正が籠城したところで、立花山城の出城とも記す。この場合は永享3年（1431）の大内盛見による立花城攻略に代表される、大内氏と大友氏の抗争が背景となっている。立花城は、御飯ノ山城の北方やや東寄り約2.8kmの指呼の間に位置する。さらに、御飯ノ山城の東側に当たる城ノ越山と、城ノ越山からは北方に当たり、立花山城との間に位置する三日月山には、それぞれ城砦群が分布する。これららの城砦群は、永祿年間（1558～1570）における周防の毛利と豊後の大友両氏による立花山城争奪戦に係わるものといわれる。すなわち、三日月山は立花山城包囲の毛利方の、そして、城ノ越山を立花城救援のため陣取った大友方の、それぞれの城砦群と位置づけられている。

ところで、上述の香椎B地区の西方800mほどの地点で、一般国道3号博多バイパス建設に伴って、平成19年から2年間にまたがって、発掘調査が行われたところ、一町四方ほどと推定される屋敷跡が検出された。密集する遺構群は、掘立柱建物・井戸・土坑・製鉄関係工房・墓からなり、13世紀後半から16世紀にまたがっている。ここで、13世紀後半といえば、蒙古襲来時に石築地役・異国警固番役として、大友氏が香椎宮に入つて来る時に当たる。また、16世紀は、天正14年（1586）の薩摩の兵火によって、立花城下近辺が、香椎宮も含めて焼き討ちに遭う時期である。

香椎宮は、香椎A・B両遺跡の中間に位置するが、古代の大宰府の官人に始まり、中世の戦国大名にも篤い信仰の対象となっていたことと思われる。一方、蒙古襲来の鎌倉時代後期には、社領が大友氏の領地となるが、南北朝時代には立花城とその関連城砦群とともに、戦乱に巻き込まれる結果となった。

なお、香椎宮に関して、旧社家の三苦家に伝來した戦国時代を中心とする文書群は、香椎・立花城・香椎宮や、それらをめぐる大友氏・大内氏などの動向を考える上で重要である。

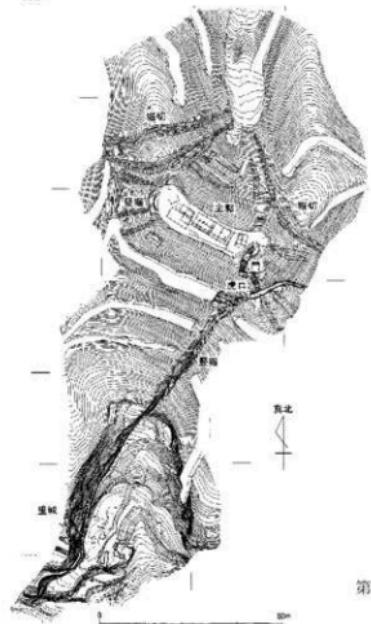
以上に見てきたように、これまでに知られる文献史料に加えて、城館遺跡に対する新たに行われた現地調査とともに、発掘調査の成果という考古資料の一体的活用もしくは総合化によって、香椎地区引いては九州地方の中世史の解明が大きく前進したといえよう。

ところで、福岡県教育委員会が平成24年度から5カ年の歳月をかけて実施した、福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、当該遺跡に対する悉皆調査とその成果に相当する。すなわち、遺跡の位置、分布状況・所属年代・現状・歴史的背景等々が、既存の資料に加えて、新たに作成ないしは記録された資料とともに、詳細な記録が作成された。その成果は、福岡県の文化財保護事業にとって画期的なものといえる。この上は、これらの遺跡群が恒久的に保存されることを第一義とし

つつも、さらなる調査の深化と史跡整備による活用を期待したい。そして、今回の調査成果が、福岡県ならびに日本の学術研究と文化の向上に資することを祈念したい。

【参考文献】

- 福岡県教育委員会2015『福岡県の中近世城館跡Ⅰ筑前地域編2—』（福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査等報告書2・福岡県文化財調査報告書第250集）  
福岡市教育委員会2000『香椎B遺跡—香椎住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』（福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集）  
福岡市教育委員会2010『香椎A遺跡3——一般国道3号博多バイパス建設に伴う調査2—』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1072集）



第295図 福岡市御飯ノ山城跡測量図  
(福岡市教育委員会 2000)



第296図 福岡市香椎B遺跡遺構平面図(福岡市教育委員会 2000)

## 5 総括—福岡県の中近世城館の様相と特徴

総括を締めくくるにあたり、本事業等で明らかとなった福岡県の中近世城館について、時代ごとにその様相と特徴を述べておきたい。

### (1) 中世城館

#### ①各地域の拠点城館

本章1の「福岡県の中近世城館の歴史的概観」でも述べているように、現在の福岡県内の中世、特に戦国時代は、顯著な大名勢力が地元ではなく、およそ一つの旧郡ごとに有力な国人領主勢力が割拠していた。各国人領主の居城・本城が、福岡県内の中世城館を特徴づけるキーワードとなりうる。それらの内容を示すならば、次のようになろう。

第3表 福岡県内の中世の主な拠点城館一覧

国名	郡名	城名	領主名	備考	国名	郡名	城名	領主名	備考
筑前国	御苦郡	前原城(太宰府市)	高橋氏	大友氏御苦郡代	豊前国	田川郡	香春岳城	高橋氏	
夜那郡	古崎山城・荒平城(朝倉市)	秋月氏			京都郡	馬ヶ岳城		長野氏	
下庄郡	—	—			仲津郡	神楽城		宇都宮(城井)氏	
上庄郡	—	—			篠山郡	宇都宮氏城照		宇都宮(城井)氏	
櫛田郡	—	—			上毛郡	—	—	—	
嘉麻郡	嘉麻城(嘉麻市)	秋月氏			御原郡	—	—	—	
鞍手郡	—	—			御井郡	—	—	—	
添賀(御牧)郡	佐尾城(北九州市八幡西区)	麻生氏			三瀬郡	蒲池城		蒲池氏	
	山鹿城(芦屋町)	麻生氏			山本郡	竹井城		草野氏	
示像郡	馬頭城(宗像市/岡垣町)	宗像氏			竹野郡	発心城		草野氏	
糟屋郡	立花山城	立花氏	大友氏糟屋郡代		生瀬郡	妙見城		延野氏	
	久島城	杉氏・星野氏			井上郡	長沼城		間註所氏	
栗田郡	—	—			上妻郡	鶴尾城・高半札城		黒木氏	
麻原郡	鶴ヶ岳城	大庭氏	大友氏麻原郡代			大尾城		川崎氏	
	ノノ岳城	黒木氏				山下城		蒲池氏	
早良郡	安楽平城	小田原氏	大友氏早良郡代		下妻郡	—	—		
怡土郡	高祖城	原田氏			山門郡	殘廢城		圓尻氏	
古賀郡	柳子岳城	臼杵氏	大友氏古賀郡代		三池郡	三池山城		三池氏	
豊前国	今井(肥姫)郡	長野城	高橋氏(あいは長野氏)						
	小倉城	高橋氏							

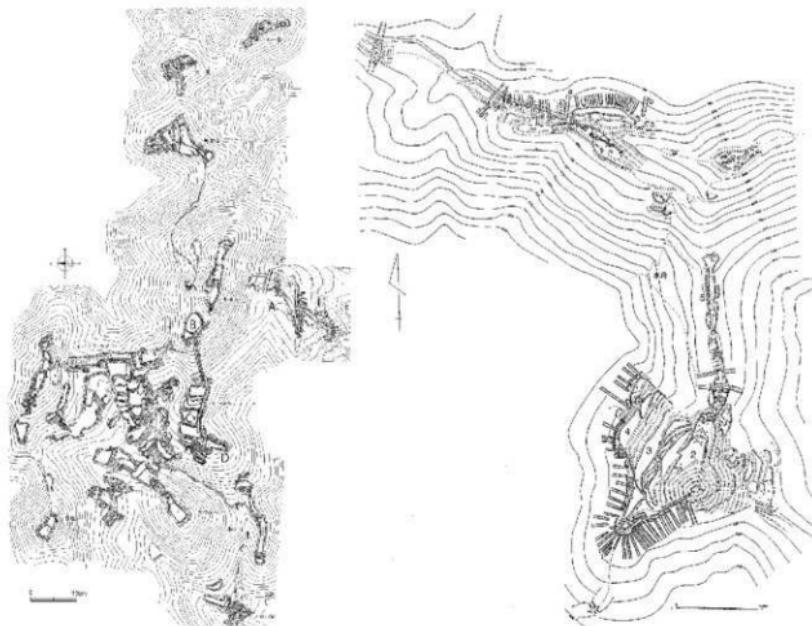
これらの城館における特徴を示すとすれば、次の2点があげられよう。

#### ア.大規模城館の存在

福岡県内の拠点城館の中には、筑前の立花山城、古処山城・荒平城、益富城、鷲岳城、豊前の長野城、馬ヶ岳城、筑後の妙見城など、全長500mをはるかにしのぐ大規模城館が存在する。一郡、あるいはそれを越えた範囲での勢力の結集した結果を表しているものと思われる。また、後段においても触れるが、敵空堀群などの特徴的な防御施設を過剰に備えたものも含まれている。

#### イ.瓦・石垣の使用

立花山城、鷲ヶ岳城、安楽平城、高祖城など、主に福岡湾周辺の拠点城郭には、瓦と石垣が使用される事例が確認できる。いわゆる織豊系の築城技術導入以前の在地の城館において、瓦や石垣が使用される事例は全国的に普遍的にみられるものではなく、特定の地域に偏在することが分かっているが、北部九州もその偏在する地域の一つである。石垣については基本的に城館周辺、あるいは



第297図 県内の中世の大規模城館の事例(左:立花山城・右:古廻山城)



第298図 県内の石垣を用いた中世城館の事例(左:鷲ヶ岳城・中:安楽平城・右:一ノ岳城)

城館構築の造成時に産出された石材を用いたものが大半であり、織豊期以降のような遠方の石切り場から輸送してくることは行っておらず、どちらかといえば、「その場にあるから使う」という消極的な使用であるとみられるものの、特筆すべき事項であろう。また、瓦を使用する他の事例としては、古廻山城、薦岳城、二丈岳城があり、拠点城郭に集中することが分かる。

## ②小規模城館群集の地域

福岡県内には拠点城郭が見られない地域がいくつかある。そのような地域は城がないわけではなく、拠点城郭に代わって小規模城館が群在する状況が確認できる。鞍手郡などは最たるもので、特に郡の西側、いわゆる上鞍手（若宮）地域（現在の宮若市）近辺には集落の背後の丘陵頂部に小規模な曲輪を1～2面、堀切を何本か構築した程度のいわゆる「小規模城館」が多数確認できる。地

誌ではこれらの城館の城主は、地元の小領主となっており、村ごとに小領主とその領主の城を確認することができる。鞍手郡は有力な国人領主が存在しなかった地域で、立花氏、秋月氏、宗像氏の支配領域のはざまにあたるいわゆる「緩衝地帯」的な地域であったとみられる。中には宮永城や犬鳴城、(湯原)草場城などのように、やや比高の高い頂部に規模の大きな城が構築されているものの、これらは周りの国人領主がそれぞれ当地の支配の足掛かりとして築いた城であり、これらの小規模城館群は、小領主層が割拠していた鞍手郡の戦国期の社会構造を表す非常に重要な存在といえよう。

また、県内で他に小規模城館が密集する地域としては、筑前志摩郡、豊前田川郡南部（大任町・川崎町周辺）、仲津郡～上毛郡（宇都宮氏などの豊前国衆の城館群）などがあげられよう。

### ③筑後の平地城館

福岡県内でも、有明海に面した筑後地域は平野が広大に広がっており、山城を築けない場所が少なからず存在する。特に筑後の三瀬郡や山門郡は大小の河川が入り込んだ低湿地で、灌漑や排水のためのクリークが発達した地域である。このような低地の平野では、クリークを水堀とした平地城館が連想される。隣接する佐賀平野では、姉川城や直島城（佐賀県神埼市・姉川城は国指定史跡）等では、城全体にクリークを巡らし、島状の曲輪群を形成している。福岡県内においても、蒲池城や、近世城郭に改修される前の柳川城などはそのような城館の景観を呈していたものと想像される。

しかしながら、今回の調査ではクリークを巡らし、島状の曲輪を密集させるような中世城館の存在を明確に確認することはできなかった。クリークを巡らした近世以来の集落はいくつも存在するのだが、それらは江戸時代以来の地誌等に城館としての伝承が見られるものはほとんどなく、城館と伝えられる場所はいくつもあるが、それらは明治以降の地図、字図などを見ても、クリークの回繞とは関係のなさそうな場所ばかりであった。あえてその可能性があるものといえば、生津城（久留米市）、酒見城、津村城（大川市）、津留城、白鳥城、蒲船津城（柳川市）などがあげられるが、城館伝承地と近世以降のクリーク集落が偶然重複したに過ぎない可能性も考えられる。しかしながら、白鳥城は明確な城館伝承がない場所（古戦場としての伝承は残る）であったりと、検証の根拠に乏しいのが現状である。

またその一方で、彼岸田遺跡（筑後市）では、城館の由来がない場所であるにもかかわらず、四重の水堀にめぐらされた14～15世紀の中世居館が発掘調査で確認されており、今後未知の平地城館が確認される可能性も考えられよう。

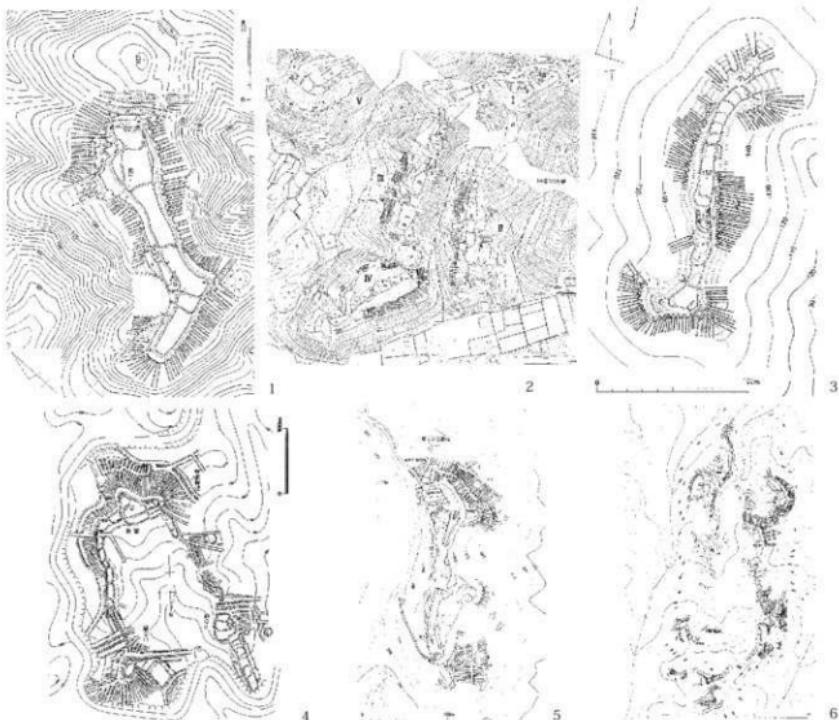
### ④特色ある防御遺構

今回の調査で確認された城館の中には、福岡県内の中世城館を特徴づける防御遺構を備えたものがいくつも確認された。その代表的な防御遺構として畝状空堀群と多重横堀があげられる。

#### ア. 畝状空堀群の多用

畝状空堀群とは、山城の斜面上（あるいは平坦面上）に竪堀を何本も連続させて構築した遺構群を指し、横堀などと組み合わせることで、曲輪斜面の防御強化を図るものである。畝状阻塞、畝状竪堀群、連続空堀群などとも呼ばれる。

この畝状空堀群は、中世城館では、北は秋田県から南は鹿児島県まで確認され、一見広く分布しているものの、特定の地域に偏って集中していることが明らかとなっている。集中する地域としては、越後、飛騨、土佐、安芸などに加え、北部九州（筑前・豊前）があげられる。福岡県内でも、



第299図 県内の歓状空堀群を多用する中世城館の事例  
(1:長尾城・2:荒平城・3:紙園岳城・4:長野城・5:等覚寺城・6:妙見城)

古く廣崎篤夫により長野城など、膨大な数の歓状空堀群を備えた城の存在が指摘されている(廣崎1986)。

さらに北部九州全体でみてみると、福岡県の他、北部九州全県(佐賀・長崎・大分)で歓状空堀群を持つ城館は確認されているものの、その城館数、さらには歓状空堀群の豊堀構築数で、福岡県は他を圧倒しており、その差は歴然である。特に長野城、薦岳城、益富城、荒平城などは一つの城に100本前後、あるいはそれ以上の豊堀を構築しており、歓状空堀群を構築することを城郭防御の基本路線としていたことがよくわかる。

さらに北部九州における歓状空堀群を持つ城館の分布を検討したところ、分布域は第300図のように $\alpha$ ~ $\gamma$ の三つの分布域に区分され、分布域 $\alpha$ に豊堀の本数が多い城館が密集する状況が読み取れる。福岡県内では全般的に歓状空堀を持つ城が分布しているが、分布の密集状況をさらに詳細にみると、顕著に歓状空堀群を多用する城館は、秋月氏の本拠(古廻山城・荒平城・益富城)とその支配領域の縁辺部、すなわち境目の城に多用されることが指摘されている(岡寺2006)。さらに秋月氏ばかりではなく、その同盟関係にあった勢力の城館(星野氏の高島居城・妙見城、高橋氏の



第300図 九州における歓状空堀群を構築する中世城館分布図（岡寺 2016b）

長野城、長野氏の馬ヶ岳城・等覚寺城など)や、これらの勢力と直接敵対する隣接勢力の城館(宗像氏の葛岳城、問註所氏の安山城・西ノ城(井上西城)、草野氏の発心城など)に濃厚に見受けられる(岡寺2016b)。

以上のように、福岡県内の中世城館の防御遺構を考える上では、膨大な縦堀群により構成される歓状空堀群は、非常に特色あるものといってよいであろう。

#### イ. 多重横堀

福岡県内の城館において歓状空堀群が多用される一方で、もう一つの別に特色ある防御遺構として、多重横堀があげられる。これは県内でも偏って分布が認められるなどの傾向はつかめていないが、顕著な事例としては、馬場城・八田城(豊前市)、犬尾城・鷹尾城(八女市)、小田城(みやま市)、竹の尾城(北九州市八幡西区)、高尾山城(太宰府市)などが挙げられる。福岡近県では肥前東部から筑前西部にかけて勢力を持っていた、筑紫氏の本城・勝尾城(佐賀県鳥栖市)とその出城・葛籠城には長大な横堀ラインを延々と伸ばす繩張り構造が確認できる。太宰府市の高尾山城など、太宰府・筑紫野地域に見られる横堀を持つ城の多くは筑紫氏が開与していることが分かるが、それ以外については分布に特徴が見られるものではない。特筆すべき事項として、みやま市の小田城は、これまでほとんど城の構造が知られていなかったが、今回の調査により、最大六重の横堀ラインを構築する厳重な防御構造がみられた。小田城の出城・禪院城では全長100m前後もある堀切2本を構築しており、多重横堀の構築を防御の基本路線とした繩張りのあり方があったことを示唆しており、非常に興味深い。

いずれにせよ、戦国時代末期の北部九州の国人領主たちは、城郭の防御の方法として、歓状空堀



第301図 県内の多重横堀を構築する中世城館の事例（左：高尾山城・中：馬場城・右：小田城）

群や多重横堀など、特色ある技法を熟知しており、それぞれの志向性に基づき、畝状空堀群を積極的に選択した秋月氏や、多重横堀を積極的に選択した筑紫氏など、防衛についての多くのバリエーションを持ち合わせていたことが特徴として挙げられよう。ただ、城の虎口に対する関心は薄く、虎口を設ける城はまれに見受けられるものの、虎口をしっかりと防衛する工夫や、虎口そのものの構築ですら、あまり積極的ではなかったことは、北部九州の中世城館の特徴ともいえよう。

#### ⑤陣城

陣城とは戦時において、攻城あるいは守城のため、あるいは戦場において一時に構築された城砦のこと指すが、北部九州においては縄張り構造から陣城について特定できるようなものはこれまで見られなかった。文献上では、久留米市高良山周辺の城館群について、天正12年（1584）の大友方（戸次氏・高橋氏）の筑後攻略戦における陣であると指摘されているものの、それらの城館群の縄張りは、一般的な中世山城の縄張りから見て極端に異なるものではなく、通常の山城と陣城との区別ができるほどではなかった。

ただ近年、立花山城の南側の三日月山や城ノ越山において、尾根上に延々と曲輪群を構築するような長大な城館群が確認され、永禄12年（1569）の立花山城を巡る大友方と毛利方との戦いに関する陣城ではないかという指摘がなされるようになった（藤野・山崎2014）。また、今回の本事業での調査においても、北九州市小倉南区の三岳城（大三岳城・小三岳城）およびその周辺の城館群について、三岳城を攻める側と守る側が相対峙するような曲輪群が尾根上に延々と構築されている様子を確認することができ、これも立花山城を巡る争いがあった前年（永禄11年）の毛利方と大友方（長野氏）との戦いにおける陣城群ではないかと考えられるようになった（村田2000・岡寺2016a）。縄張りの特徴としては、

- ア.尾根上の平坦地形をひたすら曲輪化、斜面は階段状に小刻みに小曲輪を構築
  - イ.堀切などの遮断遺構はあまり設けない
  - ウ.攻撃あるいは防衛する方向が明確な場合は、その方向に向けて曲輪化し、それ以外の方向へは、たとえ平坦地形があっても曲輪化しない
- などがあげられる。このような縄張りを持つ大規模な城館としては、若王子城（北九州市小倉



第302図 三岳城周辺城館位置図



第303図 永禄11年三岳合戦における陣城配置考察図  
(岡寺 2016a)

北区)、椎山城(北九州市小倉南区)、障子ヶ岳周辺城館群(京都郡みやこ町・田川郡香春町)、扇山城(飯塚市)などをあげることができる。これらについては近年、発見・再確認されたばかりのものであり、詳細な検討は今後に委ねられてはいるが、福岡県の中世城館を考える上では非常に重要な存在となろう。

#### ⑥南北朝時代・戦国時代前半の城館

これまであげてきた中世城館の特徴のほとんどは、戦国時代末期(16世紀後半)に限定されたものである。それは、現在地表に残されている中世城館の姿は、廃絶時の様子を示しているためであり、ほとんどの中世城館の廃絶が戦国時代末期まで下ることから、南北朝時代や戦国時代前半(14～15世紀)の状況をほぼ示していないからである。そのような状況であるから、当該期の城館の特徴を考えるのは、全面的に発掘調査が行われた事例で、なおかつ戦国時代前半までに廃絶した城館であるという非常に限定された条件のものしかない。現状県内では、園田浦城(北九州市八幡西区)が15世紀代で廃絶した状況を示したほぼ唯一の発掘事例であろう。堀切や単独の堅堀などは確認できるが、畝状空堀群や多重横堀などの複雑な防御構造は確認されていない。

一方、平地城館の発掘事例は少なからず存在している。今回、当事業においては「城館関連遺跡」として、城館の伝承がないものであっても、中世期に堀や溝で囲まれた屋敷地の調査事例について、リストアップして掲載した。県内全域で80箇所ほどにも及び、時期も12～17世紀と非常に幅広く確認することができた。ただ、このような平地の堀や溝で囲まれた屋敷地の遺跡は、開発に伴う発掘調査など偶発的に発見されることがほとんどであり、また古代までの古い時代と複合した遺跡の場合、調査担当者の注目がどうしても古い時代に行ってしまいがちであることから、その重要性を見落としたままに調査、報告が行われる場合が少なくない。よって、今回あげたもの以外にもいくつか見落としもあるだろうし、今後発掘されてくるものも少なくはないだろう。中世山城ではな

なかなか把握しにくい南北朝～戦国前半期の城館遺跡を考える上でも、平地城館の調査成果は少なからず注目すべきであろう。

## (2) 織豊期・近世城館

### ① 織豊系城郭の導入と展開

天正14年（1586）、豊後大友氏援助と島津氏打倒を名目に、中央政権を掌握した豊臣秀吉の勢力が九州に上陸する。以後、いわゆる「織豊系」の築城技術による築城が北部九州にも始まる。

福岡県内における最初の織豊系城郭の築城は、天正14年に小早川・黒田が豊前に上陸して一帯を鎮圧する際に築城・改修した城とみられる。例えば、本事業において再確認した松山城（苅田町）の外郭ラインがあげられよう。一見ただの土塁線にも思えるが、塁線の各所に横矢を効かせることのできる屈曲部を設け、土塁線の途中に設けた虎口は、食い違い虎口のように城内に屈曲してから入るようにできていて、明らかに織豊系の築城技術によるものであることが分かる。おそらく豊前攻略のため、松山城に入った小早川、あるいは黒田により改修されたものとみられる。この他、天正15年の豊前国人一揆における黒田方の付城として利用した城郭のいくつかにも、このような織豊系の築城技術が用いられ、それらが九州における織豊系城郭の導入といえよう。

これらは陣城など一時的な使用のものであり、本格的に技術導入による築城が行われるのは、天正15年の九州国分け以後である。国分けにより、筑前には小早川隆景、豊前には黒田孝高と森吉成などの豊臣系大名が入城する。黒田の居城・中津城は大分県内に所在するが、森と小早川の居城は、豊前・小倉と筑前・名島に築かれた。小倉城は江戸期の大改修により当該期の状況はよくわからないが、名島城については、近年、発掘調査が行われ、算木の隅角を明瞭にした石垣づくりの枠形虎口を備え、桐文の軒丸瓦や大型の鰐瓦を葺いていたことが想定されている。また、小早川が名島城に移るまでの間に在城した立花山城にも、同様の石垣や枠形虎口を備えた箇所が確認され、これら両城が九州における本格的な織豊系城郭の嚆矢として重要な存在といえよう。また、年代については確定していないが、松山城（苅田町）の山上の曲輪群は部分的に算木積みの石垣を構築するばかりではなく、つづら折れの導入ラインを確立していて、織豊系城郭の技術が



第304図 松山城縄張り図

遺憾なく發揮されている。

## ②織豊期の本城と支城

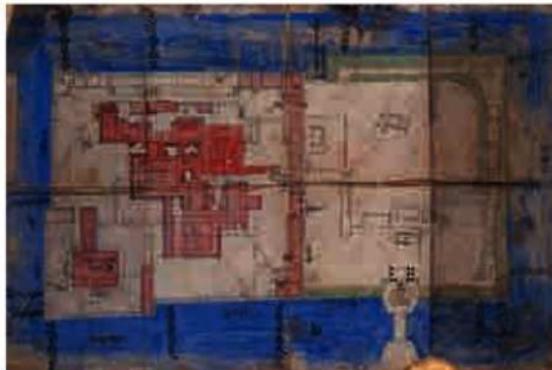
九州国分け後、文禄・慶長の役を経て、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦により、福岡県内の諸大名の目まぐるしい入れ替えが行われる。その結果、筑前には黒田長政、豊前には細川忠興、筑後には田中吉政が入ることになる。この関ヶ原合戦後の慶長期は、一般的には豊臣に対する徳川の圧倒的優位により政権が安定していたとの見方もあるが、徳川と豊臣、二つの政権が両立する、いわゆる二重公儀体制のような状況であり、また新たな土地に入部してきた大名も、慣れない土地で常に他国からの侵略に備える状態であった。そのようなことから、新規に本拠となる居城を大々的に築城するのはもちろんのこと、領内各所に支城を置いて、領内防備に努めるような状況であった。いわゆる「慶長の築城ラッシュ」と呼べる状況が現出していた。

福岡県内においては、筑前の黒田領は本城福岡城のほかに、黒崎、若松、鷹取、益富、小石原、麻氏良の6つの支城、いわゆる「筑前六端城」が築城された。これらの内、若松城は消滅したもの、残りの5つの内、麻氏良城を除く4つは発掘調査が行われ、瓦（小石原を除く）、礎石建物に加え、石垣で固められた枱形虎口を検出（麻氏良城でも瓦が採集され、地表観察で枱形虎口が確認されている）、福岡城と同様、織豊系の築城技術が大いに用いられた構造となっている。豊前の細川領も、本城小倉城をはじめ、福岡県内の支城としては香春岳の鬼ヶ城、岩石城や門司城など、從来中世城館が存在した場所あるいはその周辺であるにもかかわらず、石垣や瓦を用いて新規に大規模改修を行っている。筑後の田中領についても、本城柳川城を現在に続く繩張りの原型となる大改修を行ったほか、領内10箇所に支城を置いた。平地城館が多いために詳細が分かるものが少ないが、八女の福島城や猫屋城などは石垣を用いた織豊系の築城技術による築城・改修が行われている。

## ③近世城郭の成立

慶長20年（1615）、大阪夏の陣により豊臣家は滅亡、徳川氏の支配体制が完全に確立し、本格的に近世社会が到来する。

いわゆる元和の一国一城令により、領内の支城は基本的には破却などにより廃絶、軍事的政治的権力は、すべて各藩の本城へ集中することとなった。福岡県内の藩も元和6年（1620）に筑後の田中家が無嗣廃絶となり、久留米に有馬家、柳川に立花家が入城、いわゆる「四藩体制」が近世期を通じて確立する。黒田、細川（のち小笠原）、有馬、立花の各家は、福岡、小倉、久留米、柳川の各城を本城と



第305図 御城絵図（柳川城）

（福岡県立伝習館高等学校蔵・柳川古文書館保管・写真提供）

して幕末まで存続する。

また、近世期、福岡藩では寛永元年（1624）に秋月藩、元和9年（1623）に東蓮寺藩（のち延宝3年（1675）に直方藩として再立藩）の2つの支藩が生まれ、それぞれ陣屋を構えている。この内、秋月陣屋は現在も残されており、石垣、櫓、大手門などが備えられてはいるが、筑前六端城にみられたような枱形虎口などの純軍事的なパーツではなく、もはや城というよりは陣屋、御殿であつたことがわかる。

#### ④幕末期城郭

幕末期、特にペリー来航の嘉永6年（1853）以降、急激に不穏になっていく社会情勢の中で、各藩は有事に備え、「陣屋」あるいは「御殿」と称する緊急避難施設を領内に構築するようになっていく。五稜郭（北海道函館市（函館代官所））や龍岡城（長野県佐久市（田野口藩））など西洋式の城郭構造を取り入れたものまで現れる一方で、勝山御殿（山口県下関市（長府藩））のように旧来の日本式城郭により新規に築城されるものが現れてくる。そのような中、福岡県内においても、秋月藩の秋月南御殿（文久3年（1863）築造）や、福岡藩の犬鳴別館（宮若市・慶応元年（1865）竣工）などが築造される。あくまでも城ではなく御殿、別館という名目で築造されたため、櫓や枱形などの城とみなされる軍事施設は極力排除して造られているのが特徴である。秋月南御殿も犬鳴別館とともに、現在も石垣が残されており、当時の社会情勢を伝える上で非常に重要な存在といえよう。

#### 【参考文献】

- 岡寺 良 2006 「戦国期秋月氏の城館構成—福岡県朝倉市・杷木地域を事例に—」『城館史資料』第4号 城館史料会  
岡寺 良 2016a 「豊前地域における陣城・臨時の築城」『平成27年度九州城郭研究大会資料集』北部九州中近世城郭研究会  
岡寺 良 2016b 「九州における敵空堀群の様相」『第33回全国城郭研究者セミナー シンポジウム「連続空堀群再考」資料集』  
第33回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会  
廣崎薫夫 1986 「福岡県内の敵空堀群について」『第3回全国城郭研究者セミナー報告資料』  
藤野正人・山崎龍雄 2014 「三日月山城砦群と城ノ越山城砦群の考察—対面する二つの巨大な城砦群—」『九州考古学』第89号  
村田修三 2000 「長野城とその包囲網」・「中世・近世移行期の山城の変遷—城塞群における臨時築城と恒久築城の関係を中心に—」  
『長野城』 北九州市教育委員会

## おわりに—今後に向けて

はじめにでも述べたが、平成24年度よりから開始した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、28年度にて全て完了する。国庫補助事業の中近世城館遺跡の分布調査は福岡県教育委員会としては初めての行いであったが、実は福岡県教育委員会では過去に同種の調査を行っている。それは、九州縦貫自動車道建設に伴って鞍手郡鞍手町音丸城跡の記録保存調査が行われたことなどを発端として、同自動車道建設に伴う調査の一環として昭和52年（1977）に行われた福岡県下全域の中世城郭調査である。ただその際には、部分的に現地踏査なども行われたようであるが、その成果を十分に反映することはほんとなく、主に公表されたのは県内中世城郭一覧表と分布図であった。確かにその時点では十分な成果であり、その後の県内の遺跡分布地図の作成などにも反映され、城跡の保護という観点においては一定の成果をあげることができたといえよう。しかしながら、中近世城館の調査研究も進み、かつてのデータのみでは十分とは言えず、さらには小倉城（北九州市小倉北区）などの都心部の近世城郭は固より、山城でも園田浦城（北九州市八幡西区）、御飯ノ山城（福岡市東区）、米の山城（飯塚市）などが開発対象として記録保存調査が行われたこともあり、今後の中近世城館の保存活用のためにも、かつての調査からおよそ40年ぶりに今回の事業の実施になった次第である。

当事業の最大の成果は、県下全体の中近世城館の悉皆的な把握であろう。よく知られている城館はもちろんのこと、ほぼ無名の城館についても対象としたため、いま周知の包蔵地となっていないものはもちろんのこと、周知の包蔵地でも位置や範囲が異なっていたものについても、より正確に把握できたといえる。今後の見通しとしては、まずはそれら未周知の対象については、文化財保護法の手続きに従って包蔵地の周知化を行い、位置や範囲についても見直しを行うことでより確実に保護の対象とすることが最重要課題といえよう。

また、当事業では広く保護の対象とするため、中世の城館のみならず近世から幕末に至るまでの城館も調査対象とした。さらには直接的な対象ではないが、中近世城館に関連する遺跡として、幕末期の海防・防衛施設（烽火台・台場・遠見番所）についても現状わかる範囲での情報収集と現地調査を実施した。必ずしも十分な調査とは言えないが、これらの成果については、本書に附編として掲載しており、今後保護の対象とする上で情報として活用いただければ幸いである。

さて、話は中近世城館に戻るが、今回の事業実施により、県下全体の中近世城館の現状の状況が明らかとなった。そのため特に重要とみなされるものについては、さらに詳細に調査を進めたうえで、将来的な史跡指定を行う見通しを立てることもできるようになったのではなかろうか。現在、福岡県下において国指定史跡となっている中近世城館は、福岡城跡ただ一つであり、中世城館は一つも指定されていないのが現状である（他の指定要件により史跡地に含まれている対象は除く）。県指定や市指定史跡も皆無ではないものの、他の種類の遺跡に比べると必ずしも多いとは言えない状況である。当事業の成果が今後の史跡指定への道筋となれば幸いである。

最後に、当事業を実施するにあたり、御協力いただいた県内市町村教育委員会、博物館、図書館、また自身の研究成果を提供していただいた城郭研究者の方々、現地の情報等をいただいた地元住民の方々、さらには日頃の御指導ならびに総括編に御執筆いただいた調査指導委員の先生方に感謝を述べ、文章を締めくくることとした。

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書 附編

## 附.福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

## 附. 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査においては、中近世城館だけではなく、近世の海防・防衛に関わる施設、すなわち台場・遠見番所・烽火台についても調査を行った。これは、調査指導委員会の検討において、近世城館も調査を行うのであれば、これらの施設についても併せて行うべきではないかという意見があり、それを受け事務局により中近世城館の調査の合間を見て、現地調査や文献・絵図調査を行った。ただ、この種の施設については、調査・研究の蓄積があまりなく、調査方法も確立しているとはいがたい状況であるため、詳細な報告については後日に期すこととし、本事業においては現状の調査結果をまとめる程度となった。決して完璧を期すことができたわけではないが、現状での調査成果を公表することで、今後の備えとしたい。なお、調査を行うにあたり、以下の方々や機関にはご協力いただいた。記して感謝したい（50音順、敬称略）。糸島市大入区、糸島市立伊都国歴史博物館、岩国微古館、北九州市立自然史・歴史博物館、久留米市市民文化部文化財保護課、立花家史料館、福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会、福岡県立糸島高等学校、福岡市博物館、みやこ町教育委員会、柳川古文書館、有田和樹、小野剛史、若林善満。

### 1 福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台の歴史的概要

#### ① 海防意識の高まりと遠見番所の設置

近世において沿海部の海防意識が高まつくるのは、寛永年間ころからである。島原の乱の鎮圧に象徴される禁教とそれに伴うスペイン・ポルトガルとの貿易の禁絶、いわゆる「鎖国と禁教」によって領海警備がなお一層重要視されてきたことによる。寛永15年(1638)、島原の乱を鎮圧した幕府は、スペイン・ポルトガルとの交易を禁止、同17年に通商の継続を願い出るために派遣されたポルトガル使節一行を処刑した。これが新たな国際緊張を生み、その対応策として沿岸警備令を強化、ポルトガル船は打ち払いの対象として、各藩に沿海部の監視のための遠見番所の設置や、異国船渡来時には長崎奉行などへの報告を義務付けた。その結果、福岡県内では、福岡藩、小倉藩などで遠見番所が設置された。また、柳川藩や久留米藩においても、異国船打ち払いの他、河川の通行の監視などのため、筑後川や有明海沿岸にも遠見番所・津口番所を設置している。

#### ② 烽火台の設置

各藩に遠見番所の設置を義務付けた寛永年間には、長崎警備を強化すると同時に、異国船の来襲を江戸及び近隣諸藩に通達するしくみとして烽火台が設置される。正保4年(1647)にポルトガル船2隻が長崎に来襲した際には、長崎の放火山(烽火山)に設置された烽火台に、初めて公的に狼煙が上げられ、享保年間には佐賀藩や天草などで烽火台の再整備がなされている。

福岡県内において、本格的に烽火台が設置される契機となったのは、文化5年(1808)8月に起こったフェートン号事件である。イギリス軍艦フェートン号の長崎港侵入と無抵抗のままに出港を許してしまったこの事件をきっかけに、狼煙による緊急連絡の重要性を痛感、各藩では烽火台が各地に整備されていった。長崎において異国船の来襲などの異変が起こった場合、すぐさま長崎の放火山に狼煙が打ち上げられ、多良岳から佐賀を経て、福岡藩領、小倉藩領、中津藩領へとリレー形式により九州各地に有事が伝達されるようになった。福岡藩では、フェートン号事件の2か月後の同年10月には藩内の6ヶ所に烽火台(六峰)が設置されている。

### ③台場の設置

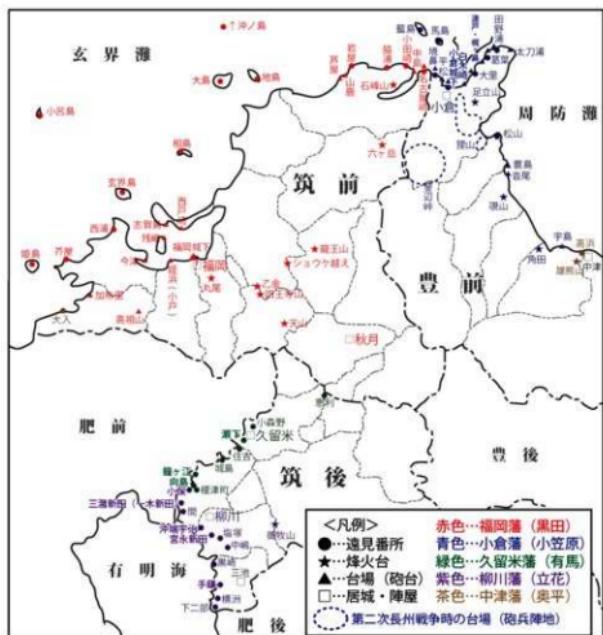
フェートン号事件以降、相次ぐ異国船の来航によって海防論が強まり、幕府は文政8年（1825）に「異国船打ち払い令」を発するが、アヘン戦争による清の敗北などを受け、天保13年（1842）に撤回する。しかし海防の重要性は引き続き認識され、嘉永6年（1853）のペリー来航以来、日本各地の沿海部に台場（砲台）の築造がさかんとなる。福岡藩では、安政元年（1854）に台場を建設する許可を幕府に願い出、同3年から文久元年（1861）ころにかけて城内ならびに藩内の約10ヶ所に台場を設置している。小倉藩も文久3年（1863）に響灘沿岸から閨門海峡にかけての沿海部に、久留米藩も藩屋敷を構えていた豊前大里（北九州市門司区大里）に台場を構築した。

### ④第二次長州戦争における砲兵陣地の台場

慶応2年（1866）6月に始まった第二次長州戦争で行われた小倉口の戦いでは、幕府軍は長州に攻め込むどころか高杉晋作率いる長州軍の九州上陸を許し、戦意の上がらない幕府方の各藩諸隊は次々に離脱、最終的に孤立した小倉藩は8月1日に小倉城を自ら焼き、田川郡へ撤退した。しかし、小倉藩も家老・島村志津摩の指揮の下、企救郡と田川郡との境・金辺峠（北九州市小倉南区・田川郡香春町）と、企救郡と京都郡との境・狸山（北九州市小倉南区）にそれぞれ陣を張り、攻め来る長州軍を撃退、最終的には翌3年1月20日、両藩は講和して、第二次長州戦争は終結したのである。

この一連の戦いの中で、企救郡内の各所において両藩の間で戦闘が繰り広げられ、至る所に陣が張られ、台場（砲兵陣地）が築かれ、文献や絵図などにその存在が記されている。

以上、概要について説明したが、次章にてそれらの海防・防衛施設の個別説明を藩ごとに行い、次々章にて文献史料一覧を提示する。



第306図 福岡県内の近世台場・遠見番所・烽火台跡位置図

## 2 個別報告

### (1) 福岡藩

福岡藩では、遠見番所、烽火台、台場が築造されている。以下、順次報告する。

#### ① 遠見番所

福岡藩では、寛永年間のボルトガル打払いの沿岸警備令に伴い、遠見番所を設置している。『黒田統家譜』巻六には、姫島（糸島市）、西浦（福岡市西区）、相島（糟屋郡新宮町）、大島（宗像市）、岩屋（北九州市若松区）に幕府両使の見立てにより番所を構え、定番を派遣、さらに地島（宗像市）にも定番を置き、小呂島（福岡市西区）、白島（男島・女島、北九州市若松区）に番船を派遣して、毎日巡見させ、福岡城下には津口番所を設置した。遠見番所では定番と足軽により交代で見張りに当たった。さらに正保2年（1645）には西浦の番所を玄界島（福岡市西区）に移し、新たに芥屋浦（糸島市）、脇浦（北九州市若松区）、沖ノ島、大島（宗像市）に番所が設定されている（福岡県1998など）。以上のことから、姫島、芥屋、西浦、玄界島、相島、大島、沖ノ島、岩屋、脇浦に遠見番所が置かれたことがわかるが、これらの遠見番所については、『林文書』（九州歴史資料館蔵）の「浦鷲遠見番所灯籠堂急用丸囲上屋共図」の中に、嘉永7年（1854）段階の番所、灯籠堂などの建物の指図が掲載されている。これを見ると、上記の他、地島（宗像市）、名古屋崎（北九州市戸畠区）、小田崎（北九州市若松区）の遠見番所も掲載されている（第308図）。それらの建物を見ると、板張りのものと練塀（小田崎、名古屋崎）のものと2種類あるようである。これらの内、確実に痕跡が知られているものは、相島1ヶ所のみであったが、今回の調査で芥屋と地島において痕跡を確認することができた。ここでは、現地確認を行ったものを中心に説明する。なお、『玄海町誌』等には、宗像市の勝島に遠見番所があったとする記載がみられるが、これについては『筑前国続風土記拾遺』に正徳享保年間に南京姦商の仲買禁止に伴い、番士を遣わした屋敷「加子屋敷」があったとする他には文献記載を見つけることができず、また現地踏査では島の最高所に番所の痕跡を見ることができなかった。よってこれについては遠見番所から除外しておきたい。

【姫島遠見番所】糸島市の沖合に浮かぶ姫島にある番所で、島内最高所の鎮山山頂にあったと地元では伝える。山頂部は平坦地形が広がり、石列のような構築物の痕跡なども確認できるものの、現地は藪になっており、詳細を確認することはできなかった。

【芥屋遠見番所】『志摩郡形相図』には遠見番所が描かれている（第307図）。それには糸島半島の



第307図 『志摩郡形相図』（部分・福岡県立糸島高等学校蔵）に描かれた芥屋遠見番所  
(写真提供：糸島市教育委員会)



大崎（大島）遠見番所



藍崎（相島）遠見番所



地崎（地島）遠見番所



姫崎（姫島）遠見番所



玄界遠見番所



岩屋遠見番所



脇浦遠見番所



芥屋遠見番所



名古屋崎遠見番所



小田崎遠見番所

第308図 「浦崎遠見番所灯籠堂急用丸附上屋共図」（林文書）九州歴史資料館蔵）に描かれた遠見番所

西突端部にある国指定天然記念物・芥屋の大門の南側の小高くなった尾根の鞍部に位置する。現在、

簡易な展望所が建てられ、海を一望できる好所に位置している。約10m×5mの平坦面が見られる他は、建物等の痕跡を見ることはできないが、周囲の地表を入念に観察する

と、近世の瓦が多く散布しており、中には黒田家の家紋である下がり藤の文様の軒平瓦なども確認され、藩の公的施設としての遠見番所の建物に葺かれていたものとみてよく、間違いなくこの場所に立地していたことがわかる。指図には、軒瓦が使われていることなどが記されている。

【相島遠見番所】相島遠見番所は、福岡藩の遠見番所としては最も良好に遺構が確認されている番所である。相島の最高所で西端にある高山に置かれていた。現在、相島灯台と三角点のすぐ横に「物見櫓」と呼ばれる石垣が残されているが、その近辺にも石垣の構築物が確認できる。ただ、一帯は現在も果樹園や畑となっており、後世の改変がかなり入っていて、どこまでが遠見番所の遺構なのかは断定は難しい。しかしな



第309図 芥屋遠見番所跡位置図  
(国土地理院作成 1/25,000 地形図  
「芥屋」を一部改変して事務局作成)



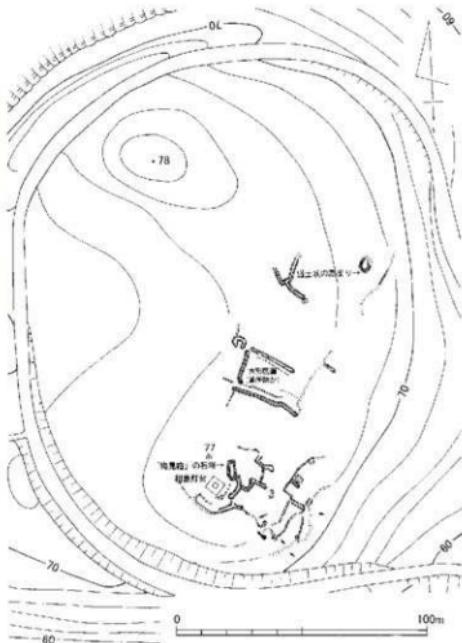
第310図 芥屋遠見番所跡に散在する瓦



第311図 相島遠見番所位置図  
(国土地理院作成 1/25,000 地形図「津屋崎」を  
一部改変して事務局作成)



第312図 「藍鶴絵図」(部分・岩国市歴史博物館)  
に描かれた「物見番所」



第313図 相島遠見番所現況平面図 (事務局作成)

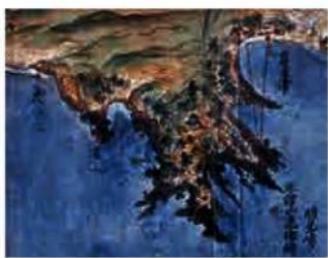
がら、いわゆる「物見櫓」の石垣の北側背後には、石垣により一辺約15mの方形区画が設けられており、江戸時代の巴文軒丸瓦が散布していく、この区画内に遠見番所の建物が置かれていた可能性が高い。またさらに北側にも不自然な盛土状の高まりなどもあり、番所との関連を窺わせる。江戸時代の相島の様子を描いた『藍鵲絵図』にも、島の西側頂部に「物見番所」と記された建屋が描かれている。これは岩屋や芥屋が二層構造であるのに対し、ここでは一層構造の建屋となっている。時期が異なるせいであろうか。

**【岩屋遠見番所】**若松半島の西、響灘に突き出た遠見ノ鼻（妙見崎）にあった番所で、現在は妙見崎灯台や宿泊施設などが建っている。『遠賀郡海岸形相図』に遠見ノ鼻の突端に、番所と記され、二層構造の建屋が描かれている。現地を確認していないが、宿泊施設等で既に消滅している可能性も考えられる。

**【地島遠見番所】**『筑前国続風土記拾遺』には、地島の遠見番所は泊（島の南側にある集落）の艮の高峰の頂にありと書かれている。宗像郡の鐘崎の沖合に浮かぶ島の最高所である遠見山山頂（標高186m）は、泊集落の北北西に位置し、『筑前国続風土記拾遺』の記載とはやや異なるが、その山の名前や地元の伝承から遠見番所が置かれていた場所と認識されている。現地は沖ノ島が見える展望所として散策コースの一角にもなっているが、その展望所の周囲には近世の巴文軒丸瓦を含む多くの瓦片が散布している。その瓦が散布する展望所となっている場所は一辺約10m弱の方形の平坦面となっており、造成によって造られた面である可能性が高く、周囲には人工的なテラス面も存在する。さらには西側にも尾根地形に沿う形で一辺10~20mの平坦面が2面造成されており、縁辺部には石垣遺構なども確認できる。南東側については畑耕作とも考えられる細い造成面が斜面下に向けて何段も築かれており、後世の改变地形の可能性が考えられる。散布している丸瓦はコビキB技法（鉄線切り）のものも見られ、巴瓦については林文書（第308図）にもその存在が記されている。これまで福岡藩に関する遠見番所としては相島遠見番



第314図 相島遠見番所「物見櫓」石垣遺構（左）・遺物散布状況（右）



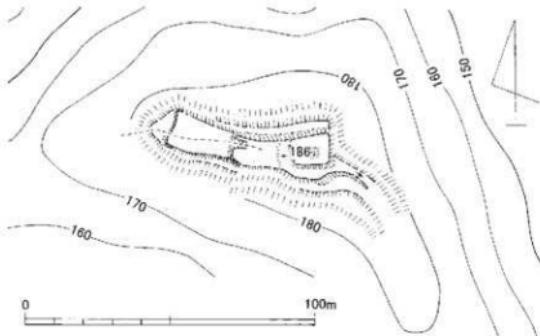
第315図 「遠賀郡海岸形相図」に描かれた  
岩屋遠見番所（部分・福岡市博物館蔵）



第316図 地島遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「神湊」を一部改変して事務局作成）

所が唯一の遺構が確認できる事例であったが、この地島遠見番所の確認により、新たに遺構が確認できる事例が追加されることとなった。

なお、その他の番所の所在情報は『筑前国続風土記拾遺』に掲載される。大島番所は島内最高所の御嶽神社の前にあるとするが、その場所は展望台や道路によって大きく改変されており、既に消滅してしまった可能性が高い。また玄界遠見番所は山上にありとしている（玄界は本事業では未踏査）。



第317図 地島遠見番所現況平面図（事務局作成）



第318図 地島遠見番所遠景（左）・瓦散布状況（中）・石垣遺構（右）

## ② 烽火台

福岡藩では、文化5年（1808）のフェートン号事件の2か月後の同年10月には藩内の6ヶ所に烽火台（六峰）が設置されている。その6ヶ所とは、長崎に近い順から、天山（筑紫野市）、四王寺山（大野城市・糟屋郡宇美町）、ショウケ越え（糟屋郡須恵町・飯塚市）、龍王山（飯塚市）、六ヶ岳（直方市）、石峰山（北九州市若松区）であり、その他、四王寺山烽火台から分岐して福岡城方面に乙金（大野城市）、丸尾（福岡市中央区）の二つの烽火台を築いている。



第319図 『筑前三笠郡岩谷城図』（個人蔵）に描かれた烽火台

これら8ヶ所の烽火台について、詳細な構造や位置を残しているものではなく、四王寺山烽火台が四王寺山の西側稜線上に「烽家」「火ノ尾」という地名、丸尾烽火台が警固3丁目に「峰花台団地」（現在は福岡県住宅供給公社クラシオン桜坂になっている）という建物名があるばかりである。

【四王寺山烽火台】唯一絵図資料に描かれたものが『筑前三笠郡岩谷城図』（個人蔵）にある（第319図）。それを見ると、四王寺山の西の峰に「烽火臺」と記された2棟の櫓状建物が描かれている。この絵図が文化8年3月に描かれているため、烽火台が整備されて約1年半後であり、四王寺山の烽火台とみてよく、今後現地確認をする際にも参考になろう。

### ③ 台場

台場の構築は、享保3年（1718）の密貿易のために来航した唐船に対する打ち払いのため、名古屋（名護屋）崎と小田崎に台場を設け、これを撃退することなどが挙げられるが（北九州市1990）、文久年間になると攘夷問題とも併せ、領内沿岸に次々と台場の構築を行っている。それらを挙げると、名古屋崎、中島（北九州市戸畠区）、山鹿、芦屋（遠賀郡芦屋町）、西戸崎、志賀島（福岡市東区）福岡城沿岸部（洲崎・城下・波奈）（博多区・中央区）、姪浜（小戸）、残崎（能古）、今津（西区）、高祖山（糸島市・福岡市西区）、加布里（糸島市）がある。詳細は文献史料一覧を参照いただくとし、ここでは絵図資料に残る名古屋崎、福岡城沿岸部（洲崎は現地の状況も含む）、現地調査を行った能古、姪浜の各台場の詳細を報告する。

【名古屋崎台場】北九州市戸畠区、洞海湾の出口の東側、北に突き出した名古屋崎に構築された台場であるが、現在は新日鉄八幡製鉄所となっており、岬ごと消滅している。『長州戦争図』（第320図）には、名古屋崎の突端に6門の大砲が置かれている状況が描かれている。『福岡藩砲台備石火矢覚』には名護屋には五貫目砲3門、二貫目砲2門の計5門置かれたとある。福岡藩内の台場では大砲を設置した状況を描いた唯一の絵図資料であり、貴重である。

【福岡城沿岸部の台場】福岡城沿岸部の台場を示した図としては、『鶴城起源』（1898年発行）の付図である「福岡城之図」（福岡市役所1968に再掲載図あり）がある（第322図）。それを見ると、福岡城の北側沿岸部、東は博多から西は唐人町までの14ヶ所に「砲台」と記し、石垣の表記が記されている。ただ、『見聞略記』には元治元年（1864）に荒戸と洲崎の台場の間に「土俵台場」を築いたとあり、石垣づくりの台場ではなく、土俵による仮設の台場である可能性も考えられる（現在は全てなくなっている）。これらの中でも舟入があった荒津の波奈台場は、舟入を守るように出島状になっており、東の洲崎台場と対するようにひときわ大きなものとなっている。台場として使われなくなった明治から昭和にかけて、福岡市中に正午の時報を知らせる午砲場として活用された。

また、中洲の河口に当たる洲崎台場もまた城下の台場の中では大きいものだが、台場の石垣が現在も須崎公園内に残されている。現在、須崎公園の北西端には、約50mに渡って直線状の石垣が



第320図 『長州戦争図』（部分・北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた名古屋崎台場



第321図 波奈台場跡地（午砲場跡）



第322図 『福岡城之図』(1898年・福岡市 1968から転載)に描かれた福岡城下の台場

残されている。これは元あった台場の北西側の石垣に当たり、当時は海に面していた場所で、地中にも石垣は埋もれているものと考えられる。外側の石垣は花崗岩を用い、中にはしっかりとした矢穴のある石材も見られるため、台場構築以前の護岸に積まれていた石垣である可能性も考えられる。一方で、内面の石垣は一段程が残っているが、齧痕跡をきれいに残す切石積みで、いわゆる幕末頃の落とし積みと呼ばれる手法が見受けられ、台場構築時に使用された石材であると思われる。石垣の両端部は内側に折れているものの、台場敷地の隅に当たるわけではなく、本来のものというよりも公園整備など、後世の造作によるものと思われる。また、石垣の背後には、2ヶ



第323図 洲崎台場跡地現況平面図(事務局作成)

所の高さ約1m弱の土盛りが確認された。これが台場に伴うものかは不明であるが、公園整備のものとしても不自然であり、今後の検討のために図示した。

#### 【残島(能古)台場】

これまで能古島の台場は所在不明とされてきたが、今回の現地調査で、台場跡と思われる箇所が確認されたので報告する。能古台場は、『福岡県地理全誌』にも「北浦人家ノ北十町許。巡り田ト云所ニアリ。南北六間、東西四間許アリ。文久元年辛酉新築、明治三年廢ス」とあり、福岡市教育委員会の能古島の報告書には残島灯台の南東側沿岸部に位置が示されていた。しかし、その場所を現地踏査したが、自然の傾斜地形などがあるばかりで、台場と思われる造成痕跡は確認できなかった。

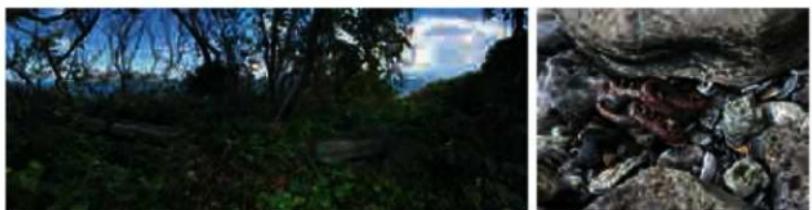
そのため、そこから灯台までの間の沿岸部について地図上で平坦地を形成できそうな場所を推測して現地確認したところ、海岸に面した標高約10mの場所に、東西約30m、南北約20mの平坦地があり、海に面した側が一段高くなり、内側に大石を並べて石列とする場所を発見した。周囲には耕作地などの痕跡もなく、またその崖下において船鎖とも考えられる鉄



第324図 洲崎台場の石垣（左上）・石垣外側の石材（右上）・内側の石材（左下）・盛土状の高まり（右下）



第325図 能古台場推定地位置図  
(国土地理院作成 1/25,000「福岡西部」を一部改変して事務局作成)



第326図 能古台場推定地の石列（左・奥に志賀島が見える）・推定地崖下にあった鉄鎖（右）

鎖（一つの長さ約10cm）を発見した。鉄鎖がいつの時代のものかも不明であるが、崖上の平坦面との関係も想定され、また対岸の志賀島を間近に見ることができる。『見聞略記』には志賀島台場と能古台場との間を海上封鎖する計画があったことを考えると、立地としても問題なく、台場ではないかと推測される。

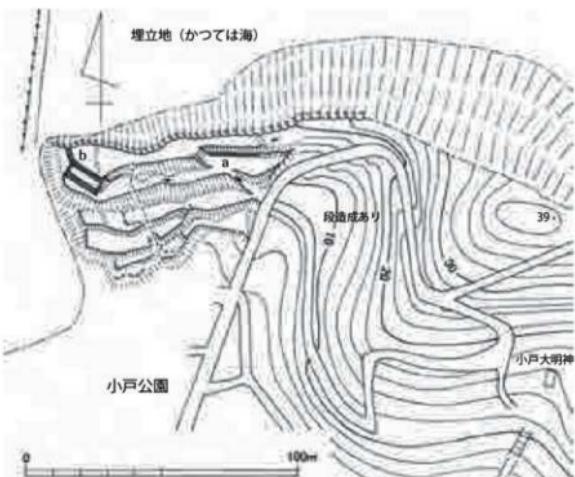
なお、平坦面の東側は浸食により崩れしており、元々はさらに東側へと平坦面が伸びていた可能性が高い。海岸側についても、浸食によりかなり削られてしまっていると思われる。さらに詳細な調査をすることで検証可能となろう。

【姪浜（小戸）台場】『福岡県地理全誌』には「台場跡」として「小戸大明神宮ノ西一町余。小戸山ニアリ。東西六十間、南北三十間、面積六反二畝二十四歩アリ。慶応元年乙丑新築、明治三年廢ス」とある。今津湾と博多湾との境に突き出した妙見崎に構築された台場で、現在も小戸公園内に石垣遺構が残されている。

小戸公園の北側、妙見崎の岬が西側に屈曲する



第327図 能古台場推定地周辺平面図（事務局作成）



第328図 姪浜（小戸）台場周辺平面図（事務局作成）

部分、尾根の南斜面のaに東西約25mの石垣を築き、その西端には石段を設置、さらにそこから西へ約30m地点、西側が崖となる場所のbにも2段に石垣を構築している。石垣の石材は立方体に加工しており、小型の矢穴を確認することができる。そして石垣を築いた上面が大砲を置く台場となっていると考えられる。『見聞略記』には大砲5挺を置いたことが記されており、十分な面積は確保されているよう。北側は崖となっており、かつては海に面していたところであり、かなり浸食を受けている。また、南側斜面には3~4段にわたって造成段が確認された。谷を挟んだ南東側の斜面にも類似する造成段が見られることから耕作地などの後世の造作の可能性も考えられるが台場に関わる平坦面としても解釈できるため図示した。

なお、『見聞略記』には「山の上切ならし、石垣不入ニ御台場成就仕り」とあって、石垣を入れることなく完成したとあるが、現状では間違いなく石垣は台場に使用されており、整合性については検討を要しよう。

## (2) 小倉藩

小倉藩では、遠見番所、烽火台、台場に加え、幕長戦争（第二次長州戦争）時の砲兵陣地（台場）が築造されている。以下、順次報告する。

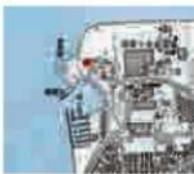
### ① 遠見番所

小倉藩では、宝永2年（1705）以来、漂流を裝つて来航する密貿易船（唐船）を取り締まるため、正徳5年（1715）から6年にかけて葛葉、田野浦、大里（北九州市門司区）、境島、小倉河口、馬島（北九州市小倉北区）、茹田松山（京都府茹田町）に遠見番所を

設置、さらに老朽化していた藍島（北九州市小倉北区）の遠見番所を増築している。小倉藩では以上8ヶ所の遠見番所があることがわかる



第329図 姪浜台場石垣・石段



第330図 姪浜台場位置図（国土地理院作成1/25,000「福岡西部」を一部改変して事務局作成）



第331図 「長州戦争図」（左）と「小倉領藍島略図」（右）（共に北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた境島遠見番所

が、これらの中、絵図に描かれているのが、境鼻番所と藍島番所、現地に旗柱石が残されているのが藍島番所であり、ここではその2つについて詳述する。

【境鼻番所】筑前と豊前との国境にあたる境川河口の右岸の小丘陵上にあったとされる番所で、大正9年（1920）に櫻山荘という洋館が建てられたため、番所の痕跡は残されていない。ただ、『長州戦争図』及び『小倉領藍島略図』にはそれぞれ丘陵上に番所が描かれている。前者が一層の建物に対し、後者では二層の建物になっていて、構造については検討を要しよう。

【藍島遠見番所】藍島の遠見番所は、藍島の最高所・高山（現在は宝山）の頂部にあったとされ、『小倉領藍島略図』にも二層の建造物が見えるが、現在はその痕跡はわからなくなっている。ただ、番所に付随して、享保6年（1721）に造られた旗柱石が山頂に残されている。この石は海上に密貿易船を発

見するといち早く境鼻番所に急報するため、紺地に白く染め抜いた三階菱紋入りの大旗を掲げたもので、福岡県指定史跡（昭和44年5月1日指定）になっている。2本の立石の間に旗竿の台石を置き、立石には旗を固定するための穴がそれぞれあけられている。石材は花崗岩の切石で矢穴も残され、高さは2.4mにも及ぶ立派なものである。絵図には番所に隣接して旗竿が描かれており、たもとにはこの柱石があったものと考えられる。

## ② 烽火台

小倉藩内の烽火台は足立山（北九州市小倉南区・小倉北区）、覗山（行橋市）と角田の峰尾（豊前市）の3ヶ所に置かれていた。このうち足立山と角田については詳細な場所は不明であるが、覗山については、中世の覗山城跡の城域内に烽火台の痕跡ではないかと思えるものが思い当たったため、今後の検討材料としてここで報告する。

【覗山烽火台】覗山山頂（標高124m）には中世の山城である覗山城があるが、その曲輪内に、2ヶ



第332図 藍島遠見番所旗柱石位置図  
(国土地理院作成 1/25,000 地形図「六連島」を一部改変して事務局作成)



第333図 藍島遠見番所旗柱石（左・福岡県指定史跡）・『小倉領藍島略図』（部分・北九州市自然史・歴史博物館蔵）に描かれた藍島遠見番所と旗柱（右）

所、明らかに山城よりも後の時代に構築された直徑約5mの大穴が確認された。山城遺構として確認していた際には、古墳の盗掘坑などの遺跡とは無関係のものと認識していたが、改めて烽火台として考えた場合、Ⅲの曲輪の最高所に開けられた穴は深さが2~3mもあり、両側に排水溝のようなトレーナー状の切り込みが入れられていた。またⅡの曲輪にも同規模の大穴があった。後で述べる構造がしっかりと残されている雄熊山烽火台ほどは立派ではないが、マウンド頂部に穴を穿ち、横から穴を掘っているような状況は類似するようにも感じられ、また、禿山上に烽火台を設置する場合、最も好都合な立地をしており、推測ではあるが烽火台の痕跡の可能性があるものとして報告する。

### ③ 台場

小倉藩は文久3年（1863）頃に、門司、田野浦、葛葉（北九州市門司区）、東浜・西浜、境鼻（北九州市小倉北区）に台場を構築している。ただ、絵図資料を除いては台場の状況を知る術はないため、ここでは台場が掲載された絵図資料を掲載することで、説明に代えさせていただく。また第二次長州戦争関連で、仮設に築造された台場（砲兵陣地）については、次項で説明する。



第334図 眺山城内に確認される烽火台と推測される痕跡位置図（●で示す）



第335図 「長門国対岸ノ図」(福岡県立育徳館高等学校蔵)

【関門海峡～響灘沿岸の台場】『長門国対岸ノ図』(第335図)には、門司の田野浦から小倉城下を経て、境暮に至るまでの沿岸部に台場(砲台)が築かれている様子が描かれている。また、小倉城下の西浜台場(西台場)は、『小倉西市中図』(第336図)に東西方向に細長い区画で「西台場」と描く。また、『沓尾ノ図』には蓑島と沓尾(行橋市)に、『宇ノ嶋ノ図』には宇島(豊前市)の岩岳川と思われる河口の両岸に台場の印が記されている。蓑島、沓尾については現地踏査を行ったが、自然の丘陵地あるいは後世の神社地などになっており、明確な台場の痕跡を見つけることはできなかった。



第336図 『小倉西市中図』(福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵・左端に「西台場」の文字が見える。左が北)



第337図 『沓尾ノ図』(福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵)



第338図 『宇ノ船ノ図』(福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵)

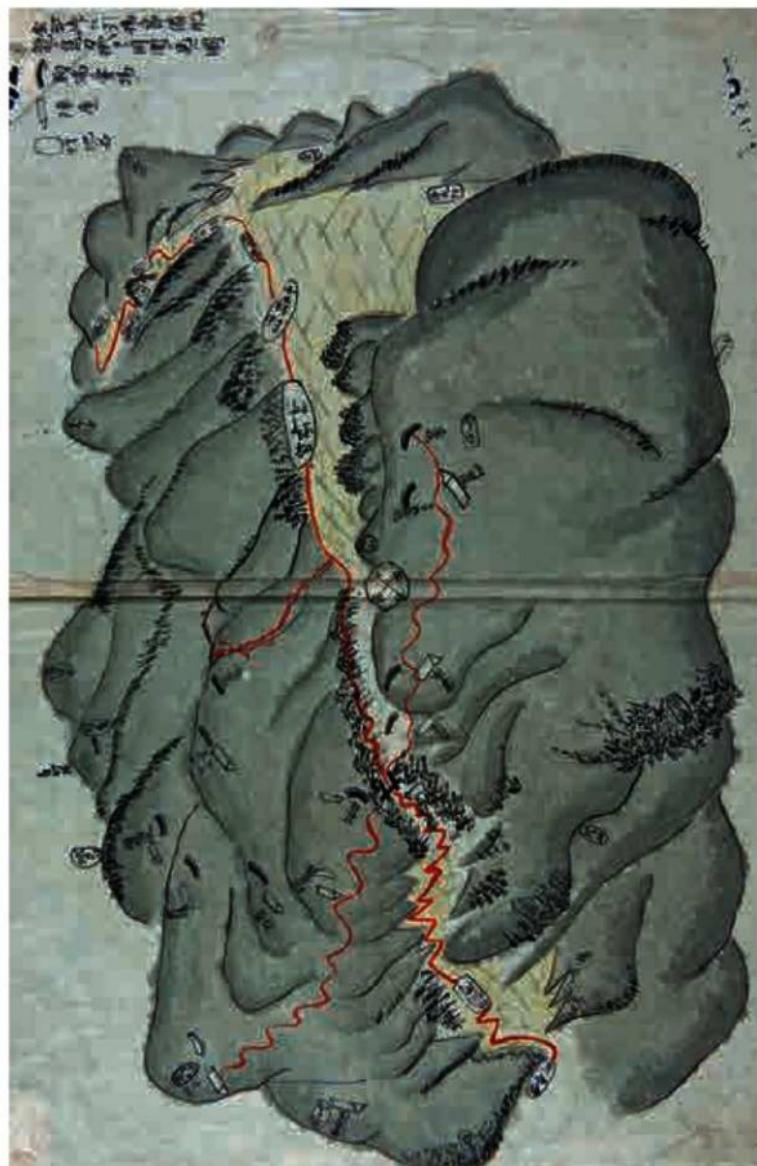
#### ④ 第二次長州戦争時の台場（砲兵陣地）

慶応2年（1866）の第二次長州戦争の小倉口の戦いにおいて小倉藩領の企救郡内の至る所が戦溝に巻き込まれ、長州軍と幕府軍（小笠原軍）とが各所で戦い、野戦のための砲台（砲兵陣地）が数多く造られた。また、小倉藩の小倉城撤退後は、企救郡と田川郡との境にある金辺峠周辺と、企救郡と京都郡との境の狸山において対峙戦となるが、ここでも両軍が砲兵陣地を築いている。詳細については文献史料一覧を参考していただきたい。これらの砲兵陣地については、今回の調査にて、金辺峠周辺、狸山周辺、足立山（霧ヶ峰）について山中を踏査したものの、明瞭に台場とわかる遺構は残されていなかった（足立山山頂には中世山城とは明らかに異なる堡壘状の土盛りがみられたものの砲兵陣地であるかどうかの判断はつかなかった）。おそらく土俵を積んだだけのような非常に簡易な施設であったため、痕跡としては残されていないものとみられる。

しかし、それらの布陣を記した絵図が何点か残されているため、ここではそれらの絵図を紹介することで、説明に代えさせていただく。

小倉城周辺の布陣の様子を描いた絵図としては『豊前小倉領分捕地之図』（北九州市自然史・歴史博物館蔵・図なし）がある。それを見ると、小倉城の東側、足立山から小文字山の西麓の村々に台場（砲兵陣地）が築かれていることがわかる。台場の印の白黒の向きから、小倉城に向けて構築しており、長州方の陣地とみられる。また、足立山の南、小倉南区曾根の竹馬川北岸一帯にも、台場が築かれており、河口部周辺には石垣も築かれている。台場の表記は南を向いた状態で記されていて、狸山方面を攻めるための長州方のものとみられるが、石垣は竹馬川河口の両岸に築かれており、海からの攻撃に備えるように置かれているため、元々の小倉藩の台場かもしれないし、軍事的な施設ではない可能性もある。また、足立山から曾根の一帯にかけての長州方の布陣を詳細に記した絵図面が小笠原文庫にもあり、それには細かな台場名称なども描かれており、照合することで

第339図 「金澤軒江口揚ノ筋編配罫ケ祭ノ力掛ヨリ周囲ヲ見ル図」(福岡県立育英館高等学校附属図書会蔵)



詳しい戦況を窺うことができるが、今後の課題としたい。

また、小倉藩が小倉撤退後に陣を敷いた金辺岬と狸山の図がそれぞれ何枚かずつ小笠原文庫に残されているため、ここではそれを掲載することで説明に代えさせていただく（第339・341図）。

なお、それぞれの現地については、陣や胸牆台場があると推測されたため踏査を行ったが、狸山は現在最も海岸に近い丘陵のみが残存するが、現地は自然地形がみられたのみであった。

また、金辺岬についても、金辺岬から茶臼山、鈴ヶ岩屋などを現地踏査したものの、砲兵陣地に関わるような遺構を確認することはできなかった。後世の改変はほほないような場所ばかりであったため、おそらくは長期間残存しないような簡易な施設であったものと考えられる。



第340図 鈴ヶ岩屋から小倉方面の眺め



第341図 「狸山諸備持場ノ図」(福岡県立育徳館高等学校館陵同窓会蔵)

### (3) 久留米藩

久留米藩では、藩内に遠見番所、藩外ではあるが豊前国企救郡大里に台場を築造している。以下、順次報告する。

#### ① 遠見番所

久留米藩では二種類の番所を築造している。一つは、城下町の出入口や渡し場、領内主要街道筋の要地に「穀留番所」を設置していた。穀留番所は人や船の往来を監視し、禁制物資の藩外持ち出し、いわゆる抜け荷を取り締まる、いわゆる閑所としての役割を果たすものであった。さらにそれらの中でも異国船警戒も役目として付加したものが「遠見番所」であった。年代により設置数や場所は変化しており、詳細は文献史料一覧を参照いただきたいが、すべて含めると、榎津、向島、鐘ヶ江、城島、住吉、小森野、恵利、瀬ノ下の8箇所があげられる。筑後川の川筋を描いた江戸時代の絵図にこれらの遠見番所の記載がみられ、1~2棟の建屋が描かれているが、榎津は門構えの立派なものとなっている。

#### ② 台場

久留米藩領内に台場は築造されることはなかったが、豊前国企救郡大里（北九州市門司区大里）に久留米藩の通称有馬屋敷に付随して台場が築かれていた。文久3年（1863）5月10日に攘夷決行の期日にあわせ、長州藩は関門海峡を往来する外国商船を砲撃したが、その際に築かれたものである。翌4年5月、有馬屋敷とともに小倉藩に引き渡し、久留米藩は大里から撤退している。現在同地は、埋め立てなど開発が激しく、完全に消滅してしまっている。

### (4) 柳川藩

柳川藩には、遠見番所と烽火台が築かれている。以下順次報告する。

#### ① 遠見番所

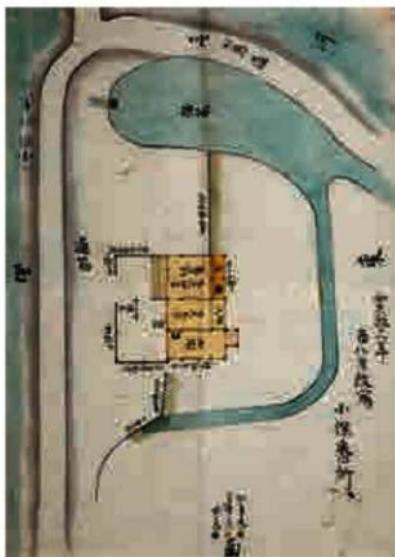
柳川藩では、異国船監視のための遠見番所と、川の往来を監視するための津口番所の二種類の番所が設けられており、また両方の役割を備えた番所も置かれていた。『集書』（江戸中期・「柳川市史史料編Ⅰ」所収）には小保、三瀬新田（一本新田）、沖端宇治、宮永新田、塙塚、中島、黒崎、手鏡、横洲の9ヶ所が掲載されており、さらに間、下二部の2ヶ所も遠見番所とされている。『柳河明証図会』の「宇治番所」の絵図を見ると、番所の前面には船着き場が構築され、柵で囲まれた敷地内に番所の建屋が1棟、旗竿1と突棒・刺股・袖搦の三道具が描かれ、柳川藩の一般的な遠見番所の様相を示している。次頁以下に、遠見番所の絵図及び指図を掲載し、詳述に代えることしたい。

#### ② 烽火台

烽火台については、肥前の多良岳であげられた狼煙を柳川城で受け、それを藩内各所へ伝達するために御牧山（甲塙山・みやま市山川町・みやま市指定史跡）に築かれていた。山頂に烽火台があったものと思われ、かつては頂上に烽火台跡と思われる大きな礎みがあったことが指摘されている（加藤ほか2003）。今回の調査にて現地を踏査したが、その痕跡を見ることはできなかった。ただ、頂上からは柳川の平野を一望することができる。



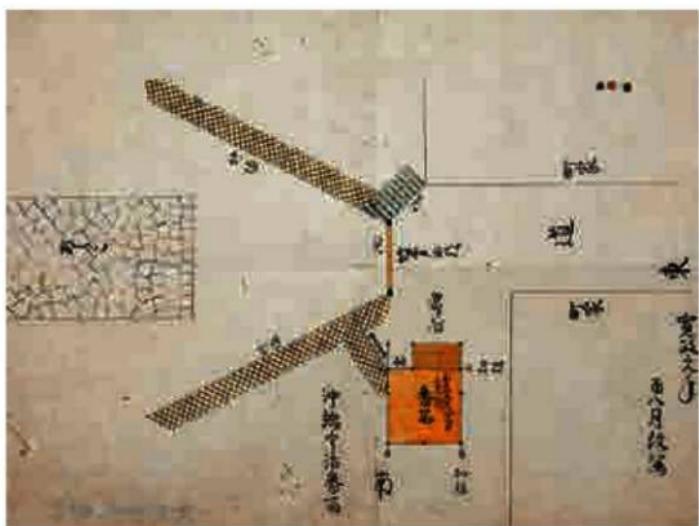
第342図 御牧山山頂の現況



小保御番所絵図（遠見番所）



三瀬新田御番所絵図（遠見番所）



沖端宇治  
御番所絵図  
(遠見番所)

第343図 柳川藩内の番所絵図（1）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



新田御番所絵図（遠見番所）



塙御番所絵図（遠見番所）



中船御番所（遠見番所）

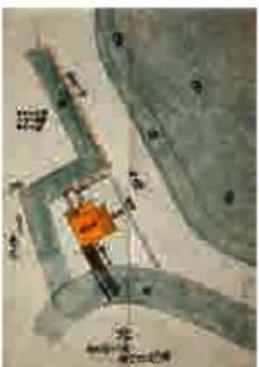


横津御番所（遠見番所）

第344図 柳川藩内の番所絵図（2）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



御坂口御番所繪圖



枝光口御番所繪圖



今古賀御番所繪圖

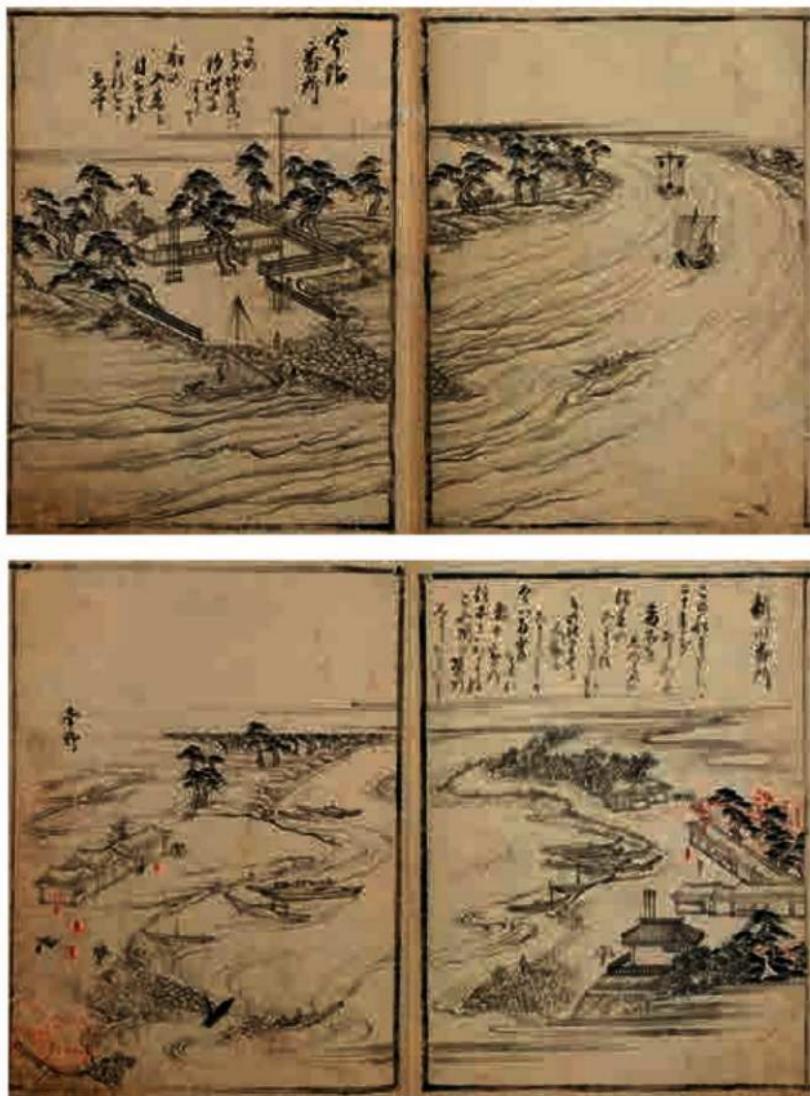


外町口御番所繪圖



沖端津口御番所繪圖

第345図 柳川藩内の番所繪圖（3）（立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供）



第346図 『柳河明証図会』に描かれた宇治番所（沖端宇治番所）と新田番所  
(立花家史料館蔵・柳川古文書館保管・写真提供)

## (5) 中津藩

中津藩は、福岡県内の藩領としては現在の築上郡吉富町・上毛町と、糸島市的一部分が含まれており、遠見番所と烽火台が築造されている。以下、順次報告する。

### ① 遠見番所

福岡県内における中津藩の遠見番所が2ヶ所あり、一つは藩の城下、中津近くの高浜（築上郡吉富町小祝）に置かれていた。山国川河口の左岸に立地し、現在は痕跡を見ることはできないが、周知の包蔵地となっている他、「高浜の番所跡り」という無形民俗文化財も伝えられている。当番所跡では、試掘調査も行われており、江戸期の遺物が出土している（福岡県教育委員会2001）。

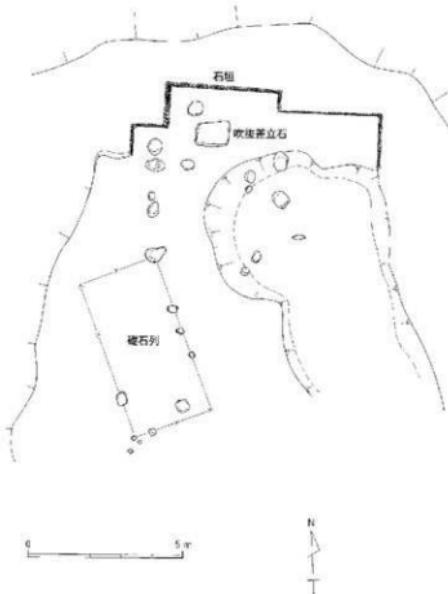
もう一つは飛び地藩領の怡土郡大入村（糸島市大入）の配崎山に置かれている。この配崎山の遠見番所は寛政5年（1793）に設置、文政11年（1828）に一度は廃止されたものの、天保14年（1842）に再び設置された。番所には合図のための吹抜1、三道具ならびに棒2本、遠目鑑1を常備し、異国船を発見した際には合図の吹抜を差し立て、夜間の場合は篝火を焚くことなどが取り決めてされていた。この配崎山番所跡地は平成16年（2004）に調査が行われていて、石垣、礎石列、吹抜差立石、さらには建物に葺かれていた巴文軒丸瓦、草花文軒平瓦や寛永通宝が見つかっており、県内では他には遠見番所の詳細調査例はなく重要な事例と言えよう。



第347図 配崎山遠見番所位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「芥屋」を一部改変して事務局作成）



第348図 配崎山遠見番所石垣・吹抜差立石（上）・礎石列（下）  
(写真提供：糸島市教育委員会)



第349図 配崎山遠見番所平面図  
(二丈町教育委員会 2006 から転載)

## ②烽火台

福岡県内における中津藩の烽火台は、築上郡上毛町吉岡の雄熊山烽火台（吉岡烽火台）である。これは、小倉藩の角田の烽火台から中津城下、あるいは藩領内に造られた長峰尾（大分県中津市野依）、大蔵山（大分県宇佐市院内町北山）へと中継するためのもので、文化6年（1809）に築造された。

【雄熊山烽火台】山国川左岸、標高58mの独立丘陵の雄熊山の山頂部に位置する。山頂部には、直径約25m、高さ約4～5mのマウンド状の土盛りがあるが、それが烽火台の土台である。土盛りの周囲には幅約2m、深さ約1m弱の溝が回り、焚口を除く三方が陸橋状に掘り残されている。

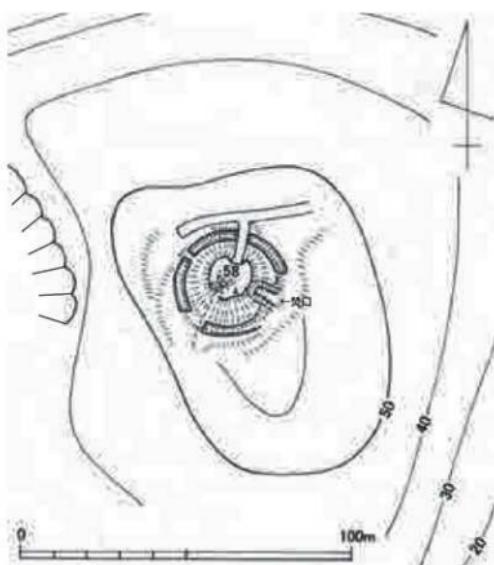
南東側には、焚口があり、花崗岩の切石で組まれた石組みの口の部分が現在も確認することができる。土盛りの頂部は平坦に整形されており、かつては煙道が開いていたものと考えられるが、現在は埋められて石碑が建てられている（現在石碑は倒壊）。またこの土盛り遺構が中世城郭を再利用したものではないかという意見もあるが、自然丘陵上に完全に人工的に造られた土盛りとみられ、再利用とは考えにくい。現状、県内では良好に残存した唯一の烽火台であり、非常に貴重な存在と言えよう。



第351図 雄熊山烽火台全景（上）・焚口部分（中・下）



第350図 雄熊山烽火台位置図（国土地理院作成 1/25,000 地形図「中津」を一部改変して事務局作成）



第352図 雄熊山烽火台現況平面図（事務局作成）

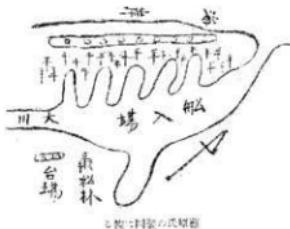
## (6) その他

上記、福岡・小倉・久留米・柳川・中津藩以外にも、他藩のものがあるため最後にまとめておく。一つは幕府領の遠見番所である。『怡土志摩地理全誌』(由比1989)の「城山城跡」の項には「島原乱の後、異国船監視のため、加布里遠見番所がおかれた、改廢の後幕領になって貞享5(1688)年、松国在住の郷足輕八人と本村在住の波呂松右衛門、同伊右衛門らで、遠見番と赤坂番所警備を受持った」とある。出典が不明であるため、確証は得られないが、春日神社(北九州市八幡西区黒崎)が所蔵する筑前国絵図にも、年紀不詳ながら加布里に遠見番所の描写がなされており、存在自体はまちがいないようである。

また、長州藩については第二次長州戦争時的小倉藩との戦いにおける砲兵陣地については既に述べたが、それ以前の台場が福岡県内に存在する。「豊前大里に於ける久留米藩の經營」(浅野1939)には「長藩の小森江砲臺」として「幕末攘夷論の盛なりし頃、長州藩は小森江に海岸砲臺を築造した、其の長さは百間余、高さ九尺、幅三間余であり、其の場所は久留米藩の船入場の前面であつたと云ふ。(古野登三郎談)」とあり、また「米藩の船入場の前面は海岸迄、一帯の松林であつたやうである、現在の製粉及び製糖工場の一部が、久留米屋敷であつたから、長藩の臺場は、両工場の東側であつたやうである。(黙然人氏書翰)」とあり、第353図の挿図を載せている。現在、ニッカウヰスキーの工場となっており、その痕跡は見ることはできない。

### 【参考文献】

- 浅野陽吉1938「大里の有馬屋敷」「郷土研究 筑後」第6巻第12号 筑後郷土研究会
- 浅野陽吉1939「豊前大里に於ける久留米藩の經營」「郷土研究筑後」第7巻第7号 筑後郷土研究会
- 大川市誌編集委員会1977『大川市誌』福岡県大川市役所
- 加藤信一郎・牛島寿人・東竜雄・篠原正英・伸井克己2003『福岡県山門郡山門町谷軒の生活と伝承II』『帝京平成大学紀要』第15巻第2号
- 北九州市史編さん委員会1990『北九州市史 近世』北九州市
- 久留米市史編さん委員会1982『久留米市史』第2巻 久留米市
- 二丈町教育委員会2006『第六章 配輪山・遠見番所の調査』『大里盆御引き』(二丈町民俗文化財調査報告書第4集)
- 服部英雄2003『烽火台に見る長崎街道の軍事的側面—亀井昭陽『烽火日記』および古代烽—』『長崎街道』(福岡県文化財調査報告書第184集)福岡県教育委員会
- 福岡市1968『福岡市史・別巻』福岡市役所
- 福岡市教育委員会1993『能古島』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集)福岡市教育委員会
- 福岡県1997『福岡県史』近世史料編 久留米藩初附(下)
- 福岡県1998『福岡県史』通史編 福岡藩(二)
- 福岡県教育委員会2001『上唐原丁清遺跡I』(一級河川山国川築堤開係埋蔵文化財調査報告6)
- 福岡県教育委員会2016『福岡県の中近世城館跡Ⅲ—壹前地域編—』(福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書3・福岡県文化財調査報告書第254集)
- 守友一隆2012『「漂流貿易」の拠点・藍島一小倉藩の遠見番所が置かれた瀬境の島—』『西日本文化』459 西日本文化協会
- 柳川市史編集委員会1999『地図のなかの柳川・柳川市史 地図編』柳川市
- 大和町史編纂実務委員会2001『大和町史』通史編 上巻 大和町
- 由比章祐1989『怡土志摩地理全誌』1怡土編 糸島新聞社



第353図 「久留米藩の大里船入場」  
(浅野 1939 から転載)

